

手ヲ以テ追捕シ、之ヲ嚴罰セザルニ於テハ該政府ノ責任ハ一層大切ナルモノトス。
此ノ點ニ關スル朝鮮政府ノ怠惰ハ上文記載ノ共謀ニ近隣シ、既行ノ暴行ニ同意ヲ表シタルモノナルヲ以テ、此ノ如キハ戰爭ノ場合ナルモノトス。

既ニ承知スル事實中ニ危難ニ於ケル日本人ニ逃入所ヲ拒絶シタルコト、及ビ王宮城門ノ閉鎖ノ二件アリ。

然レドモ該拒絶ヲ以テ必ラズシモ共謀ノ證ナリト認ムルヲ得ズ。時宜ニ依レバ宮城ノ防禦充分ニ行届カザルヲ以テ、外部ヨリノ侵入及ビ國王ニ對スルノ攻撃ヲ恐レタルヤモ計ラレザルナリ。

而シテ此ノ點ニ就テモ尙ホ事實ノ詳報之レナキガ故ニ、今暫ク猶豫セザルヲ得ズ。唯ダ猶豫スルコトナクシテ爲シ得ベキコトハ二三ノ軍艦ヲ裝備シ、何時ニテモ出立スルヲ得セシムルコト之レナリトス。

東京千八百八十二年七月三十一日

ボアソナーード 手署

宇川盛三郎 譯

第一二號 (前意見書ノ續キ)

昨日ノ意見書ニハ現今朝鮮ニ内訌アルヤト假定シ、果シテ然ルトキハ日本ノ要求ヲ起サンニハ先ヅ秩序ノ恢復スルヲ待ツカ、又ハ譬へ假設ニモセヨ、新政府ノ構成アルヲ待ツヲ以テ適當ナリトスト記載シタリ。

然レドモ該趣旨ハ朝鮮ニ滞在スル日本人ノ保護ニ付キ嚴重ノ處置ヲ施スニ於テ妨ゲナキハ勿論ノ事ナリトス。

而シテ一島嶼又ハ一海港ヲ一時占有スルヲ得ベキヤ否ヤノ御下問アリタリ。

拙者ハ更ニ狐疑スルコトナク之レニ御同意ヲ表スベシ。日本人ノ爲ニ開設シタル二個ノ海港ヲ占有シ、之レニ兵隊ヲ上陸セシメ、市街ノ一部ニ向テ大砲ヲ臨列セシメ、朝鮮ノ兵隊若クハ大砲ヲ同様ノ場所ニ置クコトモ拒絶シ、税關若クハ政府ノ歳入ヲ來ス他ノ淵源ヲ占有スルヲ得ベキハ勿論ノコトナリトス。

東京千八百八十二年八月一日

ボアソナーード 手署

宇川盛三郎 譯

第三號 (前文ノ續)

公使館ノ襲撃及ビ其全部若クハ一部ノ破毀ハ最モ重大ノ事ナリトス。朝鮮政府責任ノ實ヨリ之レヲ見ルトキハ、該事件ハ一名若クハ數名ノ武官ヲ殺害シタル事ヨリハ非常ニ重大ナルコトトス。何トナレバ公使館ハ一外國(日本帝國)ヲ代表スルモノニシテ、云ハ、日本帝國ノ代標ニシテ、朝鮮國內ニ存任スル日本國土ノ一分タルガ如キモノナレバナリ。

譬へ朝鮮政府ハ不注意(怠惰)ヨリハ他ノ罪ナク、更ニ共謀ノ事ナキモノトスルモ、日本公使館ヲ保護スルコトヲ惰リタルノ罪ハ既ニ甚ダシキモノトス。此ノ如キ場合ニ於テハ日本帝國ハ朝鮮國ノ内政ニ干涉シ、以テ自カラ其公使館ヲ保護スルノ理由アルモノトス。

東京千八百八十二年八月一日

ボアソナード 手署

宇川盛三郎 譯

朝鮮ニ對スル處分按

ボアソナード

新到着ノ電報ニ據テ考察スレバ、今回朝鮮ノ暴動タル獨リ日本ニ對シテ發セシモノニ非ラズ、就中其國政府ニ對シテ起セシモノナリ。

今ノ時ニ當テ日本ハ朝鮮政府ト交通スルコト能ハザルヲ以テ、直チニ損害償復ノ抵當ヲ取り、同時ニ釜山、元山ニ在留セル日本人ヲ保護スルノ處置ヲナスコト固ヨリ日本政府ノ權内ニ在ルガ如シ。

其抵當トシテハ江華島(カ)、巨濟島(カ)、松島ヲ占有シテ可ナリ。此數所ニ於テハ必ラズ干戈ノ抵抗ナカルベシ。

然レドモ日本政府ノ併合ノ念アルニ非ラズシテ、唯ダ日本ヲ満足セシムルニ足ルノ結局ヲ見

ルニ至ル迄占有ノ策ニ出デタルコトハ直ニ之ヲ通知スルコトヲ要ス。

遠征ノ總督若シ直接ニ彼政府ニ此通知ヲ爲スコト能ハザレバ、其占有スル島若クハ港ノ民ニ公告シテ以テ日本政府ノ意ヲ明示スルモ不可ナカルナシ。

此占有ノ事並ニ其抵當ノ性質アルコトハ朝鮮ト條約ヲ締結セル諸國、乃チ清、米、英ニモ亦之ヲ通知スルヲ要ス。

此米、英兩國ニ通知スルコトハ決シテ之ヲ等閑ニ附ス可ラズ。然ラザレバ清國ヲ以テ朝鮮ノ上ニ主權ヲ有スルモノト認ムルガ如キ感ナキコト能ハズ。

朝鮮ト英、米兩國間ノ條約未ダ批准ヲ經ザルノ故ニ拘ルコトナカルベシ。何ントナレバ此條約タル既ニ假定スルモノニシテ、且ツ英、米船ノ朝鮮港内ニ在ルモノアルハ疑ヒナキコトナレバナリ。

朝鮮ノ内治ニ干涉シ、其政府ヲ助ケテ國亂ヲ鎮定スルノ事ニ至テハ、朝鮮政府ヨリ救援ヲ請ヒ來ルニ非ラザレバ爲ス可カラズ。然ラザレバ清國ハ己レノ主權ヲ傷ケラレタルモノト思惟スルコトナキヲ得ズ。

日本若シ朝鮮政府ト交通スルヲ得バ、此方ヨリ彼ニ向テ助力ヲ申込ムモ可ナリ。而シテ其言ヲ聽カルレバ朝鮮政府ヨリ救援ヲ請ヒ來レルト異ナル所ナキナリ。

朝鮮事件ニ關スル第五回ノ意見書

或ル事ヲ爲セトノ掛合ヲ載スル所ノ最後^{ユルチマチユマ}ノ照會ヲ送ルトキハ、其掛合ハ事ヲ行ヒ得ル爲ニ十分ナル期限ヲ與フルコトヲ必要トス。

今之ガ例トシテ引用スルヲ得ベキ條規又ハ慣習アルコトナシ。蓋シ其期限タル時機ニ因テ變異アレバナリ。

若シ一名又ハ數名ノ俘虜ヲ取戻サン爲ナラバ、其掛合ノ附與傳達施行セラル、迄ノ期限ヲ與フベキコト論ヲ俟タズ。乃チ最後ノ掛合狀ヲ送ル場所ト俘虜ノ在ル地方トノ間ニ距離ノ遠キコトアルベシ。然ルトキハ之ガ必要ノ時間ヲ見積ルベシ。是レハ時機ニ因テ一日乃至ハ二日又ハ若干時間タルベシ。

若シ亦城堡島嶼又ハ港市ヲ交付セシメン爲メナレバ、更ニ數日ノ期限ヲ與フルコトヲ得ベシ。最後照會中左ノ二ヶ條ノ約束ヲ記載スルトキハ、別ニ開戦ヲ宣告スルヲ要セズ。

第一 上文ニ陳述スル期限ヲ掲載スルコト。

第二 之ニ違フトキハ開戦スベシトノ威迫ノ語ヲ加フルコト。

若シ右ニケ條ノ約束ヲ最後照會中ニ載セザルトキハ、更ニ開戦ヲ宣告スルヲ要スベシ。

最後照會ナル語ハ羅旬語ノ「ユルチモンム」(終ノ義)ヨリ來ル所ニシテ、最後ノ告知ノ謂ヒナリ。故ニ威迫ノ語ヲ含蓄セザル掛合書ニハ最後照會ノ名ヲ附スルコト能ハザルナリ。

千八百八十二年八月三日

ジエ、ボアソ ナード

朝鮮ニ於ケル米國ノ(及ビ英帝國ノ)艦隊提督ニ寄スル公告草按

提督、貴下ハ定メテ朝鮮ニ於テ駐在シタル日本公使館ノ七月末ニ於テ朝鮮臣民ノ爲ニ殘刻ナル強暴ヲ受ケ、並ニ朝鮮政府ハ此亂暴ヲ豫防スルコト能ハズシテ暴徒ヲ鎮壓スルノ力ナキコトヲ知り給フベシ。

今日日本帝國政府ハ朝鮮ノ政府ガ呆シテ亂民ヲ平定シ能フカラ知ルコトニ於テ猶ホ困難ナリトス。

此ノ公告ヲ發スルノ時ハ定メテ事情一變スルナル可シ、其時ハ更ニ此ノ草按ヲ改正スルヲ要ス可シ。

日本政府ハ彼ノ内亂鎮定スルヤ否ヤ、朝鮮政府ニ向テ掛合フノ用意ヲナセル所、要求ニ拘ラ

朝鮮ニ於ケル米國ノ(及ビ英帝國ノ)艦隊提督ニ寄スル公告草按

ズ朝鮮居留ノ國民並ニ其財産ヲ保護シ、並ニ賠償ノ爲メ及ビ兇徒懲罰ニ迅速ナル満足ヲ得ル爲メノ抵當トシテ、保證ノ處分ヲ取ルコトハ日本政府ノ權理及ビ義務ナリトス。

故ニ日本政府ハ本官ノ指揮ノ下ニ、前條兩様ノ結果ヲ得ルニ足ル爲ニ、某港ニ於テ兵隊ヲ送り、及ビ某々島ヲ占領スルコトノ決定ヲナシタリ。

日本政府ハ他ノ國民ニ向ヒ、朝鮮人民ニ此ノ如ク侵犯セラレタル萬國公法ヲ尊重スルコトヲ望ム爲ニ、本官ニ任ズルニ朝鮮ト定約ノ關係アル外國ノ各代人ニ、本官ノ職掌ノ目的ト性質ヲ公告シ、猶ホ何等ノ事情ニ於テモ該國ノ利益ヲ害セザル最大ノ注意ヲナス可キコトヲ以テセリ。亞米利加合衆國ノ（英吉利帝國ノ）政府近頃朝鮮ト定約ヲ爲シタルコトヲ聞キ知り、而シテ更ニ其ノ定約ハ既ニ決定シタルヤ否ヤヲ吟味スルコトヲ要セザルニ依テ、本官ハ日本帝國政府ニ代テ本官ノ職權ニ依リ貴下ニ左ノ事件ヲ告知ス。

- 第一 ハ本官帝國ノ數多軍艦ト其港ニ駐在スルコト。
- 第二 ハ日本人民保護ノ爲メ充分ナル兵力ヲ某港ニ上陸セシムルコト。
- 第三 ハ何某ノ島ヲ占領スルコト。
- 第四 ハ亞米利加ノ國民及ビ其利益ヲシテ此ノ處分ニ付生シタル困難ヨリ避ケシムル爲ニ
要用ナル注意ヲ怠ラザルコト。

本官ノ貴下ニ願フ所ノモノハ、此公告ヲ受取リタル上ハ可成速ニ本官ニ受取書ヲ與ヘラル、コトヲ、本官ハ此時機ニ際シ提督貴下ニ向テ最モ尊榮ナル敬重ヲ表ス。

井上君貴下、今予ハ貴下ノ求メニ應ジテ公告ノ草案ヲ送ル。貴下ハ予ニ向ツテ、其果シテ貴意ニ適スルヤ否ヤヲ表セラルベシ。

予ハ思フ、軍隊ノ長官ハ此ノ事ノ訓條ヲ携帶シタルベシト雖モ、猶ホ同様ナル公告ヲ支那、英、米ノ公使ニ送ルコト然ル可キナリ。是レ文明ノ禮儀ニシテ、且ツ若シ水軍提督ノ朝鮮ニ在ル外國使節ト交通スルコト難キノ事情アル時ニ要用ノ事ナリトス。

若シ朝鮮政府、顛覆セラレザルニ於テハ、朝鮮政府ニ向テ一ノ公告ヲナスコト要用ナリ。

千八百八十二年八月

東京

ボアソナード

清國公使へ答書案並ニ答議

ボアソナード

我 天皇陛下ノ政府ハ、韓國ヨリ受ケタル重大ノ侵辱ニ關シ、清國政府ノ照會ヲ辱クシ、其ノ懇情ヲ銘謝スト雖モ、爰ニ之ヲ拒辭スルノ已ムヲ得ザルヲ告ゲントス。

清國ト韓國トノ間ニ如何ナル政治ノ關係アルヤヲ知ラズト雖モ、日本政府ハ韓國ヲ認メテ一ノ獨立國トナシ、以テ條約ヲ締結シタリ。

故ニ韓國ハ其行爲ノ責任アルベク、且ツ日本政府ノ要償ヲ求ムルハ專ラ韓國ニ於テスベシ。日本公使館及ビ日本國民ノ保護ニ就テハ日本政府獨リ之ガ處辨ヲ爲スベキナリ。

清國政府ニ於テ若シ韓國ヲシテ日本政府ニ對シ、總テ其要求スル所ノ満足及ビ總テ其將來ニ對スル保護ヲ與ヘシメンガ爲メ、其韓國ニ於ケル勢力及ビ親愛ノ關係ヲ使用スルヲ必要ナリト

思考スルニ於テハ、天皇政府ハ茲ニ兩國ノ間ニ益々鞏固ナルヲ望ム所ノ親愛ノ好誼ノ爲ニ新ナル保證ヲ見ルコトヲ喜ブベシ。

條約國ノ内亂ニ於テ、亂臣其政府ヲ顛覆セントスルトキハ、其政府ヲ援ケテ亂民ヲ平定スルコト公法ノ許ス所ナリヤ。

答 固ヨリ許ス所ナリ、但シ向方ノ政府ヨリ援助ヲ乞フヲ許ス。

朝鮮政府ニ於テハ、日本官民暴殺ノ事アリシヲ以テ、日本ニ向テ援ヲ乞フノ緣故アリトス。

若シ支那ヨリ政府ヲ應援スルトキニハ、日本ノ爲ニ將來ノ利益ニ非ラザルヲ以テ、日本ヨリ應援スルコト政略ノ點ニ於テ要用ナルベシ。但シ朝鮮ノ請求ナクシテ、我ヨリ進ンデ應援スルトキハ、支那政府ヨリ何故ニ干涉セシヤ否ヤ云々ノ難問ヲ來スコトアルベシ。

拜啓逐々御下問相成候間議ニ付卑見陳述仕候義拙者ノ喜ンデ從事仕候處ニ御座候。

陳者一昨日愚書拜呈ノ後、傳承スル處ノ一新報ニ據レバ、頃日米國國會ニ於テ遂ニ米韓條約

草案ヲ廢棄致候由、右條約ニシテ既ニ批准相成ラザル上ハ、過日草呈仕候^{チライカシオン}告達^ノ義モ最早此一方ニハ御差出シニ相及ブ間敷、唯ダ米國船艦ニ於テ事ヲ待タンガ爲メ、釜山浦ニ於テ停泊致居候モノ有之候ハ、其司令官ニ一通ノ^{フヴェイオフイシエル}公信^ヲ御差出シ相成候ノミニテ相足り可申ト存候。就テハ今日ト相成申候テハ、告達ヲ要シ候モノハ晉ニ英、清ノ兩國ノミニ可有之ト存ジ候。

韓地變亂ノ義モ其後逐々傳聞仕候處ニ據レバ、不幸ニモ兼テ拙者ノ豫占罷在候通り、國王遂ニ其位ヲ奪ハレ、鎖國攘斥黨遂ニ政柄ヲ執候様相成候由、既ニ此ノ如ク我ニ暴舉ヲ加ヘタル黨類ニ於テ國權ヲ掌握候上ハ、韓國政府ノ責任ハ益々重キヲ加ヘコソスレ、決シテ減少スルコト之レ無シト存候。

抑モ今回ノ暴舉タルヤ、日本ニ對シ萬國公法ノ毀損セラレタルヤ明白ニ有之、且ツ將來韓國ト條約ヲ結バント企テ居候諸邦ニ於テモ、此事變アリタルガ爲メ其ノ之ヲ結ブノ危難アルコトヲ知り、此ノ如キ危害ニ對シ豫メ用意スル事ヲ得ベク候ニ付、歐米各邦一トシテ日本ト感ヲ同ウセザルモノ之レ無カルベクト愚考仕候。

今尙ホ爰ニ論究ヲ要シ候義ハ、彼ノ清國將來ノ暴動ノ如何ノ一點ニ御座候。回顧スレバ既ニ五年以前ノ事ニモ可有之歟、今回ノ事件ニ比スレバ少シク重大ナラザル事件ニテ候ヘドモ、森氏ノ清國ニ差遣ハサレタルコトアリタルヤニ記憶罷在候。想フニ同氏ニ於テハ其節日清關係ノ

性質ニ付、必ラズ多少自得セラレタルコト可有之ト存候。尤モ清國ニ於テモ二年以來逐々外邦トノ交通ニ相馴レ候様相見エ候ニ付、道義上此ノ如キ憎ムベキ事件ノ加擔仕候様ノ義ハ必ラズ其肯ンゼザル所ニ可有之ト愚考仕候得共、日本外交官ノ熱心注意スベキハ此ノ一方ニ可有之ト存候。恐惶謹言

千八百八十二年八月八日

於東京

ボアソナード

韓國事件答議續稿

清國ハ第一ニ日本公使館及ビ日本國民ヲ保護センガ爲メ、第二ニ韓國ノ叛亂ヲ鎮壓センガ爲メ、日本ニ對シ好誼^{ボシ、オフィス}居中ノ照會ヲ致セリ。而シテ其照會書タルヤ、韓國ノ清國藩屬ノ國タルコトヲ引證シテ之ヲ立論セリ。

問者余ニ諮フ、清國ノ此兩者ノ照會ニ對シ余ニ於テハ何等ノ回答ヲ爲サントスル歟ト。

今之ガ答議ヲ草セントスルニ際リ、余モ亦タ問者ニ對シ一問議ヲ發スルヲ得ベシ。曰ク、問者ニ於テハ清國ト扞格矛盾ニ及バントスルモノ歟、將タ亦タ之ニ反シ禮讓恭敬ヲ守ラントスルモノ歟ト。

然リト雖モ問議中本點ニ付政府見ル所ノ如何ヲ指示セラレザルニ依リ、余ハ全ク余ノ一個人ノ思想ニ據テ之ガ回答案ヲ草セントス。

一 清國ノ韓國ニ附スル藩屬國稱ノ當否ヲ論議スルハ余之ヲ無用ノ事ナリト信ズ。蓋シ韓

國ニシテ清國ノ藩屬國タルモ、將タ否ラザルモ、日本ニ於テ何ノ關スル所カアラン。韓國或ハ實ニ清國ノ藩屬國タルベキナリ。然リト雖モ其裏ニ日本ト條約ヲ締結シタル行爲ノ顛末果シテ如何、彼レ實ニ清國ノ幫助ヲ待タズシテ獨リ自ラ之ヲ決行シタルニアラズヤ。而シテ清國ニ於テモ亦タ此際其條約ヲ批准シ、又タ之ヲ保證スル等ノコトヲ爲サバリシニアラズヤ。

韓國ハ極メテ日本ヲ凌辱シタリ、日本ハ彼ニ對シ何時ニテモ其望ム所ノ賠償ヲ要求スベキナリ。

二 日本ハ自ラ其ノ賠償ヲ要求シ、之ヲ徵取シ、及ビ殊ニ自ラ其公使館並ニ其韓國在留國民ヲ保護スルニ充分ノ兵力ヲ有セリ。

三 日本ハ毫モ清國ノ中保ヲ請ハズ、亦タ之ヲ受ケズ、其好誼居中ノ如キモ亦然リ、但シ清國ニ於テ韓國ヲシテ日本ノ正當ナル要求ニ應諾セシメンガ爲メ、其韓國ニ對スルノ勢力ヲ用ユルコトアルヲ見ルハ、日本ノ喜悅スル所ナル旨ヲ告知スルハ之ヲ爲スコトヲ得ベキナリ。

余ノ考按スル所大略右ノ如シ、故ニ余ハ回答案ニ於テ右二末項ノ思想ヲ記入セントス、其ノ文左ノ如シ。

右回答案ノ如クセバ、將來清國トノ交際ヲ破ブルノ虞ナク、善良關係ノ開路ヲ存スベキナリ。故ニ余ハ之ヲ以テ日本最良ノ政略ナルベシト確信ス。

千八百八十二年八月九日

於東京

ボアソナード

韓國事件答議續稿

日本ヨリ韓國ニ其要求ヲ示スニ及ビ、韓國若シ其國ノ清國ノ保護ノ下ニ在ルコトヲ引證シ、若クハ其藩屬封冊ノ國タルコトヲ自認スルコトヲ引證シ、仍ホ此ノ新位地ニ依テ條約ノ改正ヲ請求スルニ至ラバ、日本ニ於テ將サニ何等回答ヲ爲スベキ歟。

余ハ此問議ヲ左ノ二點ニ分テ論ゼントス。

第一點 日本ハ獨立國タル韓國ト條約ヲ締結シタルモノニシテ、其條約ノ干犯ハ此ノ獨立國タリシ際ニ於テ之レアリタルモノナリ。而シテ韓國ハ一己ノ獨斷ヲ以テ其義務ヲ免ル、コト能ハザルモノナリ。故ニ日本ハ韓國ノ使用スル遲滯ノ手段ヲシテ、完償ノ拒絶ヲ爲スモノト認了スルノ旨ヲ回答センコトヲ要ス（即チ拒絶ノ場合ニ於ケルト均シク措置スベキナリ。）

第二點 余ハ韓國ニ於テ若シ其國ハ清國管下ニ在ルハ、確證ヲ示スニ於テハ、日本ハ條約ハ

改正ヲ拒絶スルコト能ハザルベシト信ズ。

日本ハ之ヲ保續スルノ善良ナリト認ムル以上ハ、能ク其ノ最前條約ノ條款ヲ保持スルヲ得ベシ。清國ハ韓國負擔義務ノ繼續者タルヲ以テ、必ラズ之ヲ遵守スベキノ理ナレバナリ。然リト雖モ將來其執行上困難ノ起ルアルトキハ、即チ清國ト關係ヲ有スルモノナルベシ。

韓國ニ於テ眞ニ其獨立國タルヲ自抛シタルニ非ラザレバ、日本ハ韓國負擔ノ義務ヲ免レタルモノト揚言スル能ハズ。

千八百八十二年八月十日

於東京

ボアソナード

朝鮮事件ニ付井上議官「ボアソナード」氏ト問答記

(明治十五年八月九日)

(問)

支那政府ハ朝鮮ノ事ニ關シ軍艦並ニ兵隊ヲ派遣シ、其ノ目的ハ一ハ朝鮮ノ暴徒ヲ鎮壓シ、一ハ支那ノ屬國ニ在ル日本公使館ノ亂暴ニ遭ヒタルヲ保護スルニ在ルコトヲ本邦駐在ノ同國公使ニ電報セリ。外務省ハ右ノ報知ヲ今日接收セリ。

右ニ付キ御意見ヲ承り度、就テハ一々問題ヲ設ケテ質問スベシ。

第一 支那ハ既ニ自ラ朝鮮ヲ屬國ト認メ、朝鮮國ノ内政ニ干渉セントス。然レバ日本ハ之ニ對シ如何ナル處置ヲナスコト最モ適當ナルカ。

(答)

予ノ意見ニ據レバ、支那ガ日本ヲ保護スル云々ニ對シテハ、其厚意ハ謝スル所ナレドモ、元來日本ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、現今ノ條約モ支那ノ手ヲ經由セズ、全ク朝鮮ト相對ニテ締結シ、其公使ノ如キモ北京駐紮ノ公使ニ於テ之ヲ兼ネタルモノニアラズ、日本ハ特ニ朝鮮ノ京城ニ公使館ヲ置キ、公使ヲ駐劄セシメテ之レト交際シ、而シテ始メヨリ曾テ支那ノ干涉ニ預カラズ。今回ノ件ニ於テ日本ハ敢テ支那ノ保護ヲ假ラザルモ、我レハ自ラ我公使館及ビ人民ヲ保護スベシト云フテ可ナリ。尤モ言辭ノ過激ニ失スルハ然ル可ラズ、但シ我公使館並ニ人民ハ我レヨリ之ヲ保護スベシ、幸ニ費神スル勿レト答フベキノミ。去リ乍ラ我が要求ハ我が満足ヲ得ルニ止マル故ニ、支那ト朝鮮トノ間ニテ相談シテ爲スコトナラバ、我ハ之ニ關セズシテ可ナリ。但シ支那政府ガ我國ト朝鮮トノ間ニ立入ルコトハ許スベカラザルナリ。

(問)

日本ト朝鮮トノ關係ハ是レ迄曾テ支那ノ干涉ヲ假リタルコトナケレバ、今回ノ事件ニ於テモ亦支那ノ干涉ヲ要セザルハ無論ノコトナリ。然ルニ今度ノ通知ニ答フルニハ、單ニ「セルフ、プロテクション」(自ラ保護スルノ意)ノ趣意ニ止メテ、我が公使館並ニ人民ハ我ヨリ之ヲ保護スベシ云々ト答フル方ヲ宜當トスルカ、將タ我國ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、是レ迄朝鮮トノ交際

ニ於テ曾テ支那ノ關係ナキコトト、「セルフ、プロテクション」ト兩方ノ道理ヲ並ベテ答フルヲ可トスルカ如何。

(答)

兩方ニ掛ケテ返答スルヲ可トス。我が公使館並ニ人民ハ我レヨリ之ヲ保護スベキノ付、彼レノ干涉ヲ要セズト云フハ餘リニ角立チテ言辭ニ趣味ナシ。故ニ事ヲ和ゲテ好結果ヲ見ント欲スレバ、言葉ヲ兩方ニ掛ケ、我が求ムル所ハ既ニ朝鮮政府ニ向テ要求シアレバ、夫ニテ満足ノ結果ニ至レバ可ナリ、併シ支那ヨリモ我が満足ノ結果ニ至ルコトニ更ニ盡力アレバ大ニ満足スル所ナリトノ趣意ニテ答フベシ。

(記者云ク) 此答ヘハ問者ノ趣意ヲ誤解シタルモノニテ、兩方ノ道理ヲ並ベテ答フル云々ノ問ニ對シ、適當ノ返答ニアラズ、併シ答ヘノ趣意ハ「自分ハ自カラ保護スベシ、汝ノ世話ヲ要セズト只ダ一粹氣ニ言放ツハ、徒ラニ支那ヲ激サスルノミニテ益ナシ、寧ロ自分ハ自ラ保護スルト云フコトハ實際ニ行フコトニテ、成ル可ク平和ヲ主トシ、支那ト朝鮮トノ間ニテ爲スコトハ差支ナキニ付、支那ヲシテ此事ノ好結果ニ至ルコトニ幾分カ盡力セシムルニ言葉ヲ掛ケ、婉曲ニ返答スルヲ可トスル」ノ旨意ナリ。

(問)

茲ニ一ノ反對説アリ、成程我ハ我ガ満足ノ償ヲ得レバ今度ノ事ハ濟ムベシ。併シ將來ニ向テ支那ガ朝鮮人タルコトヲ日本ニ於テ認ムルコトニナリ、是レ迄日本ハ朝鮮ト條約ヲ結ブモ全ク朝鮮ヲ獨立國ト認メ、支那ニハ關係ナキニ此ノ如キ關係ヲ生ズルハ不可ナリ。此ノ事ニ付貴説如何。

(答)

夫等ノ反對説アリトモ、決シテ將來ノ障害トハナラザルベシ。何トナレバ支那ガ立入ルト云フモ朝鮮ノ爲ニスル迄ニテ、日本ノ關知スル所ニアラザレバナリ。且ツ假ヘバ今魯、米政府ガ立入りテ朝鮮又ハ日本ノ爲メ盡力スルトセンカ、一概ニ之ヲ謝絶スル譯ハナカルベシ。支那ガ立入ルモ亦同様ナリトス。

(問)

然レバ支那ヨリ豫メ通知シテ立入ルトキハ如何。

(答)

日本ハ朝鮮政府ニ向テ満足ヲ求ムルモノニテ、支那政府ニ向テ要求スル所アルニ非ラズ、故ニ日本ト朝鮮ノ間ニ立入り、支那政府此ノ事ニ關係スルヲ要セザルコトナレバ、只ダ打捨テ置キテ可ナリ。併シ支那政府ガ單ニ朝鮮政府ノ爲ニスルハ可ナリ。今一例ヲ舉グレバ、臺灣ノ件ノ如キモ、英公使ノ盡力ニテ支那政府ハ到底五十萬「テール」ヲ日本政府ニ出シ事濟ニ至レリ。去リ乍ラ英國ハ支那ニ於テ本屬ノ權ヲ有スト云フ者アルコトナシ。且ツ支那ヨリ照會アルニ至テハ最早時機ヲ後レタルモノナリ。支那政府ガ照會ヲ發スル前ニ於テ、日本政府ハ朝鮮政府ニ要求ヲ申入レ置カズデハ相成ザル事ナリ。

(問)

臺灣ノ件ニ於テ英公使ノ盡力云々ハ、今朝鮮ノ事件ニ付テ支那政府ガ干涉スルトハ少シク其例ヲ異ニセリ。何トナレバ支那ハ朝鮮ヲ認メ屬國トスル故ニ之ニ干涉スト明言シタリ。

(答)

夫レニテモ差支ナシ、日本ハ支那ニ頓着セズシテ可ナリ。決シテ心配スルニ及バズ。日本ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、日本ノ朝鮮ニ對スルハ全ク他ノ外國ニ於ケルト同様ナリ。日本ハ朝鮮ト實際スルニ於テ、曾テ支那ノ手ヲ經タルニ非ラズ。日本ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、自ラ行イテ條約ヲ訂結シタルモノナレバ、何處迄モ支那ノ干涉ハ頓着セズ、一直線ニ進ミテ朝鮮ニ對シ満足ヲ求メテ可ナリ。例ヘバ土耳其格ノ埃及ノ關係ニ於ケルハ、支那ト朝鮮ノ關係ニ於ケルヨリ更ニ大ナリ。然レドモ埃及人ガ暴舉ヲナシタリトテ、英、佛ハ土耳其格ニ頓着セズ直ニ埃及ニ向テ處分セリ。故ニ朝鮮ノ事件ニ付支那ヨリ喙ヲ容ル、モ、支那ニハ用ナシト云フテ頓着セズシテ可ナリ。

(問)

支那ヨリ既ニ照會アルニ至テハ、最早時機ヲ後レタルモノナリ云々ノ貴説アリ、然レバ日本政府ニ於テ若シ時機ヲ後レ、支那政府ニ先ンゼラル、コトアルトキハ如何カ處置スベキカ。

(答)

今日ハ戰ヲモナシ得ベク、又益々親和ヲ固フスルコトヲモナシ得ベシ。若シ日本政府ノ意ハ

主戰ニ在レバ、此方針ニ從テ計畫ノ順序ヲ立テザルベカラズ。若シ又主和ニ在ルカ、亦此ノ線脈ニ隨テ事ヲ議セザルベカラズ。故ニ戰ヲ主トスルト和ヲ主トスルトニ依テハ大ニ其順序ヲ異ニスルナリ。敢テ問フ、日本政府ノ主意ハ開戰ニ在ルカ、將タ和親ニ在ルカ。

(井上云ク)

此等ノ機略ハ予モ之ヲ知ラズ、且ツ和戰ノ機ハ專ラ支那ノ事情ニ關スルコトナリ、而シテ今日支那ノ事情ハ未ダ分明ナラザルモノトス。

(ボアソナード云ク)

貴答ノ趣御尤モナリ。然ルニ今回ノ事ハ所謂雨降りテ地堅マルガ如ク、之ニ依テ亦支那トノ實際ハ益々親和ヲ厚フスルニモ足ルベシ。請フ試ニ予ノ鄙見ヲ陳述セン。

予ノ考ヘニテハ、現今日本ノ最モ恐ルベキモノハ魯國ナリ。支那ハ日本ト戰ヲ開クトモ魯國程ノ毒害ヲナスノ意思ナシ。何トナレバ支那ハ日本ト天然ノ同盟國ナリ。支那ハ日本ト人種、文字、風俗、宗教ヲモ同ウスルノ國ナレバナリ。到底歐洲ニ對シ東洋ノ勢威ヲ張ランニハ日支兩國協同スルニアラザレバ能ハズ。且ツ今日歐羅巴人ノ支那、日本ヲ視ル常ニ輕蔑シテ一等ヲ

下シ、決シテ同等視セザル程ノ有様ナレバ、日支ノ協同ハ尙ホ更ニ緊要ノ事ナリ。故ニ現今ノ處ニテハ到底日支協同ノ目的ヲ以テセザレバ不可ナリト思惟ス。且ツ今日魯國ガ朝鮮ニ手ヲ出サルハ、畢竟國內虛無黨ノ困難アルガ爲メナリ。若シ一朝内治ノ整フニ至ラバ忽チ朝鮮ニ手ヲ出スヤ必セリ。既ニ北ハ「カラフト」ヲ取レリ、朝鮮國ノ港一ツヤ二ツハ忽チニ取ルベシ。

今支那ト日本トノ間ニハ互ニ相好ミセザルノ情アリ、其故ハ究竟支那ノ方ニ嫉妬心アリ、日本ハ小國ナレドモ進歩ノ敏速ナル遠ク支那ノ及ブ能ハザル所アレバナリ。去リ乍ラ宇内ノ大勢上ヨリ觀察スルトキハ、日支兩國ノ東洋ノ關係ニ於ケル、到底此ノ兩國ニシテ離ルレバ亞細亞破レ、合スレバ歐洲ニ拮抗スルヲ得ベク、兩國ノ協同ハ最モ肝要ナリト謂フベシ。今若シ日本ニ於テ政治家ノ大家出デ、能ク日本、支那、朝鮮三國ノ同盟ヲ結ブニ至ラバ、俗ニ所謂鬼ニ金棒ナルモノニシテ、魯國ニ對スルモ決シテ恐ル、ニ足ラザルベシ。

(問)

爰ニ一ノ問題アリ、日本ニ於テ極ク困ルコトハ支那ハ常ニ公法ニ係ハラズシテ漫然一ノ辭柄ヲ把持ス。今度朝鮮ノ事件ニ於テ此ノ電報ニ云フ所ノ如キ亦其轍ニ依ラントスルニ外ナラザル

ベシ。

臺灣ノ件ノトキモ然リ、琉球事件ノ時分モ亦然リ、其辭柄トハ他ニアラズ、支那ト日本ノ條約第二款ニ、双方ノ邦土屬邦互ニ相侵越セズトアルヲ以テ、終始之ヲ把テ論ズルナリ。故ニ今朝鮮ノ如キモ日本若シ兵ヲ引イテ朝鮮ニ到レバ、即チ支那ノ屬國ヲ侵シタリト云ヒ、以テ論難セントスル積リニ相違ナシ、其時ハ如何シテ可ナルカ。

(答)

夫レハ差支ヘナシ。若シ支那ニ於テソソナコトヲ云フモ、ソレハ畢竟彼ノ都合ニテ云フコトニテ、日本ニ於テハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、支那ノ世話ニ預カラズシテ條約ヲ結ビシニアラズヤ。故ニ若シ日本ニ於テ支那ノ邦土内ニ立入り侵ストキハ、格別ナレドモ、朝鮮ハ夫レトハ異ナリ、支那ニ於テ彼レ是レ云フハ差構フニ及バヌコトナリ。爰ニ今貴問ニ對シ陳述シタルコトヲ總括スレバ、日本ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メテ條約ヲ結ビ、是レマデ朝鮮トノ交際ニ於テ専ラ支那政府ノ手ヲ經タルコトナシ。故ニ今日支那ガ干涉ヲナスモ我ハ之ニ頓着セズシテ可ナリ。日本ハ支那ト咄ヲナスニアラズ、朝鮮ニ向ツテ満足ノ償ヲ要シ、此局ヲ結バント欲スルナリト云フニ在リ。

併シ予ノ考ヘニテハ、日本ハ動モスレバ支那ヲ敵視スルノ狀アリ、是レハ極メテ得策ニアラズ。

支那ハ魯國ニ對シテハ「クルジヤ」ノ一件モアリ、魯國ヲ怨メリ、故ニ今日本ハ支那ト親和シ易シ、到底日支兩國協同シテ歐洲ニ對スルヲ得策トナスナリ。

(問)

半屬國タリトモ、仍ホ外國交際條約ヲ結ブノ權アリヤ、是レヲ再言スレバ、外國ト條約ヲ結ブハ自主ノ證徴トスベキヤ。

若シ半主半屬ノ邦ニシテ外國ト條約ヲ結ブトキハ、其條約國ト紛難ヲ生ジタルトキニハ其ノ保護國ハ是レニ干涉スルノ權アルベキヤ。

朝鮮事件ニ付テノ意見

半屬國(又ハ此ノ如クニ主張セラル、國)ノ締結セル
條約ニ關スルニ疑件ニ付テノ應答

(第一問)

一般ニ半屬國ハ政事上ノ性質ヲ有スル和親條約ヲ結ブノ權ヲ有セザルモノトス。若シ然ラザルニ於テハ半屬國ニ對シテ管轄權シユスレンテイヲ有スル所ノ國ハ、其ノ盟約アリヤンスヨリ一層有力ナル他ノ盟約ノ爲ニ其ノ管轄權ヲ失フノ危險アルベシ。

故ニ某國(乙)ニ於テ丙國ノ故障モナク、干涉モナクシテ他ノ國(甲)ト和親條約ヲ專結スルノ單ナル事實ハ、即チ乙國ノ獨立タルコトヲ推定プレレンツシオンスルヲ得ルモノトス。

朝鮮事件ニ付テノ意見

或ハ乙國ハ丙國ノ屬國ナルモ、此レガ監護ヲ免カレンガ爲ニ外國ト條約ヲ專結スルコトアリ。若シ一方ノ條約國(甲)ニ於テハ乙國ノ丙國ニ屬スルコトヲ知ラズシテ、善意ヲ以テ之ト條約ヲ結ビタルトキハ、甲國ヲシテ乙國ノ丙國ノ附庸タリ、且ツ該附庸ノ義ハ條約締結ノ同時代マデ湖ルモノナルコトノ證ヲ確知セシムルマデハ、甲國ハ其條約ヲ維持シ之ヲ履行セシムルコトヲ得ルモノトス。

前ニ述ブル所ノ場合ニ至ラザル迄ハ、欺キヲ受ケタル所ノ甲國ハ依然條約ヲ有シ、該條約ノ違背ヲ訴フルコトヲ得ベシ。

埃及ノ位置ハ此ノ問題ニ付キ一先例ヲ與フルモノトス。土耳其ニ對シテ埃及ノ附庸國タルコトハ確然ナレドモ、世ノ未ダ詳ニ知ルコトヲ得ザル所ノモノハ(埃及ト土耳其トノ間ニ秘密條約アルガ故ニ)埃及ハ何レノ點マデ外國ト直チニ條約ヲ專結スルヲ得ベキヤ是レナリ。

埃及ハ佛蘭西及ビ英吉利トハ屢々條約ヲ締結シタリ。故ニ此等ノ諸強國ハ其條約ノ或ル條規ヲ履行セシメン爲ニ、之ガ保證ヲ得ン爲ニ、又埃及ノ財政ヲ整頓セン爲ニ、埃及ノ政務ニ屢々干涉シタルコトアリ。

故ニ此ノ疑件ニ付テハ確定シタルノ法則アラザルモノトス。

(第二問)

若シ半屬國ニ於テ外國ト條約ヲ專結シ、該半屬國ト他ノ條約國トノ間ニ重大ノ紛難ヲ生ズルトキハ、管轄國若クハ保護國ハ該條約締結ノ時ニ於テ其ノ權理ニ付キ抗論ヲ爲シタルニアラザレバ之レニ干涉スルコトヲ得ズ。苟クモ該條約ニシテ一切秘密ナルコトナク、且ツ其執行ヲ經タルトキハ、管轄國若クハ保護國ト自稱スル所ノ丙國ハ其沈黙シタルコトヲ以テ既ニ該條約ヲ認許シタルモノトス。故ニ該條約將來ノ執行ニ付キ、及ビ該條約ノ違背ニ對スル賠償ニ付キ之ニ干涉スルコトヲ得ズ。

然レドモ保護國ニ於テハ現爭兩國ノ間ニ懇親上ノ干涉ヲ爲スヲ得ルハ當然ナリトス。保護國ハ又附庸國ヲシテ其約束ヲ完全ニ履行セシメン爲メ之ヲ催促スルコトヲ得ベシト雖モ、現爭兩國ノ談判ヲシテ其紹介ニ依ラシムベシト要求スルコトヲ得ズ。若シ此ノ如クスルニ於テハ、被害國ヲシテ又緩慢詐謀ノ害ヲ受ケシムルノミナラズ、其内ニ破約國ヲシテ抗抵ノ方便ヲ構成スルコトヲ得セシムルニ至ルベシ。

此ノ問題ヲバ此ノ如クニ理論、及ビ法理ノ點ヨリ驗究スルハ然ルベカラズト思考ス。萬國公

法ハ、數多ノ國ニ於テ民法ノ如クニ編成シタルモノニアラザルナリ。

此ノ問題ニ關スルノ先例トスルニ足ルモノナシ。何トナレバ日本ト朝鮮トノ關係及ビ朝鮮ト支那トノ關係ニ同様ナル兩個ノ情況ハ世ハ未ダ之レアラザル所ナレバナリ。

日本ハ朝鮮ト支那トノ關係ニ付テハ已ニ充分^{ミヨク}ニ之ヲ知ラレタル筈ナリ。何トナレバ日本ハ今ヲ去ル六年前ニ此ノ事情ヲ知ランガ爲ニ特ニ北京ニ特命全權公使ヲ派遣セラレ、又之レト同時ニ侮辱ノ謝罪^{サチスフアクシオン}ヲ得ン爲ニ朝鮮ニモ公使ヲ派遣セラレタレバナリ。遣清特命全權公使ハ歸朝ノ節其使命ニ付キ復命書ヲ編纂セラレタル筈ニテ、該復命書ハ外務省ノ記録ニ貯藏セラル、所ナルベキ筈ナリ。

東京千八百八十二年八月十三日

ボアソナーード手署

宇川盛三郎譯

國際法質議四則

第一 問

甲國乙國ニ服從シテ其藩邦^{ヴァアサル}ト爲リタル時ハ、前キニ獨立國ノ資格ヲ以テ條約ヲ結ビタル丙國ニ對シ詐僞ノ罪ヲ負ヒ其責ヲ免カル、能ハザルベキカ如何。

答 議

若シ此服從^{スニシオン}ニシテ甲、丙兩國間從前ノ條約ヲ放釋セシメザルベカラザルニ於テハ、甲國ハ果シテ詐僞ノ情アリトスベシ。然リト雖モ邦國藩屬ノ結果タル、此ニ出デズ、其ノ上國^{シユズラン}タルモノ從前ノ條約ヲ尊重シ、其ノ藩邦ヲシテ之ヲ履行セシメザル可ラザルナリ。

全ク純全^{アネクシオン}ノ併吞ニ係ルモノト雖モ、其ノ結果亦タ相同ジ。從前ノ條約ニ依テ甲國ノ舊地ニ

關シ丙國ニ附與セラレタル權利ハ(開港若クハ開國ノ如キ)依然同一畛域内ニ保存セラルベシ。故ニ此事ニ就テハ一モ正當ナル故障ノ申立ツベキモノナシ。

第二 問

同上ノ場合ニ於テ丙國、甲國ト平等ノ條約ヲ結ブ時ハ、自國ノ面目ヲ辱シムルコトナキヤ如何。

答 議

先ヅ第一ニ余ハ丙國ノ甲國ト平等ノ條約ヲ結ブハ已ニ爲シ得ベカラザル事タルヲ信ズ。丙國ハ將來ニ於テ乙ナル上國ヲシテ其新タニ甲國ト結ビタルノ條約ヲ批准セシメザルベカラズ。

若シ然ラザルニ於テハ、乙國ヲ以テ上國トスルモノ全ク虛名ニ屬スベキナリ。此ノ如ク同一時ニ甲乙兩個ノ國ト條約ヲ結ブノ須要タルハ決シテ丙國ノ面目ヲ辱シムルコトナシ。即チ彼ノ後見人ノ許可ヲ得タル幼者、若クハ夫ノ許可ヲ得タル婦ト契約ヲ爲スト一般ニシテ、此ノ幼者若クハ婦タルモノハ他人ヨリ隨意ニ變更シ得ベカラザル地位ヲ有スルモノナルヲ以テ、人ノ其地位ニ從フテ契約ヲ爲スニ於テ亦タ何ノ面目ヲ辱シムルコトカアラン。

然リト雖モ茲ニ例外ニ彼ノ上國タルモノ、其藩邦ノ新條約ニ關與スルコトヲ爲サバトキハ、丙國ノ面目ヲ損壞スルコトナキノミナラズ、余ハ寧ロ乙ナル上國ノ甲、丙兩國ニ對スル厚特クイルトワッノ所爲並ニ信任及ビ平等ノ懲憑ヲ見ルナリ。

第三 問

同上ノ場合ニ於テ甲國ヲ助ケテ乙國ノ羈軛ヲ脱セシメンガ爲ニ丙國ノ執ルベキ方便如何。

答 議

國際法ニ反セルノ事業ヲ行フニ一定ノ方便アルコトヲ知ラザルナリ。

蓋シ甲國ノ乙國ノ保護プロテクシヨニ倚賴シテ之ニ臣隸スルノ以前ハ、原ト不羈獨立ノ一國タリ、故ニ又其國運デスチネノ主宰タルコトヲ得タリ。夫レ然リ、故ニ一朝其ノ自國ノ小弱ニシテ隣邦ニ抗敵スルハ難キヲ悟リタルニ於テハ、其ノ最モ信任スル所ノ一國若クハ其最モ恐怖スル所ノ一國ノ保護ヲ仰グコト一ニ其意ノ隨フ所ニシテ、決シテ他邦ノ喙ヲ容ルベキ所ニ非ラザルナリ。

他邦若シ之ニ依テ忿恨デスノ意ヲ顯スコトアルニ於テハ、是レ己レ之ガ保護ノ權ヲ執リ、又ハ此弱邦ヲ併吞センコトヲ期望シタルノ内心ヲ示スニ外ナラザルナリ。

以上陳ズル所、歐洲ニ就テ之ヲ言フニアラズ、歐洲ニ在テハ此ノ如キ保護ハ必ラズ他邦ノ故障ヲ起スコトアリ、何トナレバ此ノ如キノ變更ハ所謂歐洲均勢ナルモノヲ破壞スルヲ以テナリ。而シテ此ノ均勢ヲ破壞セントスルモノアルニ於テハ、必ラズ歐洲各國ノ爭議ヲ受クルコト人ノ已ニ久シク認諾スル所タリ。是レ歐洲各邦ノ爲ニ將來ノ安寧ニ關スルノ問議タルニ依ルナリ。

然リト雖モ此事ニシテ若シ東洋ニ在ラシメバ、事其レ此ノ如ク重大タラザルベシ。而シテ内國ニ於テ其未來ニ於ケル萬一ノ危險ヲ豫防スル爲ニ、却テ現在ノ戰爭ヲ開クコトアルニ於テハ、實ニ冒險ノ甚シキモノト云フベキナリ。

蓋シ東洋ニ在テハ維持スベキノ均勢ナシ。何トナレバ古來未ダ嘗テ此事ナケレバナリ。今東洋ニ一大帝國ト一小帝國トアリ、而シテ其小ナルモノハ勇敢ニシテ且ツ其大ナルモノニ比スレバ今時ノ學術ニ長ジ、又環海ノ天嶮ニ據レルヲ以テ、未ダ曾テ其獨立ノ國體ヲ侵逼セラレタルコトナシ。大國ノ畏ルベキハ決シテ其遠海ノ一地方ヲ併吞スルノ故ニ在ルニアラザルナリ。

第四問

同上ノ場合ニ於テ丙國ハ乙國ニ對シ其甲國ニ於ケル上國ノ關係ヲ詰ルコトヲ得ベキヤ如何。

答 議

丙國若シ開戰ノ口實ヲ失シタルニ苦ミ、更ニ他ノ口實ヲ得ント欲スルニ於テハ、是レ亦一ノ時機ナリトス。而シテ又此ノ如キ冒險ノ行爲ヲ執リテ其前日ノ靜寧ニシテ貴重ナル剛毅ヨリ生ジタルノ其結果ヲ破壞セントスルニ於テハ、是レ亦タ其意ノ隨フ所ナリ。國ノ正義及ビ道理ノ情意ヲ失シ易キ亦タ人ト異ナルコトナキナリ。

附 言

余ノ丙國ニ勸告スベキノ一事ハ他ニアラズ、若シ甲乙兩國ヨリシテ其上國トナリ藩邦トナルノ事實ヲ來報スルニ至テハ、丙國ハ飽クマデモ其舊約ハ付與スル權利ハ明文ニ依リ之ニ答フルハ事是レナリ。將來必ラズ彼ノ上國ヲ外ニシテ新條約ヲ爲スノ權利ヲ存セントスルハ如キハ余ガ勸告ヲ肯ゼザル所ナリ。何トナレバ是レ宜シク許スベカラザルノコトニシテ、若シ上國ニ於テ其權利ヲ主張スルニ於テハ、丙國ハ必ラズ之ヲ承認スルカ、又ハ無名無義ノ戰端ヲ開クノ一ニ居ラザルベ

千八百八十二年十月十九日

於東京

ボアソナード

恒^ス守^ト局^ラ外^リ中^リ立^ベ新^ル論^ト

歐洲ノ國際法ニ於テ恒守局外中立ニ關スル適則ヲ求メント欲スルモ蓋シ得ベカラズ。其ノ應用ノ極メテ稀少ニシテ、未ダ以テ本件ニ對スル普通ノ論議ヲ編定スルニ足ラザルニ依ルナリ。

余ハ今歐洲ニ於テ恒ニ局外中立ヲ守ルノ國唯ダ四個アルヲ見ル。瑞西、白耳義、塞爾維、及ビ塞屈遜堡是レナリ。而シテ其瑞西ノ如キハ局外中立ヲ守ル日既ニ久シト雖モ、白耳義ノ如キハ千八百三十一年ニ於テ之ヲ立定シ、塞爾維ハ千八百五十六年ニ於テ、塞屈遜堡ハ千八百六十七年ニ於テセリ。

是等諸邦ノ局外中立ヲ立定シタル所以ノモノハ、蓋シ其國ノ利益ヲ圖ルニ出デタルヨリハ、寧ロ主トシテ隣邦ニ於テ他邦ノ損害ト爲ルベキ絶大ノ利益ヲ其國ニ發見シ、以テ之ニ加フルコトアラントスルノ併吞ヲ豫防スルニ出デタルモノトス。

此ノ局外中立ノ立定タル當時ノ諸大邦タルモノ必ラズシモ皆盡ク之ニ參與シタルニアラズ。

而シテ其ノ最モ奇トスベキハ局外中立ノ宣告ヲ受ケタル邦ノ常ニ皆其ノ會議ニ臨マザルコト是レナリ。塞爾維ノ千八百五十六年ノ巴里條約ニ臨マザリシガ如キ是レナリ。而シテ塞爾維ノ如キモ千八百六十七年ノ倫動公會ニ臨マザリシハ余ノ信ジテ疑ハザル所ナリ。

白耳義ノ如キモ亦其千八百三十一年ノ公會ニ臨マザリシハ余ノ堅ク信ズル所ニシテ、此際白耳義ノ分レテ以テ立國シタル和蘭ニ於テモ、其謀圖及ビ異議アルニ拘ラズ該公會ニ臨マザリシハ亦余ノ疑ヒヲ容レザル所ナリ。

此ノ如キ場合ニ於テ臨會セザル大邦ハ其ノ臨會ナクシテ決定セラレタル約款ニ拘束セラレザルベキハ理ノ當ニ然ルベキ所ニシテ、之ヲ以テ立テ、原則ト爲スモ不可ナカルベキナリ。然ルト雖モ其ノ局外中立ノ公許若クハ默許セラレタルノ後、永久ノ日時ヲ經過シタルニ於テハ、是レ即チ諸大邦ノ之ヲ承認シタルノ證タリトスベシ。

第二等邦國ノ如キモ仍ホ一層局外中立ヲ遵守ス。何トナレバ彼レ默々ニ此ノ局外中立ヲ承認シタリシノミナラズ、其ノ冒險ノ意ナキ以上ハ之ヲ侵犯シ得ベカラザルヲ以テナリ。

平時ニ於テハ是等ノ難問ノ起ルコトナシト雖モ、戰時ニ至テハ其ノ局外ニ中立ノ約ニ調印セザリシ所ノ大邦ハ、其ノ局外中立ノ本邦ニ於テ自ラ其約ヲ破リタルニアラザル以上ハ、其ノ局外中立ヲ認メズシテ己ニ對シ無効ノモノナリト爲スハ性法ヲ犯スモノトス。

故ニ普佛戰爭ノ時ニ當リ、若シ白耳義ニ於テ戰國ノ一方ト相交通スルコトアリタルニ於テハ、他ノ一方ハ其ノ局外中立ノ約ニ調印シタルノ如何ニ拘ラズ、以テ其ノ約ヲ破リ此ノ局外中立國ヲ併スコトヲ得タリシナルベシ。

今日足下ノ關スル場合ハ、特ニ高麗ニ於テ局外中立ヲ立定シタルニ於テハ、何レノ國ガ之ヲ認ムベキヤヲ知ラントスルニアラズシテ、猶ホ其ノ局外中立ハ如何ニシテ之ヲ立定シ得ベキヤヲ知ラントスルニアリ。

余ハ左ノ二問ヲ設ケテ之ヲ論ゼントス。

第一 問

甲、高麗ハ請求スルコトナク又承諾スルコトナキニ局外中立ヲ宣告シ得ラルベキ歟。

乙、此ノ場合ニ於テ局外中立ハ何レノ國ニ由テ宣告シ得ベキ歟。

第二 問

甲、高麗若シ局外中立タルヲ認メラレンコトヲ望ムニ於テハ何レノ國ニ向テ之ヲ請求スベキ歟。

乙、此ノ局外中立ノ結果如何。

(第一問) 甲

余ハ高麗ニ於テ局外中立タルヲ望ムノ念慮ナキモ之ヲ宣告シ得ラルベシト信ズ。蓋シ此ノ宣告タル、彼レ之ガ外タルベキニ依リ、之ヲ以テ彼ヲ拘束シ得ベカラザルハ論ヲ俟タズト雖モ、此ノ局外中立ヲ立定シタル公會若クハ條約ニ調印シタル諸大邦ニ至テハ、之ヲ拘束スルニ足ルノ力アルコト明カナリ。故ニ若シ此ノ大邦ノ一ニシテ高麗ノ獨立ヲ侵犯スルコトアルニ於テハ則チ之ト共ニ調印シタル他ノ諸大邦ヨリ之ニ對シ征戰ヲ開クノ一ノ場合タルベシ。

高麗ニ於テ若シ其國ノ局外中立ヲ認メタル大邦ハ勿論、其ノ未ダ之ヲ認メザルモノト雖モ、總テ他ノ諸大邦ノ一ト攻守ノ同盟ヲ爲スコトアルニ於テハ、其他ノ大邦ノ其ノ約束ヲ免カルベキハ亦辯ヲ俟タザルナリ。

(第一問) 乙

此ノ場合ニ於テハ何レノ大邦ガ其ノ局外中立ヲ宣告スルヲ得ベキヤ。

余ハ之ニ答ヘテ是レ最モ其ノ國ニ利益ヲ有スルノ大邦ナリト云ハントス。

今茲ニ利益ヲ以テ權利ノ因由原則ト爲セルハ驚クニ足ラザルモノトス。何トナレバ此ノ因由タル私法ニ在テハ間々稀ニ應用スルモノナリト雖モ、萬國公法ニ於テハ最モ勢力アルモノタレ

バナリ。

實ニ若シ局外中立ノ宣告ナキニ於テハ、高麗ノ隣邦ハ之ヲ併合セントシ、他邦ハ又將來ニ侵害ヲ受ケントスル此ノ國ノ獨立ヲ保護セントシ、此ノ隣邦ニ向ヒ抗敵スルコトヲ得ベシ。故ニ戰端ヲ豫防センガ爲ニハ諸邦ハ其ノ國(高麗ヲ云フ)ノ苟クモ自ラ戰ヲ開クニアラザル以上ハ、之ニ向ヒ侵犯ヲ爲サランコトヲ互ニ規約セザルベカラザルヲ悟ルベシ。

故ニ清國及ビ魯國ハ爾來高麗ヲ認メテ局外中立國ト爲スベキコトヲ宣告スルヲ得ベク、且ツ仍ホ進ンデ相約スルヲ侵犯セント謀圖スル他ノ諸大邦ニ對シ、此ノ局外中立ヲ保護センコトヲ以テスルコトヲ得ベシ。

(第二問)

余ハ今又茲ニ高麗ニ於テ自ラ其ノ一隣邦ノ謀圖ヲ恐ル、ガ爲ニ、之ニ向ヒテ其ノ局外中立國タルヲ認メ、且ツ保證センコトヲ請求シタリト假定センニ、此ノ場合ニ於テハ局外中立ノ一タビ宣告セラレタル以上ハ、高麗ハ必ラズ之ヲ遵守セザルベカラザルノ義務アルベシ。即チ前題ノ場合ト著シキ差異アルヲ見ルベキナリ。

此ノ場合ニ於ケル局外中立ハ、前題ノ場合ト同一ノ大邦、又ハ己レ高麗ニ對シ何等ノ敵意ヲ懷カザルモ、他邦ノ此國ニ對シ公正眞直ヲ守ラザランコトヲ恐ル、ノ大邦ニ由テ宣告セラル、

コトヲ得ベシ。

此ノ如キ場合ニ於テハ高麗三隣邦（清國、魯國、日本ヲ云フ）ノ一邦（例ヘバ魯國ノ如キ）或ハ其ノ局外中立ヲ認ムルコトヲ欲セザルコトアルベシ。

若シ然ルコトアルニ於テハ、如何ナル結果ヲ生ズベキ乎。

魯國若シ一朝高麗ノ地ヲ侵スコトアリテ、他ノ隣邦其ノ己ノ利益ヲ犯スコトヲ恐レ、且ツ高麗ニ於テ自ラ其ノ約ヲ破リタルコトアラザルニ於テハ、先ヅ始メテ使臣差辨ノ方法ニ依リテ之ニ干與シ、次イデ又要用アルニ於テハ兵力ニ依テ之ニ干與セザルベカラザルナリ。但シ高麗ニシテ若シ最初ニ魯國ノ權利ヲ犯シタルコトアルニ於テハ、清國及ビ日本ハ高麗ヲ防護スルノ義務アラザルベシ。

人或ハ余ニ問ハン、歐米諸大邦ノ高麗ト條約ヲ結ベルモノハ、此ノ局外中立ノ宣告ニ干與セシコトヲ請求シタルニ於テハ之ヲ爲シ得ベキコト固ヨリ論ヲ俟タズ。然リト雖モ若シ其ノ請求ナキニ於テハ歐米諸大邦ハ其ノ國ニ利益ヲ有スルノ巨大ナラザルガ故ニ、必ラズシモ之ニ干與スルコトナカルベキナリ。

然リト雖モ高麗ハ之ヲ招イテ其ノ公會ニ臨マシムルヲ以テ策ノ最モ得タルモノトス。何トナレバ之ガ爲ニ其ノ局外中立ニ保證ヲ與フルコト蓋シ尠少ナラザルベキヲ以テナリ。

千八百八十二年十月二十九日

於東京

ボアソナード

朝鮮事件ニ付大木參議へ答フ

ボアソナード

拙官曾テ「ボアソナード」氏へ相命ジ置キタル事有之、其ノ廻答ノ爲メ同氏拙邸へ出頭ス、談話ノ末同氏ヨリ日、清、朝鮮ノ事ニ及ビ、同氏懇々戦争ノ不利ヲ陳ジ、以テ歐亞ノ形勢ニ及ブ。拙官亦素ヨリ兵ノ凶器ナルヲ知ル。然レドモ避クベカラザルノ事ニ遇ハ、遂ニ不得止ノ事ニ至ルハ世界ノ通議ナルヲ述ブ。同氏亦可然ヲ陳ジ、且ツ其ノ意見ヲ書ニシテ之ヲ贈ランコトヲ請フ。拙官之ヲ承諾ス。此書即チ是也。是レ決シテ拙官ヨリ求メタルニ非ザルナリ。且ツ同氏ト談話ノ際、同氏懇々云フ、我レ日本ノ爲ニ計ルニ、朝鮮ニ對シ賠補ノ目的確定ヲナスヲ以テ急務トス。此ノ目的如何トノ問ヒヲ承ケ、拙官ハ之ニ對フルヲ不欲シテ反テ同氏ニ問フテ云フ、政府素ヨリ定マルモノアリト雖モ、試ミニ足下ノ目的ヲ聞ント云ヒシニヨリ、亦之ヲ書ニシテ贈ルベシト

云フ、此書第三編即チ是也。一閱スルニ此内頗ル緊要ノ事アルニ似タリ。合セテ之ヲ各位ノ見覽ニ供ス。但シ事ノ漏泄センヲ恐レ、草案並ニ其横文モ悉ク拙官之ヲ收メ置ケリ。

大木喬任

頃日來參事院ヨリ質議セラレシ問題ニ對シテハ、常ニ質議者ト等シク專ラ日本ノ侮辱ヲ被フリタルノ一點ノミニ就テ答辯ヲ爲シタリ。又支那政府ヨリ照會アリシ事件ヲ告ゲラレタルニ方ツテモ、亦質議者ト意見ヲ同ウシ、彼ノ意必ラズ荏苒時日ヲ遷延シテ以テ日本政府ノ要求ヲ拒絶スルノ準備ヲ爲スニ在ルベキコトヲ認メタリ。

然レドモ余ハ當初ヨリ他ノ一點ニ就キ質議者ノ注意ヲ喚起シタリ。即チ日本政府ハ支那政府ニ向テ多少斷乎タル應對ヲ爲シ、其ノ調訂ヲ拒絶スルニ先チテ須ラク目下ノ状態ニ關セズ、將來ノ計ヲ爲シ、且ラク朝鮮ニ對スルノ忿怒ヲ止メ、支那ト復ビ和スベカラザル讐敵トナランヨリ、寧ロ互ニ相ヒ輯和シ協心戮力スルノ良計ニ非ザルカラ觀察スベキヲ論ジ、且ツ余ノ聯合論者タルコトヲ明言セリ。

抑モ此論タル内閣ニ於テモ必然反對論者アルベキヲ以テ、請フ少シク之ヲ敷衍シ、且ツ爾來此點ニ關シテ問難アラバ之ニ對ヘンコトヲ。

凡ソ邦國ノ輯睦ハ其利害ヲ共ニスルニ因ル、國民ノ離合ハ一ニ利害ノ異同ニ干セザルモノナシ。

君主政治ノ國ニ於テハ國君一己ノ不和ヨリ戰端ノ起ルアリ、又兩國君主ノ婚儀等ヨリ親和ヲ生ズルコトアリ。

然ルニ日支間ニ於テハ皇帝一身ノ不和等之レアルコトナク、又向後トテモ婚儀等ノ爲ニ親和スルコトモナカルベシ。

然ラバ則チ兩國ノ關係ハ偏ヘニ政略上ノ利害ニ從ル。

往昔兩國ノ關係ヲ見ルニ、今日不和ノ基トナルモノナク、却テ一致ノ原因トナラザル可カラザルニ方テ、既ニ隣國ノ交誼ヲ結び居タリ。然ルニ近時ニ至テ臺灣及ビ琉球ノ二事件其軋轢ノ原因トナリタリ。

殊ニ琉球ノ事件ハ支那ヲシテ忿懣ノ氣ヲ懷カシメタルモ、未ダ之ガ爲ニ戰端ヲ開クニハ至ラザルナリ。若シ支那政府ニシテ尙ホ飽クマデモ日本ニ對シ琉球占領ノ非ナルヲ訴ヘテ止マザレバ、千八百七十四年ノ北京條約ニ據テ之ヲ明辨セバ可ナルベシ。

余ハ往時ニ在テ未ダ日支間ノ親和ヲ破ルベキ事由ヲ見ザルノミナラズ、向來ニ取テハ其聯合スベキ重大ノ理由アルヲ見ル。

抑モ日支兩國ハ共同ノ敵アリ、魯西亞之レナリ。魯國ハ今日日本ニ對シテ如何ナル親和ノ情誼ヲ表スルモ、其ノ地理ト歴世相依ルノ政略トニ於テ、必然威力ヲ東洋ノ極端ニ及ボサントスベキコト、猶ホ歐洲ニ在テ其南方ヲ蠶食シ、土耳其ヲ略セントスルガ如シ。土耳其ノ亡ビザルヲ得ルモノハ唯ダ全歐諸國之ヲ援フノ利益ヲ共ニスルガ故ナリ。

東洋ニ在テハ歐洲中一トシテ露國ノ侵略ヲ遏止スルガ爲メ、直接ノ利益ヲ有スルノ國ナク、殊ニ之ヲ防禦スルノ方法資力アルモノナシ。

魯國ノ支那ト干戈ヲ交ヘシヤ、今ヲ距ルコト未ダ久シカラズ、故ニ今ヨリ以後亦國境及ビ其ノ居民ノ事ヨリシテ兩國間紛議ノ起ルコトアルベキナリ。

魯國ノ朝鮮ヲ窺フ亦尙シ、十八ヶ月前日支近海ニ數艘ノ船艦ヲ泛ベタルハ朝鮮征討ノ爲メナリシコト世人ノ能ク知ル所ニシテ、其ノ名義ニ至テハ之ヲ作爲スル敢テ難キニ非ザリキ。然ルニ二个ノ事變アツテ之ガ障碍ヲ爲セリ、即チ水師提督ノ負傷ト亞歷山二世帝ノ殺逆ト是ナリ。當時若シ魯國ニ於テ虛無黨ノ勢焰益々猖獗ナルナクンバ、必ラズ征韓ノ事ニ着手セシナルベシ。

若シ魯國ニシテ一たび朝鮮ヲ略取スルニ至ラバ、必ラズ日本ヲ壓シ其意ノ欲スル所ヲ擅マ、ニスルヲ得ベシ。露國ガ隣近ノ國民ヲ統御スルハ天命ニ由ルモノナリト自稱スルハ衆ノ能ク知ル所ナレバ、益々征服主義ニ由リテ侵略ノ欲ヲ逞フシ、遂ニ日本帝國ノ獨立ヲ傷ツクルニ至ルベキナリ。

故ニ日本ノ大厄ハ露國ニシテ決シテ支那ニ非ザルナリ。支那モ亦タ日本ト其利害ヲ等フス、露國一旦朝鮮ヲ併吞セバ、殆ンド三方ヨリ之ヲ繞圍スルヲ以テ侵伐ノ患ヒ常ニ絶エザルベシ。以上ノ理由ノミニテモ已ニ日支兩國間ノ親和必要ナルヲ證明スルニ至ルベキナリ。

若シ此ノ二國ニシテ合從セバ露國ヲシテ朝鮮ヲ奪フコト能ハザラシムニ足ルベシ。

假令日支兩國ノ輯睦ニヨリ、支那ヲシテ全ク朝鮮ヲ屬從スルヲ得セシムルモ、日本ノ爲ニハ露國ガ朝鮮ヲ取ル如キノ害アルコトナシ。支那ニシテ朝鮮ヲ有スルモ、爲ニ日本ニ害スル如キコトアルベカラズ。若シ果シテ日本ニ害ヲ加ヘント欲スルナレバ、朝鮮ナキモ能クスベシ。而シテ其ノ事ナキハ支那ノ國情タル平和ヲ求メ併吞ヲ好マザルヲ以テナリ。

日本ニ於テ朝鮮ヲ服從セントスルガ若キハ辯論スルヲ要セザルベシ。朝鮮併吞論ハ蓋シ迷妄輕躁ノ說ニシテ、未ダ日本ノ政治家ニシテ眞ニ斯ノ如キ說ヲ唱ヘシ者アラズト信スレバナリ。

若シ日本ニシテ朝鮮ヲ略取セント欲スルアラバ、支那、魯國共ニ之ガ寇敵トナラン。露國豈

日本ノ朝鮮ヲ取ルヲ見テ默スルモノナランヤ。必ラズヤ北部地方ノ安寧ヲ名トシテ爲ス所アルベキナリ。

然ラバ則チ日本一旦朝鮮ヲ得ルモ、忽チ露國ノ爲ニ逐ハレテ遂ニハ日本内地ヲ全フスルヲ保セザルニ至ラン。是レ日支兩國聯合スベキノ第二理由ナリ。

又日支兩國ハ歐米條約ノ國ニ抑制セラレ、大ニ其ノ國益ヲ損シ其ノ國威ヲ傷ケラレタリ。支那ハ英國阿片ノ輸入ニ由テ國民其害毒ニ陥イリ、志氣爲ニ振ハズ、日本ハ英ヨリ綿布ヲ、佛ヨリ火酒ヲ、米ヨリ石油ヲ輸入セラレ、加之、兩國共ニ治外法權ノ爲ニ屈セラレ、外人裁判ノ權ヲ殺ガレタリ。

右ノ形狀タル歲月ヲ經ル已ニ久シク、固ヨリ永有スベキニ非ラズ。兩國ノ輯睦鞏固ニシテ其ノ抵抗力合シテ一トナルニ至ラバ、爲ニ其ノ政變ノ期ヲ促ガスベキヤ必然ナリ。其ノ抵抗力タル之ヲ合一スレバ平和ノ交誼ヲ破ラズシテ大ニ強盛ヲ増シ、外國ニ對シテ實効ヲ奏スベシ。

茲ヨリ以下日支聯合スベキノ第三理由ヲ述ベテ以テ本論ノ局ヲ結バントス。凡ソ國民ハ其ノ人種ノ異ナルヨリ自ラ相ヒ嫌忌スルコト黑色二種ノ如ク、宗教ノ異ナルヨリ相ヒ敵視スルコト回々教徒ト耶蘇教徒トノ如キモノアルガ如ク、人種、言語、宗教ノ同ジキガ

爲ニ自ラ相ヒ親和スルモノナリ。

歐洲ニテハ「サクソン」人種「スラーブ」人種、日耳曼人種、羅典人種等各種毎ニ自ラ親和セル實例アリ(唯ダ政略上一致セザルコト數々ナリ)、亞細亞ニ於テ日、支、韓ノ三國ハ其ノ宗教同ジク、其ノ文詞同ジク、其ノ風俗同ジキヲ見レバ、其ノ人種モ亦タ恐ラクハ同ジカルナラシ。然ラバ則チ其ノ親和ハ自然ニ因ルモノナリ。

日支聯合ノ外交上利アルハ既ニ之ヲ證明セリ。然ラバ則チ日本政略上ノ良計ハ支那ト交誼ヲ絶ツニ害アツテ、却テ親和ヲ固フスルニ利アルコトハ瞭然トシテ明カナリ。

朝鮮今回ノ事變ノ若キハ三國交通ノ途ヲ開キタルモノニシテ、三國聯合ノ媒トナルヲ得ベシ。假令日本政府ニ於テ戰鬪ヲ避ケ、爲ニ稍ヤ内國ノ人望ヲ失フコトアルモ決シテ之ヲ患フ可カラズ。

日本ニ於テハ國民末ダ代議士ヲシテ其ノ思想ヲ吐露セシムルコト能ハザレバ、國家ノ名譽ト利益トヲ保護スルノ責任ハ獨リ政府ニ在リ。

日本政府ハ國家ノ名譽ヲ損セズ、利益ヲ害セザルベシ。之ヲ兩全スルコト蓋シ難キニ非ラズ。日本政府ニ於テハ至當ノ要求ヲ爲スベク、彼レ亦タ之ニ應ズベシ。否、カラ以テ之ニ應ゼシムベシ。然レドモ聯合ノ一事ニ至テハ其獨立ト名譽トヲ保護スベキ最良計ナレバ、カラ盡シテ

其ノ鞏固ナランコトヲ求ムベキナリ。

千八百八十二年八月十四日

於東京

ジエ、ボアソナード

再ビ朝鮮事件ヲ論ズ (其二)

抑モ日本政府ニ於テ或ハ支那政府ノ調停ヲ拒絶スルコトアルベキハ蓋シ自ラ卑屈ニ陥ルヲ恐ル、コト其ノ一理由タルニ似タリ。

支那政府ヨリ在朝鮮京城ノ日本公使館ヲ扞衛シ、且ツ諸港在留ノ日本臣民ヲ保護セント言ヘルガ若キハ、實ニ日本政府ノ許諾ス可カラザル所ナリ。

日本政府ハ其ノ力能ク自ラ其ノ臣民ヲ保護スルニ足レリ。

侮辱賠償ノ點ニ至テモ亦タ日本政府ハ支那政府ニ其談判ヲ委ヌルコトアルベカラズ。若シ支那ニ許シテ之ヲ規定セシムレバ、日本ノ國體ヲ汚シ、且ツ恐クハ爲ニ時日ヲ遷延シ、彼ヲシテ戰鬪ノ準備ヲ爲サシムルコトアルベキナリ。

余ハ前キニ支那ノ照會ニ對スル返簡ヲ起草スベキヲ命ゼラレタリ。因テ余ハ日本國ノ體面ヲ全フスルニ必要ナル確乎タル文案ヲ作りタリ。日本政府ノ拒絶スベカラザルモノハ其ノ妨止ス

ル能ハザル所ノモノナリ。何ゾヤ、曰ク、支那政府ノ自ラ朝鮮ヲ強ヒテ日本政府ノ至當ナル要求ニ應ゼシメントスルコト是レナリ。余ハ返簡中宜シク甘言以テ微カニ此意ヲ示スベキコトヲ勸告セリ。是レ支那政府ト絶交スルニ至ルヲ防ギ、併セテ親和ノ地ヲ爲スモノナリ。

然ルニ此ノ事タル或ハ日本ノ國辱トナラザルヤヲ疑フ論者ナキニ非ザレバ、茲ニ之ヲ辯明セントス。論者曰ク、日本ハ朝鮮ヲ獨立國ナリト見做シテ條約ヲ締結セリ。而カルニ今朝鮮支那ノ屬國トナラバ、從テ亦タ日本ノ地位ヲ下スニ非ラズヤト、余ハ朝鮮ノ地位下ルヲ見ル、未ダ曾テ日本ノ地位下ルヲ見ザルナリ。

論者ノ主トスル所ハ日韓ノ條約ヲ結ブヤ、同等ノ地位ニ居レリ。然ルニ支那一旦朝鮮ノ上ニ立タバ、是レ自ラ日本ノ上ニ立ツモノナリト言フニ在リ。誤リト謂フベシ。

支那ノ朝鮮ノ上ニ立ツハ朝鮮ノ地位下リタルガ故ニシテ、決シテ支那ガ日韓兩國ノ上ニ出ツルガ故ニ非ザルナリ。

試ニ思ヘ、朝鮮全ク支那ノ一州トナラバ日本モ亦タ從テ支那ノ一州トナルモノカ、奈何ゾ斯ノ如キ理アルベケンヤ。

右ノ外尙ホ一ノ難問アツテ一目シ過グレバ頗ル其當ヲ得タルニ似タレドモ、亦タ誤見タルヲ免レズ。

曰ク、日本原ト不羈獨立ノ朝鮮ト同盟セリ、故ニ賠償モ亦タ朝鮮ノミニ對シテ要求スベシト。朝鮮ノ宜シク謝罪スベキハ固ヨリ疑ヒヲ容レザル所ナレドモ、日本ニ於テ朝鮮ノミ謝罪スベク支那ハ之ニ干涉スベカラズト主張スルハ其ノ權利ナク又利益ナキモノナリト信ズ。

請フ亦タ事ノ極端ヲ擧ゲテ之ヲ證セン、朝鮮ノ未ダ日本ニ對シテ害ヲ加ヘザルニ方リ、侮辱ヲ支那ニ加ヘ、支那之ガ爲ニ全ク朝鮮ヲ滅シ、次イデ日本公使館暴民ノ爲ニ襲撃燒燬セラレタリト假想セヨ。

日本ハ必ラズ朝鮮ニ對シテ賠償ヲ要求スルコト其ノ猶ホ獨立タルトキノ如キコト能ハザルベシ。其ノ嘗テ締結シタル條約ハ猶ホ依然効力ヲ有スト雖モ、之ヲ守ルベキモノハ朝鮮ニ代レル支那タルベシ。支那政府ハ其新服セル臣民ノ舉動ニ就テ其責ニ任ズベキナリ。

又朝鮮露國ノ州郡トナリタリトセンカ、日本トノ締結ハ猶ホ存立スト雖モ、之ヲ守ルモノハ露國ニシテ朝鮮ニ非ラズ。其ノ條項ヲ守ルモ又之ニ背クノ罪ヲ謝スルモ皆ナ露國ノ義務タルベシ。

客歲佛國ノ「チユーニス」ヲ討テ之ヲ屬シタルヤ、「チユーニス」ノ條約ハ佛國ニ於テ之ヲ守リ之ヲ行フベシト公布セリ。而シテ同盟國中一モ之ガ爲ニ辱ヲ受ケタリト思ヒシ者ナカリキ。現時ノ形情ニ據テ之ヲ察スルニ、朝鮮ノ支那屬國タルコトハ未ダ其ノ確證ヲ見ザレバ、日本

ハ朝鮮ヲ見テ獨立國トナスコト猶ホ締約ノ時ト同ジカルベキナリ。

今回朝鮮ノ改革ハ適々以テ其ノ政體上獨立タルコトヲ證スルニ足レリ。政府ハ變更シタレドモ國家ハ猶ホ存在セリ。日本ニ向ツテ謝罪スベキモノハ即チ朝鮮ノ國家トス。

故ニ日本政府ノ直ニ朝鮮ト談判ヲ開クベキハ敢テ支那政府ノ干涉日本ノ國辱トナルベキノ故ニ非ラズシテ、日本ハ猶ホ朝鮮ヲ獨立國視スルガ爲メトス。朝鮮ハ未ダ政治ノ變革若クハ戰爭ニ由テ其ノ獨立ヲ失ヘルノ證アルヲ見ザルナリ。

千八百八十二年八月十五日

於東京

ジエ、ボアソナード

再ビ朝鮮事件ノ處分ヲ論ズ (其三)

日本政府朝鮮ノ爲ニ侮辱ヲ被リタルニヨリ、要求スベキ諸點ニ付キ命ニ從テ聊カ鄙見ヲ述べ
ントス。

抑モ賠補ハ朝鮮政府ニ對シテ要求スベク、支那政府ニ對シテ請求スベキモノニ非ザルコトハ
前已ニ開陳シタリ。其ノ理由四アリ。

- 第一 日本ノ朝鮮政府ト修好條約ヲ締結スルヤ支那政府ノ紹介ニ依ラザリシコト。
- 第二 支那政府ハ朝鮮國ノ安寧ヲ維持スベキノ義務ナケレバ今回ノ事變モ其罪ニ非ザルコ
ト。
- 第三 朝鮮政府ハ自今支那政府ニ屬スルモ其嘗テ訂盟セル義務ヲ免カル能ハザルコト。
- 第四 朝鮮已ニ政府アリ其果シテ正統ナルヤ否ノ若キハ日本政府ノ預リ知ルベキ所ニ非ラ
ズ、既ニ實力政府アル以上ハ其義務ヲ負フベキヤ明カナルコト。

日本政府ノ要求シ得ベキ事項ニ至テハ左ノ四點ニ在リト信ズ。

- 第一 名譽上ノ賠補
 - 第二 償 金
 - 第三 將來ノ擔保
 - 第四 暴徒ノ處刑
- 今一々之ヲ詳説セン。

第一 名譽上ノ賠補

日本政府ハ朝鮮特命ノ使臣日本ニ對シテ謝罪スベキコトヲ要ムベシ。謝罪狀ハ使臣ヲシテ大
臣參議諸公ノ面前ニ於テ之ヲ朗讀シタル後、太政大臣ニ捧呈セシムベク、且ツ終始朝鮮國風ニ
於テ最モ謙恭トナス所ノ敬體ヲ執ラシムベシ。

又豫ジメ謝罪狀ノ文案ヲ朝鮮駐劄ノ日本公使ニ示サシムベク、且ツ公使ニ命ジテ謝罪狀ハ充
分周到恭敬ニシテ又將來ヲ慎ムベキノ明約アルニ非ラズンバ、日本政府之ヲ甘受セザルコトヲ
告知セシムベシ。

又日本政府ハ謝罪狀充分ナリト認ムルニ非ラズンバ、之ヲ承引セザルベキヲ要スベシ。
然レドモ若シ日本政府ニシテ異日清韓ト親和聯合センコトヲ欲スレバ、宜シク敬禮ノ一事ニ

關シテハ少シク恕スル所アルベキナリ。

且ツ謝罪終リ其他ノ賠補モ悉ク之ヲ得ルニ及ンデハ、使節ヲ送クルニ應當ノ禮ヲ以テシ、來時ノ如ク之ヲ薄待セザルベシ。

第二 償 金

償金ニ至テハ三箇ノ目的ヲ達スルニ足ルベキヲ要ス。

- 一、死傷者ノ身分ニ應ジテ其家族ヲ扶持スルニ足ルベキ充分ノ賠補。
- 二、京城ニ石造ノ公使館ヲ建テ人二百、馬百（概計ナリ）ヲ容ルニ足ルベキ屯營ヲ造ルノ費用。

三、今回ノ事變ニ因リ日本ノ爲ニ生ジタル海陸軍ノ費用ヲ償フニ足ルベキ概算ノ金額。

第三 將來ノ擔保

本項ニ所謂擔保トハ朝鮮政府ニ於テ賠補ヲ拒絶シタルトキ施スモノニ非ラズ、第一、第二兩項ノ事ヲ諾シタリト假想セシモノナリ。

愚考ニ據レバ公使館及ビ在諸港ノ日本臣民ヲ護衛スルニ足ルベキ兵力ヲ備フルノ外ナシト信ズ。

故ニ各港ニ員數ヲ定メテ兵馬ヲ派遣シ、京城ヲ首メ其他諸港ニ定數ノ大砲ヲ備へ、以テ非常

ヲ警ムベキヲ要約スベシ。

又朝鮮政府ヲシテ日本人在留ノ各港間ニ電線ヲ架セシムベク、若シ日本政府之ヲ架スルトキハ其費用ヲ支辨セシムベシ。

電信技手ハ公使館員ノ特權ヲ有シ保護ヲ受クベシ。

電線及ビ諸器械ノ破損ハ災異ノ爲ニ惹起セルモノヲ除キ、都テ朝鮮政府之ヲ負擔スベシ。

第四 暴徒ノ處刑

朝鮮ノ新政府ハ之ヲ認メテ暴徒ノ首魁ト爲スヲ得ベキモノナルニヨリ、即チ今本項ニ關シテハ満足スベキ賠補ヲ得ルコト難カルベシト雖モ、必ラズ本項ノ要求ヲ爲サルベカラズ。其理由ニアリ。

甲 要求ノ談判ヲ輕易ニ速了セズ、十分ノ時日ヲ以テシ、之ニ由テ多ク海陸ノ兵ヲ朝鮮ニ屯駐スルノ期ヲ伸延スルハ日本政府ニ於テ施スヲ得ベキ正當ノ方策タルコト。

乙 朝鮮ノ舊政府久シカラズシテ其權ヲ恢復スルコトナシトシ難シ、果シテ然ラバ充分日本ノ要求ニ應ズルナルベシ。日本ニシテ本項ノ要求ヲ爲サズ、他日ニ及ンデ之ヲ爲スハ妥當ナラザルコト。

已上ニ開陳セシ所ハ固ヨリ以テ完全精詳ト爲シ難シ。本件ノ如キハ余ガ日常ノ職務ニ非ラズ

ト雖モ、仍ホ他ノ條目ニ就テ質議ヲ辱フセバ直ニ意見ヲ披陳スベキナリ。

日本ニ於テ上ニ列擧セシ所ノ賠補ヲ得バ、其名譽ハ戰勝ニ齊シクシテ而シテ將來ノ葛藤ヲ生ズルノ危害ハ毫モ之アルナシ。

朝鮮或ハ此賠補ヲ與ヘザルコトアラシモ知リ難シ、萬一此ノ如キコトアラバ他ノ方策ヲ以テ之ニ應ゼザルベカラズト雖モ、是レ質議ノ外ナルヲ以テ此ニ論及セザルナリ。

千八百八十二年八月十六日

於東京

ジエ、ボアソナード

朝鮮事件ニ付意見書

朝鮮ノ紛紜現ニ平穩ナル結局ニ至ルベキ景情ヲ顯出スト雖モ、萬一ニモ難事ニ至ラザルヲ保スベカラザルニ付、之ヲ豫防スルノ策、又難事ニ至ル場合ニ方リ之ヲ處スルノ方法、及び其方ヲ實行スルニ臨ミ發スベキ照會書ノ定式等ニ付鄙見御下問相成タリ、即チ其問題ハ左ノ如シ。

(第一) 若シ朝鮮ニ於テ(或ハ清國ニ於テ朝鮮ノ名ヲ假リ)日本政府ノ要求ニ應答シ、又ハ之ヲ満足セシムルコトヲ遷延スル時ニ當リ、日本政府ハ如何ナル處置ヲナシテ可ナルヤ。

(第二) 若シ又日本政府ノ要求ヲ朝鮮ニテ拒絕スルニ至ラバ(蓋シ此拒絕タル清國ノ内命ヲ受クルカ又ハ其勸言ニ依リテ爲シタル時)最後ノ照會書ヲ彼レニ送付スベキヤ、然ルトキハ其書ノ目的ハ如何、又其書式ハ如何。

蓋シ余ガ第一、第二ノ疑問ヲ轉倒シテ茲ニ記スルモノハ其順序ヲ正確ニシ、且ツ理

論ニ適セシムル爲メナリ。

(第三) 前述最後ノ照會書ヲ送付スル場合ニ至ラバ、日本政府及び在朝鮮ノ日本艦隊長ハ如何ナル公告ヲナシテ可ナルヤ、而シテ其公告ハ誰ニ對シテ爲スベキヤ、及び其書式ハ如何。

(第四) 若シ清國艦隊長ヨリ日本軍隊ノ上陸ヲ拒絶スルノ命ヲ受ケタリト主張スルニ於テハ、日本軍隊ノ長官ヨリノ回答振り及び其處分ハ如何。

(第五) 日本紙幣ヲ彼我貿易ノ爲メ且ツハ内地へ流通セシメンコトヲ朝鮮政府へ要求スルニ適スルノ時機ハ如何。

余ハ此末段ニ於テ第一ニ位スベキ程ノ要件ヲ指示論究セント欲ス。蓋シ他ノ疑問ニ答ヘタル後之ヲ論ズレバ或ハ明解セラル、ナラン歟。

一千八百八十二年八月廿四日

於東京

ジエ、ボアソナード

第一疑問ノ答

此問題ニ付回答(即チ日本政府ノ要求ニ應答ノ件ヲ云フ)ト満足ヲ與フルノ件ニハ太ダ相違ナリ。之ヲ區分シテ論ゼザル可カラズ。

日本政府ニ於テ彼レノ回答ノ爲ニ許ス所ノ期限ハ最モ短キヲ要シテ可ナルベシト雖モ、日本政府ノ要求ニ満足ヲ與ヘシムル期限ノ如キハ之ニ許スニ十分長キ時日ヲ以テセザルベカラズ。實ニ一片ノ答書ヲ作ルニ臨ミ、朝鮮政府ニ於テ日本人民ニ對シタル暴舉ハ重大ノ件ナルコトヲ認メ、而シテ相當ノ賠償ヲ爲スベキヤ否ノ事ヲ商議スルニハ長キ日子ヲ要セザルナリ。然レドモ日本ノ要求ニ満足ヲ與フル件ノ如キハ長キ期限ヲ要セザルヲ得ズ。

假令ヘバ若シ朝鮮政府ニ於テ使節ヲ日本ニ發遣シ失敬ノ罪ヲ謝シ、依テ後來兩國ノ貿易ヲ實行スルコトヲ堅納スルコトヲ承諾シタルト假想セヨ、然ルトキハ其使節ノ一行ヲ組成スベキ人物ヲ撰擇シ、及び其用意ノ爲メ要スル所ノ費用等ノ件ニ付充分ノ時日ヲ要サルヲ得ズ。又殺害ニ逢ヒタル日本人ノ親族へ拂フベキ金額又公使館再設及び日本艦隊出張費等ノ爲ニ彼レ若シ若干ノ償金ヲ拂フコトヲ承諾スル場合ニ於テハ、充分長キ期限ヲ要セザルヲ得ズ。

然レドモ日本政府ニ於テハ被害者親族ニ與フル償金支拂ヲ直チニ要求スルヲ得ベシト雖モ、公使館再設費ノ償金ヲ要求スルニハ若干ノ期限ヲ許スベク、而シテ艦隊出張費ノ如キハ尙ホ一

段ノ猶豫ヲ許スベシ。

但シ前述公使館其他二様ノ償金ニ對シ許スベキ三段ノ期限ト雖モ、若シ朝鮮政府ニ於テ此數種ノ要點ニ付自ラ其責ニ任ズルコトヲ承認シ、且ツ其實行ヲ確然ト約束シタルノ時ニ非ザレバ許可セラレザル可シ。

第二疑問ノ答

此三種ノ問題ニ答フルニ際シ、彼レノ拒絶ノ原因ニ關係スルニ及バザルコトヲ指示セザルヲ得ズ。

蓋シ其拒絶タル朝鮮一箇ノ意思ニ出ヅルモ、又他ノ勸言ニ依ルモ、或ハ清國ノ命令ニ根據スルトモ清國ニ於テ公然之レニ干渉スルノ舉動アルニ非ザレバ、日本政府ハ之ヲ認知セザルベシ。蓋シ公私ノ事件ヲ論ゼズ各人其好ム所ノモノノ勸言ヲ用ユルコトアリト雖モ、他人ヨリ之ヲ聞知セラレザルモノトナスハ世ノ通法ナリ。故ニ清國ノ勸言ニ依リ、朝鮮ニテ日本ノ要求ヲナシタリトテ其儀ヲ公然清國へ訴へ、又ハ彼レ日本ノ請求ヲ許容シタリトテ、清國ノ慫慂ニ出デタルモノナルベシトノ言ニ托シ、其實行ヲ朝鮮ニ乞ハズシテ清國ニ要求スルノ理アラザルナリ。今第二疑問ノ三點ニ答フルコト左ノ如シ。

第一 最後ノ照會書ヲ送ルヤ否ヤノ論ニ至テハ固ヨリ送ルベシト答ヘザルヲ得ズ。確然タル

拒絶ノ後ニ至リ（但シ我要求ニ應答セザルトキハ尙ホ拒絶シタルト同様ノ場合ト見做サルヲ得ズ。此儀ハ疑問中ニハ假想ナキモ余ハ之ヲ挿入ス）若シ日本艦隊長ヨリ最後ノ照會書ヲ送致セザレバ大ニ其役目ノ名譽ニ關スルモノトス。故ニ充分ナル兵艦朝鮮ノ近海ニ集屯スルニ於テハ、必ラズ其書ヲ送付スベキモノトス。

第二 最後ノ照會書ノ目的如何ノ問題ニ答ヘントス。鄙見ヲ以テ之ヲ考フルニ、其趣旨タル戰爭ヲ挑ミ、又ハ砲撃ヲナスベキ事等ヲ以テスベカラズ（蓋シ此義ハ御尋問ナキト雖モ、第六ノ問題同様偶然思付キタルニヨリ論及ス）

萬一兵端ヲ開クニ至ラバ日本ニ取リテハ退守ノ鬪ニ非ラズシテ攻撃ノ戰ヒナルガ故ニ、其目的タル彼ノ國ヲ略取スルニ外ナラザルベシ。然リ而シテ鄙見ヲ以テ之ヲ察スルニ、萬一兩國ノ間ニ戦端ヲ開キ、日本ヨリ朝鮮ヲ攻撃スルニ於テハ、清國直チニ彼ヲ援勢シテ日本ニ向ヒ公然敵對センコト必然ナラン。加之露國ハ此戰爭ヲ見テ必ラズ妬心ヲ起スベク、而カモ他ノ各國ニ至テハ日本ト同感相憐スルコトナカルベシ。而シテ日本ハ獨リ勇敢ナリト自負セルモノ、如ク視做サル、ナルベシ。

又砲撃ヲ以テ目的トナスガ如キニ至テハ不可ナルコト論ラ俟タズ。余ハ之ニ雷同スルコト能ハザルナリ。蓋シ砲撃ヲ行フノ殘虐ナル報仇中ノ最モ甚シキモノナリ。即チ暴^{イヒル}ヲ以テ暴^{イヒル}ニ報ズ

ルモノニシテ、賠償ヲ要求スルノ道ニ非ラズ。怨ヲ報ズルノ手段ナリ。

然リト雖モ若シ砲撃ヲ行フテ其有罪者ヲ罰スルコトヲ得バ、亦タ恕スベキモノアリ。譬ヘバ暴動者ヲ竊カニ煽動シタル大院君ノ宮殿及ビ暴民ノ家産ヲ焼クコトヲ得バ、即チ其罪ヲ懲罰スルニ當リ、而シテ世論モ之ヲ許スベシト雖モ、一ノ港ヲ砲撃スルニ於テハ多クハ暴動ニ關係ヲ有セザル人民ヲ害シ、而シテ恐ラクハ一人ノ有罪者ヲモ罰スルコト能ハズシテ、無辜ノ民ヲ殺シ其家屋ヲ破ルノ慘狀ヲ現出スルニ至ラン。加之、彼レ日本ヲ怨ムノ念ヲ惹起シ、後日ニ至テモ永ク之ヲ忘レザルニ至ラン。其人變換スト雖モ、其國ニ尙ホ舊怨ヲ記念シ、終ニ解クルノ日ナカラントス。聞クガ如クンバ朝鮮人數百年前ノ征韓事件ヲ記念シ、日本人ヲ嫌忌スルノ念尙ホ罷ムコトナシト、鑑ミズンバアルベカラズ。或ハ歐洲ニテ行ヒタル砲撃、殊ニ近頃英國ノ埃及「アレキサンドリヤ」港ヲ砲撃シタルコトヲ引證スルモノアラン、然レドモ余ハ歐洲ニテ行フ所ノモノハ必ラズ公正ナリト保正スル能ハズ。而シテ日本ノ現今ニ行フベキ規範トナルベシト公言スル能ハザルナリ。

然レドモ茲ニ指示スベキ事ハ、抑モ「アレキサンドリヤ」ノ砲撃タル、既ニ行ヒタル暴舉ニ對シ其怨ヲ報ジタルノミナラズ、蘇士埠ヲ妨阻シ、且ツ人民ヲ煽動シテ歐人ニ抗セシメンガ爲ニ「アラビバシヤ」ノ設爲スル武備及ビ砲壘建築等ヲ停止セン爲メノ手段ナリキ。

最後ノ照會書ニ於テ戰爭ヲ以テ威迫スルコト、及ビ港ヲ砲撃スルコトヲ目的トスルモノハ良策ニ非ザルコトヲ論ジ來レリ。今尙ホ前ニ記載セル第三ノ手段アリ、即チ日本政府ノ要求スル處ノ賠償ヲ保證セン爲メ、及ビ朝鮮ニ駐在スル日本人ノ平安ヲ保持セン爲メ、開港場又ハ其他ノ要所ヲ一時占有スルコトヲ強迫スルコト、及ビ其他右ノ目的ヲ達センガ爲ニ肝要ナル處分ヲ施スコト是レナリ。

最後要求書ノ定式ノ如キハ附録A印中ニ之ヲ記載ス。

第三疑問ノ答

(第一) 在朝鮮日本軍艦長(甲)及ビ日本政府(乙)ハ如何ナル公告書ヲナシテ可ナルヤ。

(第二) 其公告書ハ誰ニ向ツテ發スベキヤ。(甲) 艦隊長ヨリ發ス。(乙) 日本政府ヨリ發ス。

(第三) 其公告書ノ書式ハ如何。

(第一) 此問題ニ付最モ肝要ナルコトハ日本ガ今回出兵ノ性質ヲ局外ノ各國ニ確報シ、其目的外ノ事ヲ想像セシメザルコト是レナリ。故ニ若シ出兵ノ目的タル現時及ビ將來ノ安寧ヲ計ルニ於テ他意アルニ非ザレバ、清國ヲシテ日本ハ開戦ノ意ナキコトヲ明知セシメ、且ツ之ヲ信用

セシムルコトヲ要ス。然ルトキハ清國ハ必ラズ此舉ニ對シ抗抵セルコトナク、只ダ傍觀スルニ止マルベシ。去レドモ之ニ反シ朝鮮ニ對シテ公然宣戰ノ舉ニ及ババ、清國ハ必ラズ朝鮮ニ黨スベシ。鄙見ヲ以テ之ヲ察スルニ、蓋シ清國ハ日本ヨリ最後ノ照會書ヲ投ズル前ニ於テ、早く既ニ日本政府將來ノ意見ヲ豫知スルナラン。而シテ日本政府ノ目的果シテ安寧ヲ計ルニ在ルヲ知ラバ、清國ハ日本ノ要求ヲ承諾スルコトヲ朝鮮ニ勸告スベシト雖モ、若シ日本ノ目的ハ朝鮮ヲ侵略スルニ在ルベシト察知スルニ於テハ、清國ハ直ニ日本ニ抗抵スルニ至ルベシ。

又最後ノ照會書ヲ投ズルノ際ニ於テ、若シ朝鮮ノ港内ニ英、米、露、佛等ノ軍艦ノ碇泊スルアラバ、其書ノ趣意ヲ通知スルコトヲ要ス。而シテ之ヲ通知スルニ必ラズシモ朝鮮ト條約ヲ締結セル國ニ限ルニ非ラズ。但シ英、米兩國人ハ第一ニ通知スルコトヲ要ス。又各國ニ通知スルニハ「日本艦隊ハ若シ萬一ノ事ニ及ブモ他國ヲ損害セザランコトニ注意シ、充分其用意ヲナシタルコトト、且ツ他國軍艦ニ於テモ成ル可ク危險ノ場所ヲ避クベキコト」ニ注意アリ度旨ヲ以テスベシ。

(甲) 右公告書ハ日本艦隊長ヨリ他國ノ軍艦長へ宛送付スベシ。而シテ清國軍艦長へ送ルモノハ日本文ヲ用ヒ、他國軍艦長へハ英文又ハ佛文ヲ以テスベシ。

(乙) 又日本政府ニ於テ未ダ最後ノ照會書ヲ發セザルニ當リ、到底其處分ニ出デザル可カ

ラザルコトヲ豫定シタル時ハ、先ヅ東京ニ駐劄スル各國公使ノ内ニテ其國ノ軍艦既ニ朝鮮ノ海港ニ在ルモノ、又ハ朝鮮へ軍艦ヲ送遣スベキ國ノ公使ハ半公セミヤフイシヤル信ノ書簡ヲ以テ「日本政府ノ決議及ビ其目的ハ決シテ朝鮮ヲ侵略セントスルニ非ラズ。唯々暴舉ノ賠償ヲ要求スルニ外ナラザル」コトヲ通報スベシ。

愚按ニ據レバ、今日ヨリ日本政府ニ於テ行フテ可ナルベキ一策アリ。而シテ巧ミニ之ヲ實行スルニ於テハ實ニ好果ヲ生ズベキ政略ニシテ、現今日本ノ舉動ヲ窺フ所ノ歐米諸國ヲシテ、日本ノ爲ニ同感相憐ノ情ヲ發起セシムルニ足ルベシ。蓋シ日本政府ニ於テ或ハ既ニ此ノ件ニ注目セラレタルカハ知ラザレドモ、愚按ノ策略トハ即チ「日本政府ヨリ其遣外公使ニ一ノ覺書メモランダムヲ送致シ、之ヲ其駐劄スル所ノ政府へ通知セシムルニ在ルナリ。而シテ其書中ニハ日韓條約締結以來、兩國ノ間ニ起リタル事情及ビ在韓日本公使館ニ對シテ行ヒタル暴舉並ニ清國政府ヨリ日本政府へ贈リタル奇怪ナル照會、及ビ之ニ對シタル日本政府ノ回答、日本ノ國旗ニ對シテ爲シタル失敬ノ賠償、殺害ニ逢ヒタル日本人ノ家族へ交付スベキ償金、及ビ出兵其他ノ費用ヲ要求スルノ目的ヲ陳述シ、而シテ日本ニテハ彼ノ地ヲ侵犯シ、又ハ略取スルノ意ナシト雖モ、若シ彼レ日本ノ要求ヲ承諾セザル場合ニ於テハ、現時及ビ將來日本人民ノ安寧ヲ保護スルガ爲ニ、相當ノ處分ニ及バザルヲ得ザルベク、且ツ要求ノ諸件ヲ實行セシメン爲メ、其保證ヲ彼レニ要

スル事アルベシ等ノ事ヲモ併セテ報知スルヲ可トス。而シテ右覺書ヲ郵送スルニハ凡ソ六週間ヲ要スルガ故ニ、先ヅ電信ヲ以テ其大意ヲ遣外公使ノ一名（譬ヘバ在巴里公使）へ通知シ、而シテ其公使ヨリ他ノ同僚へ報知セシムベシ。是レ一通信ニテ事足り、大ニ費用ヲ減省スルノ良策ナルベシ。但シ日本公使ノ駐在スル各國政府へ其文書ノ寫ヲ與フベキコトヲ電信文中ニ記載スルコト勿論ト知ルベシ。

（第三） 日本艦隊長ヨリノ公告書及ビ日本政府ヨリ東京在留各國公使へ報知ノ書式ハB及ビC號附録ニ讓ル。

第四疑問ノ答

但シ清國艦隊長若シ日本兵士ノ上陸ヲ拒ミタルトキ日本艦隊長ヨリノ答書及ビ其處置振ノ件。

右ノ問題ハ左ノ通り變換スルモ不都合ナカルベシ。

日本政府ハ萬一ノ事ニ備ヘンガ爲メ今ヨリ豫メ艦隊長へ命ジ置クベキ回答振リ及ビ其處分方ハ如何。

但シ艦長ハ政府ヨリ受クル所ノ命令及ビ内達書ニ從ヒ事ヲ處スベキハ無論ナリトス。

今茲ニ論ズル場合ノ點ニ達スレバ、日本政府ハ其名譽利益ニ對シ最早ヤ其歩ヲ退クルコト能

ハザルハ疑ヒヲ容レザルナリ。之ヲ換言スレバ清國ノ抗抵ニ拘ラズ、勢ヒ斷行セザルヲ得ザルベシ。斯ノ如キ場合ニ備ヘンガ爲ニ、豫メ艦隊長へ與フベキ命令ハ清日艦隊將ニ戰端ヲ開カザルヲ得ザル勢ニ至ルモ、日本軍艦ヨリ發砲ヲ初メザルヤウ堅ク注意スベキ旨ヲ以テスルニ在リ。是レ事ヲ破ルモ其責ヲ清國ニ歸セシムルノ良策ナリ。

假令ヘバ韓地へ兵士ヲ上陸セシメント決議シ、日本軍艦ヨリ兵士ヲ上陸セシメ、又ハ上陸セシメントスルニ際シ、若シ清國ノ軍艦ヨリ上陸シタル日本ノ兵士、又ハ軍艦へ對シ發砲ニ及ブカ、或ハ爆發物ヲ投ズルニ於テハ、朝鮮港内ニ海軍ノ戰爭ヲ現出スルニ至ルベシ。

若シ斯ノ如クニシテ戰端ヲ開クニ於テハ、豫メ報知ヲ得タル外國ノ軍艦ハ容易ニ其時ノ實情ヲ探偵シ、且ツ之ヲ傍觀シテ關係スルコトナカルベシ。加之、開戦ノ始末ヲ目撃シテ必ラズ日本ノ爲ニ同感相憐ノ情ヲ起スベキハ疑ヒヲ容レズ。

思フニ日本艦隊長ハ清國ノ抗抵ニ拘ラズ上陸スベキ嚴命ヲ受ルコトハアラザルベシ。然ルトキハ假令ヒ清國ノ抗抵ニ逢フモ輕舉ヲ謹ミ、其不當ヲ責メ、而シテ結局ノ處分ヲ本國政府ニ乞フベキコトヲ以テ時日ヲ遷延スベシ。是レ兵士ト軍艦ノ援勢ヲ本國ヨリ得ルノ好手段ナリ。

今一步ヲ進メテ云ハン、假令ヒ艦長ハ豫メ上陸ノ嚴命ヲ受ケタリシトスルモ、若シ其命ノ下リシ後ニ至リ、清國ノ艦隊來着シ、其勢ヒ頗ル盛ニシテ兵ヲ交ユルモ勝ヲ制スルノ見込ナキ時

ハ、尙ホ前同様嚴敷其處置ノ不正ヲ非難シタル後、本國政府ノ指令ヲ乞ヒ、上陸ヲ見合スコトヲ最良ノ策トス。日本政府ハ危險ノ場合ヲモ侵シ、其兵力ヲ試ミシムルノ權ヲ艦長ヘ與フルガ如キコトハ有マジ。又艦長ヲシテ闘ハザレバ政府ノ命ニ背キ、闘ヘバ必ラズ敗ル、ガ如キ危難ノ場合ニ置カザルコトハ予ノ信ジテ疑ハザル所ナリ。

余ハ今茲ニ前ニ指示シタル件ニシテ且ツ疑問中ニ挿入ナキ論題、即チ如何ナル場合ニ當リ最後ノ照會書ヲ發スベキヤノ事ヲ論ゼントス。鄙見ヲ以テ考フルニ、其時機タル日本ヨリ充分ナル軍艦ヲ韓海ニ屯集セシメ、直チニ兵士ヲ上陸セシメテ照會書ノ實行ヲ要求スルヲ得ベキ時ニアルベシ。此處置ヲ取ルニハ尙ホ數週間ヲ待ツモ未ダ晩シトセザルナリ。蓋シ其間ハ彼ノ政府トノ談判及ビ各國政府ヘ送付スベキ覺書編成ニ用ユルヲ得ベキナリ。

最後ノ照會文案

本年七月廿三日京城ニ於テ我公使館附官吏數名ヲ殺傷シ、及ビ我公使館ヲ燒燬シタル等日韓條約及ビ萬國公法ニ背戾スルノ行爲ニ關シ、拙者ハ何年何月日時ヲ以テ我 皇帝陛下ノ政府ノ要求ヲ朝鮮國王殿下ノ政府ニ傳達シタリ。

拙者ハ該要求中ニ於テ榮譽ノ賠償、損害ノ賠償等ノ方法ト其時日トヲ明記シ、何日中ニ貴答有之度旨申入レタリ。

然ルニ拙者ヨリ申入レタル期限已ニ經過シタルモ未ダ貴政府ノ決答ヲ得ズ。
拙者ハ此決答ナキコトヲ以テ否拒ト看做スナリ。

(注意) 若シ朝鮮政府ヨリ猶豫期限ヲ請ヒ、其期限經過スルモ亦タ返答ナケレバ「貴官ハ猶豫ヲ請ハレタルニ付キ之ヲ承引シタリ」トノ一句ヲ置クベク、又其猶豫期限ヲ減ジタルトキハ其旨ヲ附記スベシ。若シ又沈黙ニ非ラズシテ否拒ノ確答アラバ「否拒ノ旨

貴答アリタリ」トノ一句ヲ明記スベシ。若シ又否拒ニ非ラズシテ榮譽ノ賠償ノ方法及ビ償金ノ多寡ニ付キ異議ヲ起サバ、我公使ハ政府ノ命ズル範圍内ニ在テ多少讓ル所アルベク、其際ニ於テ彼レ承諾セザレバ、先ニ讓ル所アリシモ猶ホ承引セザルヲ以テ之ヲ取消スベク、從テ日本政府ノ要求ハ初メ言ヒ送リタル通りナルベキ旨記載スベシ。

因テ此最後ノ照會ニ附セル日及ビ時ヨリ二十四時中ニ拙者ノ要求（文詞ハ模様ニ從テ改正スベシ）ニ對シ、單純ナル承諾書御送達ナキニ於テハ、我陸海軍ノ指揮長官ニ傳令シテ在朝鮮日本臣民ノ安寧、及ビ日本政府ヨリ要求セル件々ニ關シ、我權利利益ヲ保證償（支辨ノ方法ニ至テハ要求書中何々金山採掘ヲ以テ之ニ充ツベキ旨記載シタルコトト信ズ。果シテ然ラバ茲ニ之ヲ言フヲ要セズ）スルニ必要ナル處置ヲ爲ス可シ。之レガ爲メ我陸海軍指揮長官ハ直チニ仁川ト京城ノ間、並ニ釜山港及ビ東萊府近傍元山津及ビ德源安邊船場ニ於テ必要ト看做ス土地ヲ假占ス可シ。而シテ我指揮長官ハ其軍隊ト戰艦トノ安寧ニ必要ナリト認ムル他ノ處置ヲ爲ス可シ。萬國公法ノ通則ニ據レバ、日本帝國政府ハ其公館ノ襲撃ト其臣民ノ殺傷トヲ認メテ直チニ宣戰ノ場合ト做スコトヲ得ベキモ、尙ホ平和ヲ主トシ且ツ此事變ヲ認メテ兇徒少數ノ所爲ニ出ツルモノト做シ、以テ上ニ記シタル要求ヲ爲スニ止メタリ。其要求ハ穩當且ツ公正ナルハ局外各國ノ認定スル所ナルベシ。

拙者ハ我 皇帝陛下政府ノ正當且ツ平和ナル趣意ニ付キ誤解ナカラシムル爲ニ、此最後ノ照會書ノ趣ヲ朝鮮駐劄ノ支那使臣ト、朝鮮近海碇泊ノ各外國艦隊長トニ報告セリ。

年月時于京城

朝鮮國宰相宛

附録 B 及 ビ C 號

在朝鮮國欽差及ビ各國艦隊長へノ公告書式

一書ヲ閣下ニ捧呈ス。去七月廿三日（其時日ヲ明記スベシ）我公使館ニ對スル暴舉ニ付何月何日ノ書柬ヲ以テ我 天皇陛下政府ノ要求スル處ヲ朝鮮國王殿下ノ大臣へ照會致セリ。而シテ其書中ニハ兩國ノ威權ニ適當ナル榮譽ノ賠償、公使館へ對スル損害、及ビ殺害ニ逢ヒタル我が人民ノ親族ニ對スル給與償金、及ビ陸海軍ヲ派シタルノ費用等（但シ出^{エキスベシ}兵等ノ字ハ好戰ノ意ヲ示スニ當レバ用ヒザルヲ可トス）ノ賠償ヲ要求ニ及ベリ。然ルニ其回答ノ爲ニ許セシ所ノ期限既ニ過ギタルモ（但シ期限ヲ再度延シタルコトアレバ是レモ記スベシ）今日ニ至ル迄未ダ何等ノ應答ヲ得（或ハ其回答満足ヲ來サルニ依リ）ザルニ依リ我要求ヲ承諾（或ハ同意^{アトヘシ}）スル

ニ尙ホ（何日若クハ二十四時間）ノ期限ヲ與フル旨ヲ以テ、今日最後ノ照會書ヲ朝鮮政府へ送ラントス。若シ右期限ヲ過ギテ尙ホ我要求ヲ承諾セザルニ於テハ、在韓ノ日本人民ノ安寧及ビ要求シタル件々ヲ保證スル爲メ、必要ト思考スル所ノ處分ヲ施シ、且ツ彼ノ政府ノ模様ニ依リ勢ヒ已ムヲ得ザル場合ニ至ラバ相當ノ處置ニ及ブベキコトヲ我艦隊長へ命令致スベシ。

我公使館ヲ襲撃シ、殊ニ我要求スル所ノ件々ヲ拒絕スルコトハ我 皇帝陛下ノ政府ニ於テハ認メテ宣戰ス可キ場合ト爲スモ正當ナリト雖モ、我政府ハ尙ホ平和ヲ主トスル意ヲ朝鮮政府ニ表示セント欲スルガ故ニ、若シ朝鮮人民ヲシテ此平和ヲ主トスル行爲ヲ妨害スルモノアルニ非ザレバ、前ニ記載セル所ノ處分ヲ爲スニ止メタリ。

（抑モ貴國ト朝鮮トハ昔時ヨリ友誼ノ交際ヲ有セラル、ガ故ニ）今日朝鮮政府へ送ル所ノ最後ノ照會書ノ意志ヲ通知シ、併セテ我陸海軍ノ進退スルニ付テ貴國ニ對シ不快ノ意ヲ惹起セシムルガ如キ事ナキヤウ精々注意致スベク、之ヲ閣下ニ保證スル義ヲ特別ニ（閣下へ）御報知申スベキ旨我 天皇陛下政府ヨリノ指令ヲ受ケタリ。

就テハ此目的ヲ達スルヤウ閣下ニ於テモ御盡力アランコトヲ希望ス。

（ ）ノ處ハ他ノ各國へ宛ル時ハ（大不列顛國政府ハ朝鮮國ト修好條約ヲ締結サレントスルヲ以テ）云々ト記スベシ。

但シ米、佛、露等皆同様ナリ。

又英、佛、米、露等ノ艦隊長ヘ宛テタル書中ニハ閣下ト云ハズシテ貴下ト記スベシ。

附 録

第一 最後照會書ノ起草者ノ心得置クベキコトハ今茲ニ豫知シ能ハザル件ニシテ、此書簡ヲ發スル前ニ起ルベキ變事ヲ觀察セザルベカラザルニアリ。然ルニ於テハ原文ハ削除増加ヲナスコトアルベシ。

第二 最後照會書ノ外ニ朝鮮ニ在ル外國公使ヘ送ルベキ告知文ヲ草スル爲メ必要ノ時間ヲ餘シ、此書翰ヲシテ悉ク一度ニ發スルコトヲ得セシムルノ手筈ニナスベシ。

第三 其告知書中ヘハ最後照會書ヲ交付スルノ時日ヲ記載スルコトニ注意スルコト。

第四 艦隊ノ長官ハ相當ノ位アル士官（傳令使）ヲシテ此告知文ヲ交付セシムベシ。但シ右告知書ヲ日本公使ヨリ各國艦隊長ヘ送ル方却テ簡易ニシテ禮ヲ重ズルニ當ルベシ。

御下問ナキ疑問

日本ノ公使ハ最後照會ノ期限過ギタル後満足ナル回答ヲ得ザルトモ、尙ホ京城ニ止マルベキヤ、元來此最後照會書ハ開戦ヲ公言スルモノニ非ラズシテ保證ヲ得ル爲メノ強迫手段ナルガ故ニ、鄙見ヲ以テ考フルニ、日本公使ハ其身體若クハ自由ヲ妨害セントスル全圖ヲ防禦スルニ充分ナル護衛兵ヲ提フルニ於テハ京城ヲ去ル可ラズ。

蓋シ其兵隊ハ外面ニ注意シ、敵ヲシテ之ヲ圍ムノ用意ヲ爲サシム可カラズ。若シ又苟クモ開戦ノ恐レアレバ、日本艦隊ノ碇泊スル港ト連絡ヲ通ジ置クベシ。又日本公使京城ニ留マルヲ得ル時ハ二様ノ利益アリ。

(第一) 日本政府へ開戦ヲ公言セザルコトヲ證シ、(第二) 而シテ機ニ投ジテ再ビ談判ヲ開クノ手段ヲ得ベシ。

朝鮮政府改革ヲ急務トスルニ付テノ方略

大 鳥 圭 介

當國政府内政ノ紊亂、賄賂横行ノ甚ダシキコト、權臣ハ云フニ及バズ、國王ト雖モ權吏ヨリ金穀ヲ勒索シテ賞罰ヲ恣ニスルコト決シテ日本人ノ推量スル能ハザル所ナリ。小生モ内外政事ノ萎靡、上下人心ノ腐敗極度ニ達セシコト曾テ聞キ及ビタレドモ、今實際ニ就キ之ヲ見聞スレバ、事々物々案外ニ出デ、其頹敝ノ形勢筆紙ノ盡ス所ニアラズ。近來國民中ニテ多少志アル輩ハ革命ヲ希圖スルモノ頗ル多キ由ナリ。

今東洋ノ政海ヲ保安スルニ、當國政府ヲシテ早ク大改革ヲ行ハシムルコト大急務ナレドモ、今日ノ澆季、國主暗弱、姦臣橫恣、唯ダ一日ノ安ヲ苟且ニスルノミニテ萬々恢復ノ策ナキコト

實ニ明白ナリ。

即今閔族中共ニ相和セズ、泳駿、泳煥頻リニ相闘ギ、其軌岷々タリ。若シ駿退キ煥出ヅレバ多少政務ヲ改良スル所アリテ、本邦ノ交際ニ對シテハ少利アルベキニ似タレドモ、到底全局ヲ一變シテ面目ヲ新ニスルコトハ望ムベキニアラズ。故ニ閔族ノ内訌ハ傍觀シテ其結果如何ヲ注視スルノ外別ニ手段アルコトナシ。

近頃探偵ノ報告ニ據レバ、今般袁世凱ノ建議ニ從ヒ清國ヨリ護國大臣ナルモノヲ派遣スルカ、或ハ大院君ヲ舉ゲテ之ニ護國ノ權ヲ授ケ、當國ノ政事ヲ改良セシムルノ策略アリト云フ、說ノ眞偽固ヨリ分明ナラザレドモ、國王、王妃並ニ閔族ハ大ニ不安ノ念アリト聞ケリ。過日閔泳達ニ面會ノ節、日本、清國、英國共ニ相謀リテ朝鮮政府ヲ改革スルノ舉アリト聞ク信ナリヤト問ヒシモ、此邊ノ風聞ヨリ起リシモノナラム。而シテ又大院君世ヲ遁レ閑居スルモ、不平滿腔ニテ時モアラバ老後ノ伎倆ヲ一試スルノ慾念ヲ懷クコト曾テ所聞ニヨリ諒察スベシ。

今清國ヨリ新ニ護國大臣ヲ派遣スベシトノ說ハ信用スベカラズ。其故ハ李鴻章ノ持論ニテモ朝鮮内政ニ喙ヲ容レズト唱ヘ居リ、且ツ今殊ニ大臣ヲ出シテ内事ニ交渉スルモ、上下人心ノ歸服スベキ理ナケレバナリ。而シテ大院君ヲ世ニ出サントノ方略ハ全ク無根ト謂フベカラズ。其邊ノ議論ハ朝鮮人有志輩中ニ頗ル勢力アリ、小生ノ感覺ニ影響セシ事モナキニアラズ。近來モ

同様ノ風説彼是流布セリ、大院君ニシテ一度政柄ヲ握ルノ期至レバ、一應ノ改革ヲ實行スベキ權力アルベシト察セラル。

偕テ大院君愈ヨ世ニ顯ル、モノト假定スレバ、李翁ノ指揮ニヨリ袁世凱ガ之ヲ決行スルハ勿論ノ事ニテ、清國ノ勢焰ハ之ニ由リテ更ニ增長スルコト疑ヒナシ。日本國ハ之ニ對シ如何ナル方針ヲ取ルベキカ、唯ダ袖手傍觀スレバ利モナク害モナキ體ニ見ユレドモ、若シ清國ノミガ事ニ托シテ勢威ヲ増ストキハ、大ニ日本ノ國光ヲ減ジ、他日何事ニモ逡巡スルノ大害ヲ蒙ムルベシ。

因テ惟フニ、此敗亂ノ國政ヲ改新スルハ何人モ望ム所ナレバ、其ノ何レノ手段ニ出ヅルモ之ヲ妨グルノ理ナキコト當然ナリ。然ラバ冥々裏ニ之ニ干涉シテ清國ノ策略ヲ贊成シ、且ツ大院君ノ意中ヲ忖度シ、機ニ先チ暗ニ其歡心ヲ博シオキ、事成ルノ日利益ニ均霑スルコト一奇策ナラム。

而シテ此變ニ臨ミ露國ハ何ノ方略ヲ取ルカ、是レ細心逆算スベキ一大事ナリ。露國トテモ朝鮮ノ内政革新ヲ嫌フモノニハアラザルベシ。但シ大院君ニシテ權力ヲ有スルニ至レバ、王妃ノ危殆、閔族ノ衰亡目前ニアリ、故ニ閔族ハ其機ヲ察シ窮迫ノ餘、終リニ露ニ投ジテ救援ヲ請フナラム。是ノ事已ニ先例ヲ推シテ先知スベシ。然レバ日本ガ清國ニ同意シ、大院君ヲ推薦スル

ハ一奇策ナレドモ、露國ガ現王家並ニ閔族ノ依托ヲ承ケ之ヲ庇護スルモノトスレバ、之ニ對シ拮抗スルノ位置ニ立タザルベカラズ。是レ亦吹毛索疵ノ患ヒアリ、彼ヲ思ヒ此ヲ省ミ緩急得失容易ニ斷定スベカラズ。

愚按ニテハ此事眞ニ起ルトキニ至リ、清國ハ斷然ノ處分ヲ爲スベキモ、露國ハ直チニ假面ヲ脱シ顯然ト王家ヲ庇護スルノ急策ヲ取ルコトナカルベシト信ズ。

因テ日本ハ冥々裏ニ清國ヲ幫助シテ改革ヲ行ハシメ、假令露國ガ王家ヲ救フニ至ルモ之ニ抵抗スルノ圭角ヲ露サバルヲ無難ノ謀略トスベシ。

右ハ稍ヤ大早計ニ似タリト雖モ、事ノ發スルニ臨ミテ躊躇スルトキハ時ヲ失ヒ臍ヲ嚙ムノ恐れアリ、因テ豫メ綢繆ノ寸意ヲ記ス。

明治二十七年二月十四日

於京城

大鳥圭介

朝鮮糧米輸出禁令解除ノ件

糧米輸出開禁談判ノ件ニ關シ一月廿六日拙者統署ニ赴キ外務督辦ニ面會シタル節、同官ハ陰曆正月六日開印ノ上ハ解禁ノ御沙汰アルヤウ可取計旨相答ヘタル趣ハ既報ノ如シ。然ルニ其後陰曆六月七日ニナルモ外務督辦ヨリ更ニ何等通知無ケレバ、拙者ハ去ル十三日（陰八日）新任ノ俄公使、英總領事歡迎ノ爲メ催サレタル宴會終了後、督辦ニ對シ窃カニ右ノ催促ヲ爲セシニ、同十五日中ニハ何分ノ公文相遣スベキ旨答ヘタレバ、同日夕方マデ之ヲ待居リタルモ何等ノ通知無シ。依テ翌十六日其食言ヲ責メ、且ツ不必要ノ禁令ヲ續行スルハ條約違反ノ責ヲ免カレザレバ、速ニ解禁スベキ旨嚴重ナル啓文ヲ送リタルニ、翌十七日朝外務督辦ハ金主事ヲ遣シ、口約ノ通り公文ヲ送ラザリシハ誠ニ相濟マザル次第ナレドモ、政府部内ノ議論モ漸ク大方ハ相纏リタレバ、今兩三日間公文ヲ以テ催促スル儀ハ見合セ吳レトノ懇願アリタレバ、拙者ハ然ラバ今兩三日ダケ猶豫スベシ。其上ハ少シモ假借スル所ナカルベキ旨ヲ以テ金主事ヲ還ヘシタリ。

然ルニ翌十八日午後典國局幫辦安駟壽氏ハ閱泳駿氏ノ内命ヲ受ケ來館シタル由ナル以テ、當政府ニテモ目下數月來滯リ居タル營兵ノ給料ヲ支拂ハザルベカラザル譯ナレバ、唯今糧米輸出ノ禁令ヲ解クトキハ直チニ米價ノ昂騰ヲ來シ、政府ノ困難モ少ナカラザル故、二月十日マデ開禁ノ猶豫シタリ、然ルトキハ諸江モ開氷シテ四方ヨリ續々米ノ入荷アリテ米價モ一定スベク、右期日マデ延期シタキ旨申出タレバ、拙者ハ之ニ對シ、安氏ノ申出ノ趣ハ以テノ外ナリ、本官ノ期望スル處モ亦各國公使ノ欲スル處モ皆一日モ速カニ開禁セラレンコトヲ欲スル次第ナルニ、此上猶ホ二十餘日モ猶豫センコトハ思ヒモ寄ラズ、既ニ昨年本件ニ付當館ニ於テ使臣會議ヲ開キタル節、獨、米、英ノ使臣等ハ連署公文ヲ以テ開禁ヲ迫ルベシトノ意見ナリシモ、拙者ハ當時未ダ其時期ニ至ラザルコトヲ信ジタルト、且ツ右ノ手段ハ當國政府ノ不面目ヲ示ス譯ニ成ルベシト考ヘタレバ、追テ協議スルマデハ暫ク箇々別々ニシテ談判ヲ開ク方可然コトヲ發言シ、右ニテ議論一定シ、今日マデ連合シテ當國政府ニ談判致サル次第ナルニ、今政府ノ考ヘ此ノ如クナルニ於テハ拙者モ不得已直ニ使臣ヲ會シテ連合運動ヲ取ルコトヲ協議セザルヲ得ズ。然ルトキハ各公使モ必ラズ之ニ同意スベシトノ意ヲ以テ答ヘタルニ、安モ大ニ之ニ困却シ、連合要求ノ義ハ何卒見合セ吳レトノ意ヲ懇々ト述べ、其日ハ夫レニテ歸宅シ、更ニ去ル十九日又々同様ノ意ヲ以テ來館シタレバ、拙者ハ閱惠堂ガ安氏ヲ以テ内相談ヲ爲サシメラルルハ隨意ナレ

ドモ、謂ハハ是レ私談ニ過ギズ。宜シク外務督辦自ラ來ツテ協議セラルベシ。且ツ以上二十餘日ノ猶豫ハ我ガ利益ヲ害スルニ付、當政府ノ都合モアルベケレドモ、拙者ハ斷ジテ同意致シ難シトテ固ク彼ノ申出ヲ拒絶シタリ。

本件ニ付テハ拙者常ニ袁世凱氏トノ相談ヲ絶タザルヤウ爲シ居リタルニ、去ル十七日袁氏ハ拙者ニ對シ種々談話ノ末、一ノ折衷說ヲ提出シ、當國政府ニテハ一旦二月一日ヲ解禁ノ日ト決定シタレドモ、追々異論者モ出來、折合兼ヌル様子ナレバ、差當リ二月十日迄開禁ノ期ヲ猶豫シ、目下仁港ニ堆積セル米穀ダケヲ一時輸出差許スコトニ取計ヒテハ如何、其石數サヘ分ラバ自分ニテ盡力相試ムベシトノ事故、是レモ一案ナリト思考シ、早速其石數ヲ仁川領事ニ問合セ、之ヲ袁氏ニ通知シ置キ、去ル十九日鄭書記生ヲ以テ成否ヲ尋ネサセタルニ、一時ノ輸出ハ差支ナキモ、一旦之ヲ許ス以上ハ少ナクモ麥秋ノ頃迄禁令ヲ繼續スベシ云々ト當國政府ヨリ申出タル由、斯クテハ一時ノ便利ヲ得ンガ爲メ永久ノ不利ヲ蒙ル譯トナリ、我ニ於テ強ク之ヲ却クルトキハ最初決定ノ通り二月一日ヲ開禁ノ日ト定ム可キヤモ難計ト思考シ、前顯ノ通り安氏ニ對シ冷淡ニ挨拶シタル次第ナリ。

然ルニ翌二十日トナルモ督辦ヨリ何等通知無ケレバ、前回ヨリモ一層嚴重ナル催促文ヲ持タセ、國分書記生ヲ統署ニ遣シタルニ、督辦ハ當時俄公使ト面晤中トノ事ニテ、該件ニ關シテハ

同夕マデニ二月一日ヨリ開禁スベシ云々ノ照會ヲ送ルベケレバ、催促文ハ其儘控ヘ吳レトノ旨
只管頼ミタル由、仍テ同書記生ハ一應引取り、公文ノ至ルヲ待チ居リタルニ、同六時頃二月一
日ヨリ開禁スベク、且ツ此趣ハ各港監理並ニ稅務司ヘ關飭シタル旨照會アリタリ。

本件ニ付今少シ速ニ解禁セシムル事ハ兼ネテノ希望ナリシモ、二月一日以前ニ開禁セシメン
コトハ當國政府ノ内情ニ於テ頗ル困難ナルベク、且ツ之ヲ要求スルニハ少ナクモ談判二十餘日
ヲ要シ、其内ニハ二月一日ノ期限ニ至ル可ケレバ、此邊ニテ切リ上ゲタル方得策ト信ズ。仍テ
之ニ同意スルコトニ決シタル次第ナリ。

明治二十七年二月 日

在京城

大鳥圭介

大朝鮮督辦交涉通商事務趙

爲照會事案照上年秋冬間因本國各地方風雨爲災民食缺乏奉有我

大君主陛下勅旨會議防禁食米出口歷經本衙門照知辦理各在案茲際春光調和各處米價依次跌減來

夏收麥庶占豐稔本督辦以各口商爲務念昨經

奏請我

大君主陛下核奪弛禁欽奉

特諭飭定於本年二月初一日開三港禁米出口之令本督辦鈴遵辦理除分飭各監理暨稅司屆期開
禁准各商民運米出口並照章收納出口稅項外相應備文照會請煩貴公使查照轉飭欽遵實爲公便
須至照會者

右照會

大日本特命全權公使大鳥

甲午正月十五日

我二十七年二月二十日接到

以書簡致啓上候陳者貴曆甲午正月十五日付貴東ヲ以テ上年秋冬間因本國各地方風雨爲災民食缺
乏奉有 勅旨會議防禁食米出口歷經本衙門照知辦理各在案茲際春光調和各處米價依次跌減來夏
收麥庶占豐稔本督辦以各口商務爲念昨經 奏請核奪弛禁鈴奉 特諭飭定於本年二月初一日開三

口禁米出口之令本督辦欽遵辦理云々御照會之趣致拜承候右御來示之義ハ早速駐三口我領事へ夫通達方取計置候此段回答得貴意候 敬具

明治二十七年二月廿一日

特命全權公使 大鳥圭介

督辦交涉通商事務 趙秉稷閣下

金玉均横死一件書類

居留地警察署ニ於テ暗殺者洪鍾宇及ビ金玉均死體ヲ

清國官吏へ交付ノ件並ニ領事會議ノ模様ニ付上申

上海居留地警察署ニ於テハ、其拘留中ナル朝鮮人洪鍾宇並ニ日本郵船會社碼頭ヨリ押收シタル金玉均死體ヲ當地清國官吏ニ交付シタル旨既報セシガ、此事タル實ニ居留地重大ノ事件ナルニモ拘ラズ、是レ迄該件ニ關シ喋々ト書キ立テ居タル英字新聞ハ急ニ筆ヲ收メ、右交付ノコトニ付キテハ何等報道スル處ナカリシ爲メ、頗ル疑團ヲ懷キタルモノ多カリシト推察セラル。將又領事ナキ國ノ人民ガ、居留地ニ於テ犯罪ノ節ハ、警察署長原告トナリテ先ヅ之ヲ會審衙門へ告訴シ、重罪ナレバ豫審ノ上該法廷規則第七條ニ依リ之ヲ縣令ノ判決ニ付シ、而シテ道臺ノ認可ヲ得裁判ヲ執行スル筈ナレバ、警察署ニ於テ洪ヲ會審衙門へ告訴シ、其豫審ヲ遂ゲシムベキ

管ト小生ハ思考シ、且ツ當時警察署長ヘモ其事ヲ注意シ置キタルニ、彼レハ此手段ヲ履行セズシテ直チニ犯罪人及ビ死體ヲ上海縣令ヘ交付セリ。小生ハ當初ヨリ此事ヲ聞クヤ、是レ頗ル不當ノ處分ナリト考ヘ、領事會議ヘ提出スベキ歟ト思ヒシモ、新參領事ニシテ自ラ揭案者タルハ稍ヤ穩當ヲ缺クノ嫌ヒ有リ、況ンヤ又本犯罪事件ハ大ニ外交上ニモ關係シ居ル事ナレバ、故ト差控ヘタリ。然ルニ他ノ領事中ニモ此事ニ付訝疑ヲ抱クモノ有リシト見エ、昨五日暴殺者朝鮮人ノ裁判管轄及ビ彼ヲ懲罰セシムルノ方法ニ付領事會議ヲ開クベキ間來會アリタキ旨當港筆頭領事ヨリノ回章ニ接シタリ。(案ズルニ法國總領事ノ思ヒ付キニテ筆頭領事葡國總領事ヘ内談致シタルニヨルナラン)

抑モ當港居留地ノ制タル、市會員ハ居留外人一般ヨリ選舉サルベキモノナリト雖モ、其實多クハ○人ヨリ組織シ、其他警察長官以下大概同國人ナルヲ以テ、殆ンド居留地ノ政務ハ○人ノ掌握スル處ニ係リ、又○領事ノ勢力頗ル盛大ニシテ、市會及ビ警察長官ハ全ク彼ニ左右セラルルノ内情アレバ、此度ノ事モ亦○領事ノ勸告ニ基キシモノニアラズヤトノ疑念ヲ他領事中ニ生ジタル事ト推知セラル。然レドモ若シ果シテ此推測ノ通りナレバ、彼ハ如何ナル目的ヲ以テナシタルカ、或ハ在北京○公使ノ内意ニ因リタルカ、又ハ自ラ進ンデ此機ニ乘ジ清國ノ所望ヲ容レ、他日要求ノ件ヲ容易ナラシムル具トセシヤハ判然セズト雖モ、要スルニ當港ニ於ケル英、

佛、獨、墺領事等ノ間ニ互ニ競争シ、就中佛、露、墺及ビ他ノ羅典國ハ○人ノ處置ニ付不平ヲ抱キ居ル狀況ハ實ニ想像ノ外ニアリ。

而シテ右會議ニ於ケル議事ハ格別盛ナル討議ニハアラザリシモ、○領事ハ殆ンド答辯者ノ位置ニ立チテ諸方ヨリノ質問ニ應ジ、事情ヲ知ラザル傍觀者(若シ之アレバ)ニハ頗ル奇異ノ感覺ヲ生ジタルコトト信ズ。又同領事ハ此件タル元領事ヲ派遣セザル外國人ノ犯罪ナレバ、勿論清國ヘ引渡スコトハ當然ナリ。然レドモ清國ハ之ヲ朝鮮ヘ交付シ、罪人ヲ罰セズシテ却テ之ヲ賞スル由ナレバ、洪鍾宇ヲ處罰スベキコトヲ筆頭領事ヨリ在北京筆頭公使ヘ要求スベシトノ動機ヲ提出シタレドモ、種々異論アリテ、既ニ犯罪人ヲ無條件ニテ交付シタル以上ハ、今更斯ノ如キコトヲ領事團體ヨリ申出ヅルモ無益ニシテ、更ニ其効ナカルベシトノ反對論出デ、右ノ動機ハ遂ニ消滅ニ歸セリ。又○國領事ハ會審衙門陪審官ナル○副領事「スコット」氏ガ此件ニ付該衙門ヘ受理シ、豫審ヲ遂ゲザリシコトノ不注意ナルヲ痛ク駁撃セリ。拙者モ亦一通リ該裁判權ニ關シ意見ヲ開陳シタリ。其大要ハ、抑モ此犯罪タル日本旅館ニ於テ起リタルモノナレバ、日本領事ノ裁判ニ歸スベシトノ說ヲ唱フルモノアルヤニ聞キ及ビタレドモ、犯罪人ハ全ク朝鮮人ニシテ、居留地ニ領事ナキ以上ハ○領事ノ說ノ如ク他國領事ノ干涉スベキニアラズ。然レドモ當港ノ習慣法及ビ會審衙門ノ規則ニ因レバ、本件ノ如ク領事ヲ有セザル外國人居留地内ニ於テ

重罪ヲ犯シタル時ハ、該衙門ノ豫審ヲ經テ縣令ヘ移シ處罰セシムルコト至當ナルベシ。蓋シ犯罪者ハ自ラ國王ノ命ナリト唱フト雖モ、此王命ハ朝鮮國內ニ於テハ有効ナラン、然レドモ外國ニ於テハ無効ナリ。彼ハ我居留地ニ於テ重罪ヲ犯シタレバ謀殺ノ罪ハ免ルベカラズ、若シ國王ノ命ナリト稱スル犯罪人ナリトテ特別ノ取扱ヲナスニ於テハ、居留地ノ治安ヲ保持スルコト蓋シ難カルベシトノ主意ナリキ。次イデ種々議論ノ末、結局犯罪人洪鍾宇ヲ相當ノ刑ニ處セシムルヤウ清國政府ヘ照會スルコトヲ各自其公使ヘ要求スベシト決議セリ。尤モ領事ノ中ニハ既ニ無條件ニテ市會ガ交付シタルガ故、朝鮮ヘ引渡シタレバ處刑ニ付テハ敢テ關スル處ニアラズト清國政府ニ於テ回答スルハ必然ナレバ、格別ノ効驗ナカルベシト云ヒ居ル者モ有リキ。尙ホ又右議事申拙者ハ○國領事ニ向ヒ、余ハ着任日淺ク警察署ノ權根ヲ知ラズ、被害人ノ死體ヲ居留地ニ埋葬セズシテ清國官吏ヘ交付スルノ權アリヤ質問シタルニ、之レハ清國ニテ審査ニ必要ナリトノ要求ニヨリ交付シタルモノナレバ、差支無シト思フ、況ンヤ彼ハ朝鮮人ナレバナリ云云ト答ヘタリ。然ルニ他ヨリ又何故朝鮮人ハ特別ナルヤト問ヒ、朝鮮ハ清國ノ屬邦ナリト云ヘバ、否、屬邦ニアラズ、我ハ獨立國トシテ條約ヲ結ベリ、朝鮮ニ渡サバ死體ノ上ニ刑戮ヲ加フベシ、無條件ニテ渡シタルハ何事ゾヤ等反問攻撃ノミニテ、○領事モ大ニ答辯ニ窮シタルガ如ク見エタリ。

右會議ニ列シテ實地議事ノ模様ヲ案ズルニ、○領事「ハンネン」氏ハ眞面目ニ他ノ質問ニ對シ一々市會ノ處分ニ付キ辯護ノ勞ヲ取ル等、全く同氏ガ内諾ニ因リ市會ガ斯ノ如キ不都合ノ處置ヲナシタルコトハ事實ト認ムルノ外ナシト信ズ。果シテ然リトセバ、○國ハ此件ニ付多少清國ノ都合ヲ圖リタルハ外交上深意アルニハ非ザルカト思惟セラレザルニ非ラズ。

明治二十七年四月六日

在上海

大越成德

追テ本文○領事自ラ動議ヲ提出シタル節、市會ノ犯罪人ヲ清國官吏ニ交付シタルハ至當ノ處分ナルモ、其後聞キ及ビタルニハ、彼ハ朝鮮ニ引渡サル、ニ於テハ却テ厚遇セラルベシトノコトナルガ故ニ、動議提出ノ必要アリ云々ト辯ジタリ。而シテ公然トハ言ヒ兼ヌルモ、此事ハ在京城ノ袁世凱ヨリ道臺ヘ通知アリタリト道臺ヨリ聞キ及ベリ云々、然レドモ此說タル犯罪人引渡前既ニ新聞紙ニモ記載アリ、且ツ該領事モ久シク東洋ニ駐在シ居レバ、斯ノ如キ事ヲ推知出來ザル人物ニモアルマジク、加之、引渡前

既ニ彼ト道臺ト多少ノ内談無シトモ保證シ難シ。要スルニ此件ニ付領事中非難スルモノアルヲ聞キ、自ラ進ンデ動議ヲ提出シ、市會ヲ庇保スルト共ニ、自ラ關係ナキコトヲ示サントノ計劃ニ出デタルニハ非ザルカト疑ハザルヲ得ズ。

金玉均ノ衣類及ビ寫眞等取締方

曩ニ清國上海ニ於テ暗殺サレタル金玉均ノ死體ハ其後韓國楊花津ニ於テ切斷ノ上同處ニ曝サレタルガ、仁川在留本邦人中現場ニ就キ窃カニ其寫眞ヲ取り、且ツ其近傍ニ委棄サレタル同人ノ衣類並ニ毛髮ヲ拾ヒ、之ヲ東京京橋區交詢社内甲斐軍次ナル者ニ宛二十一日仁川港出帆ノ玄海丸ニ積込ミ、本邦へ送付スル爲メ已ニ當地ヲ發送シタル哉ニ聞キ及ビタリ。然ルニ右寫眞ハ、今後モ續々本邦へ向ケ輸出セラル、コトト成ルヤモ計ラレズ、然ル所若シ該品又ハ金ノ衣類毛髮等ヲ以テ本邦ノ人心ヲ激昂セシムル道具ニ供スル者有ルニ至ラバ、甚ダ不都合ト信ズルヲ以テ、然ルベク注意アラン事ヲ乞フ。

明治二十七年四月二十日

在京城

内田定槌

拜啓此程中浪華へ羈留ノ金玉均今度岩田三平ト變名シ、清國渡航ノ目的ヲ以テ昨日神戸表へ出發シタル旨ノ電報ハ既ニ其筋ヨリ内申致シタル事ト存候。然ルニ唯今神戸ヨリノ再報ニ、昨日同地出帆ノ西京丸ニ乗組上海へ向ケ出發、同行者ハ北原新次、清國人吳靜軒ノ二人ニ有之候由、事實相違無之ト申事ニ御座候。金玉均ノ清國渡航ハ實ニ怪訝ノ至リニ不堪候、外相ヨリ御聞込ノ儀モ有之候へバ心得迄ニ御漏被下度奉願上候。外務省ニテモ承知相成度儀ニ候へバ、上海ノ我が領事へハ内々心得方訓諭不被致置候テハ萬一ノ事有之候克領事ノ處分我政府ノ方針ニ違候様ノ義出來候哉モ難計存候。兎角前文ノ次第御含ミ迄奉申上候。匆々不悉

三月念四夜

伊藤巳代治

首相伯閣下

唯今外相へ面會、朝鮮公使ト往復ノ顛末詳細承知仕候。既ニ以公信明朝八時迄ニ彼ノ決定ヲ待可之旨申送相成候上ハ、其機會ニ臨ミ最後ノ手段ヲ施スヨリ無之候。日來住復ノ顛末中、今日ニ至リ方向稍ヤ相變候點ハ前日ニ在リテハ證據人トシテ兩樞生ノ召喚ヲ要シタルモ（小生證人トシテ召喚ハ始メテ承知仕候）他ノ韓人取調ノ結果ヨリ更ニ共謀者即チ刑事被告人トシテ拿捕ヲ要スル一事ニ有之候。刑事被告人トシテ引渡ヲ請求スルハ朝鮮公使館トシテ愈ヨリ不利益ノ地位ニ立タシムル譯ニ付、好都合ト存候。何レ明朝何分ノ決定有之候迄ハ該公使館ノ周圍警戒最モ奸要ニ有之、小倉ヘモ尙ホ注意可仕置候。

閣下御來訪ノ事モ外相へ申入候ヘドモ、英公使ト前約有之由ニテ、四時半頃迄ニ談話ノ時ヲ移シ、御光來被下候トモ拜晤ノ機會有之間敷トノ事ニ有之候。尤モ今晚ハ有栖川宮ニテ拜青可被致由ニ御座候。小弟ハ是ヨリ官舎へ引取仕可申、何時ニテモ御用次第御下命之處へ拜趨可仕候。右御含ミ迄。勿々不悉。

四月初二

首相閣下

伊東巳代治

李逸植外數名被告事件

豫審終結決定書

東京市芝區櫻田本郷町四番地安田リウ方止宿

朝鮮國人 李 逸 植

三十六年三月生

右同所寄留 佐賀縣士族 無職

川 久 保 常 吉

三十年十一月生

右同所止宿

朝鮮國人 權 東 壽

五十三年二月生

右同所止宿

朝鮮國人

權

在 壽

三十七年十月生

大坂市西區長堀南通四丁目番地不明

大三輪長兵衛方止宿

朝鮮國人

金

泰

元

二十一年二月生

右謀殺教唆、謀殺未遂被告事件豫審ヲ遂グル處

被告李逸植ニ於テハ朝鮮國亡命者朴泳孝、金玉均、李圭完、鄭蘭教、柳赫魯、李誼昊ノ六名ハ朝鮮國ノ逆賊、且ツ同人等ガ日本國ニ在住セバ彼我兩國ノ平和ヲ維持スル能ハザルモノト思惟シ、之ヲ生獲又ハ殺害シ、本國朝鮮ニ送致スル目的ニテ、明治廿五年四月頃日本ニ渡航シ、以來專心朴、金等ト交際シ其甘心ヲ得、時機ヲ窺ヒ居タリ。偶々知友洪鍾宇ハ朝鮮ヨリ歸リタルヲ以テ、之ヲ使嗾利用セント欲シ、明治二十六年十一月頃二名ニ對シ閔泳韶ヲ經由シ、國王ノ勅命ヲ受ケ、朴、金其他ノ逆賊ヲ討滅セントシ、當時其計劃中ナリ、故ニ逸植ノ指揮命令ハ國王ノ命令ナリト稱シ、或ハ榮譽利欲ヲ説キ、以テ之ヲ勸誘シ、遂ニ其承諾ヲ得、爾來右二名

ニ金品ヲ給付シ、常ニ朴、金等ノ動靜ヲ窺ヒ、每事報導セシメ、種々ノ計策ヲ爲シタリ。然ルニ當時朴、金二名ハ不和ニシテ、之等ノ者ヲ同所ニ集メ、同時ニ生獲又ハ殺害スルノ容易ナラザルコトヲ知り、先ヅ金玉均ヲ他國ニ誘出シ、殺害スルト同時ニ、日本内地ニ於テ朴泳孝其他ヲ殺害スルニ若カザルモノト決意シ、明治二十七年二月中、金玉均ニ對シ、清國ニ至リ李經芳李鴻章ニ面接シ、東洋ノ國事ヲ談ゼバ必ラズ積年ノ宿望ヲ達スルニ至ルベシ、其紹介通辯ハ清人吳靜軒ニ清國ニ至リ、爲替金受取等ノ事ハ洪鍾宇ニ爲サシムベシ云々ト勸誘シ、又一方ニハ被告川久保常吉ニ於テ、洪鍾宇ト共ニ逸植ノ指揮ヲ受ケ、玉均ノ清國行並ニ鍾宇ヲ同行セシムルコトニ盡力シ、遂ニ玉均ヲシテ鍾宇ト共ニ清國ニ至ルコトヲ決定セシメタリ。而シテ玉均ハ明治二十七年三月十日和田延次郎及ビ鍾宇、靜軒等ト共ニ東京ヲ發シ、大坂ニ至リタル際、逸植ハ鍾宇ヲ大坂西成郡曾根崎村ノ妾宅ニ止宿セシメ、玉均ト共ニ清國上海ニ渡航、着船ノ際、夜中ナレバ東和洋行ニ至ル途中ニ於テ銃殺シ、若シ日中ニシテ東和洋行ニ投宿ノ上、同家三階ナレバ同ジク銃殺シ、二階以下ナレバ斬殺シ、何レモ首ヲ刎ネ、手足ヲ斷チ「カバン」ニ入レ、携帶逃走スベシ。然レドモ危急ノ場合ニ於テハ臨機ノ處分アルモ可ナリト教唆シ、且ツ殺害ノ用ニ供スル短刀、短銃及ビ兇器藏匿ノ場所ヲ設ケアル朝鮮服ヲ交付セリ。同年同月二十三日玉均等神戸ヨリ乗船スルニ當リ、逸植ハ右一行ノ往復汽船賃其他ノ費用ヲ支辨シ、且ツ上海ニ於

テ受取ベシト稱シ、金五千圓ノ虚偽ノ爲替證ヲ玉均ニ交付シ、一行四名ヲ出發セシメタリ。而シテ玉均其他ノ者ハ同年同月二十七日清國上海ニ着シ、先ツ鍾宇、靜軒ノ二名ハ同所缺馬、日本旅館東和洋行吉島德三方ニ至リ、居室ヲ定メタル後、玉均及ビ延次郎ヲ迎へ、同家ニ投宿セシメ、其翌二十八日午後三時頃、鍾宇ハ豫テ逸植ヨリ交付セシ朝鮮服ヲ着シ、短銃ヲ持シ、玉均ノ居室即チ同家二階第一室ニ至リ、延次郎ハ處用ノ爲メ階下ニ行キ、玉均ハ寢臺ニ横臥シ、支那小説繙讀ノ隙ヲ窺ヒ、右短銃ヲ以テ同人ノ頭部、腹部、背部ノ三ヶ所ヲ射撃シ死ニ至ラシメタルモノナリ。

以上ノ事實ハ證憑明確ニシテ、被告李逸植ハ人ヲ教唆シ謀殺罪ヲ犯サシメタルモノ、被告川久保常吉ハ謀殺豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル從犯ナリ。之ヲ法律ニ照スニ、逸植ノ所爲ハ刑法第五條、第四百條、第二百九十二條ニ、常吉ノ所爲ハ同法第九條、第二百九十二條ニ該當スル重罪犯ト思料スルヲ以テ、刑事訴訟第六十八條ニ則リ、本件ヲ東京地方裁判所ノ重罪公判ニ付スルモノナリ。

但シ被告逸植、常吉ハ此決定送達ヨリ三日内ニ抗告スルコトヲ得。

被告李逸植ハ金玉均ヲ清國上海ニ於テ洪鍾宇ニ殺害セシメ、他ノ朴泳孝、李圭完、鄭蘭教、柳赫魯、李誼昊ノ五名ヲ東京ニ於テ殺害シ、其首及ビ手足ヲ切斷シ、權東壽、權在壽ニ携帶逃

走セシムルノ意思ニテ其情ヲ二名ニ通ジ、共ニ頭髮服裝ヲ變ジ、明治二十七年三月二十五日出京、芝區櫻田本郷町四番地雲來館安井リウ方ニ投宿、豫テ使曠アル川久保常吉、金泰元等ト謀リ、朴孝泳其他ノ者ヲ雲來館ニ招キ殺害セント欲シ、之ヲ決行スベキ一室ニハ流血ヲ防グ爲メ毛布數枚ヲ敷キ、屍體ヲ藏匿スル支那大「カバン」ヲ置キ、又短銃、刀劍等總テ殺害ノ準備ヲ爲シタル後、朴孝泳等ヲ同家ニ招クノ手段トシテ故ヲ朴泳孝ノ不在ヲ窺ヒ、數回訪問シ或ハ洋酒、牛肉等ヲ贈與シ、其答禮ノ爲メ來ラシメントスルモ來訪セザルヲ以テ、更ニ口實ヲ設ケ泳孝ヲ迎ヘント欲シ、同年同月二十七日逸植、常吉同道ニテ泳孝ノ止宿スル京橋區築地一丁目原セキ方ニ至ル途中、泳孝ニ出會シ、本日朝鮮料理ヲ饗スルヲ以テ共ニ雲來館ニ來ルベシト勸メタリ。然レドモ泳孝ハ他ニ用事アリ應ズル能ハズ、後刻親隣義塾ニ來リ待ツベシト答へ、互ニ別レタル後、逸植ハ更ニ權東壽ト共ニ麴町區一番町二十九番地親隣義塾ニ至リ、泳孝ノ歸塾ヲ待タズ名刺ヲ殘シ歸宿シ、猶ホ泳孝ノ來ルヲ待チ居タリ。今日午後四時頃豫ネテ内應ノ爲メ親隣義塾ニ寄宿セシメアル泰元ハ泳孝ノ使トシテ來リ、泳孝ハ旅行スルヲ以テ直チニ來訪アリタキ旨ヲ告ゲタリ。然レドモ逸植ハ其不實ナルヲ知り、歸京ノ後面會セント答へ泰元ヲ歸シタリ。其翌二十八日ハ上海ニ於テ玉均ヲ殺害スル期日ナリ、一度該兇報到達セバ泳孝等警戒シ到底目的ヲ達シ遂グル能ハザルモノト苦慮シ居タル際、柳赫魯來リ、泳孝ハ殺害ノ計策アルコトヲ探

知シ、明二十八日逸植ヲ親隣義塾ニ招キ捕縛ノ上責問セントスル由ヲ告ゲタリ。依テ逸植ハ最
 早期日ノ切迫且ツ計策ノ發露セシ以上ハ非常手段ヲ以テ目的ヲ達スルノ外途ナシト決意シ、其
 翌二十八日午前六時頃、内應者泰元ヨリ朴泳孝ハ不在ナリ、午前十時頃來ルベシ云々ノ書翰ヲ
 見、之レ泳孝ノ策略ナルコトヲ知り、川久保常吉、權東壽、權在壽ノ三名ヲ招喚シ、右ノ事實
 ヲ告ゲ、且ツ自ラ親隣義塾ニ至リ、縛セラル、トキハ必ラズ泳孝、圭完、蘭教等一室ニ集リ居
 ルヲ以テ、其機ニ投ジ、權二人ハ短銃或ハ刀劍ニテ右三名ヲ殺害スベシ、又常吉ハ豫テ用意ノ
 兇器ヲ權二人ニ携帯セシメ、親隣義塾ニ來ラシムベシト指揮シ、三名ノ承諾ヲ得テ急遽雲來館
 ヲ立出デ、先ヅ原セキ方ヲ訪ヒ、泳孝ガ義塾ニアルヤ否ヤヲ確メ、直チニ親隣義塾ニ至リ二階
 ニ登ルヤ、豫期ノ如ク圭完、蘭教、平吉、亮、淳ノ四名ニ麻繩ヲ以テ縛セラレ、續テ泳孝來リ
 同人ニ玉均上海行及ビ泳孝殺害等ノ事實ヲ責問セラレツ、モ二權襲ヒ來ルコトヲ待居タリ。然
 ルニ二權ハ逸植ノ指揮ヲ諾スルモ其行爲非常手段ナルニ驚怖シ、短銃ヲ外套ノ隠クシニ容レタ
 ル儘雲來館ニ潜伏シ、遂ニ親隣義塾ニ至リ決行セザルモノナリ。
 以上ノ事實ハ證憑明確ナリト雖モ、總テ謀殺豫備ノ行爲ニ止マリ、着手後ノ未遂ト云フヲ得
 ズ、依テ其所爲罪トナラズ、刑事訴訟法第六十五條ニ從ヒ免訴シ、且ツ被告權東壽、權在壽、
 金泰元ノ三名ハ放免スルモノ也。

明治二十七年四月二十六日

東京地方裁判所

豫審判事 飯田 高 顯

裁判所書記 松島 虎之助

豫審終結決定

東京市麴町區一番町二十九番地止宿

朝鮮國人 朴 泳 孝
三十四年六月生

右 同 所 止 宿

朝鮮國人 李 圭 完
三十三年十一月生

右 同 所 止 宿

朝鮮國人 鄭 蘭 教
三十一年一月生

右同所止宿

朝鮮國人 朴 平 吉

二十四年五月生

右同所止宿

朝鮮國人金興國事 徐 亮 淳

三十四年六月生

右同所止宿

朝鮮國人 柳 承 萬

二十四年二月生

右監禁、制縛、毆打、拷責被告事件豫審ヲ遂グル處

被告等ハ李逸植、權東壽、權在壽、川久保常吉、金泰元等共謀シテ、朴泳孝其他ノ者ヲ芝區櫻田本郷町四番地雲來館ニ招キ殺害セント謀リ居ルコトヲ探知シ、猶ホ首謀者逸植ヲ招喚シ其實否ヲ糾サント欲シ、電信又ハ使ヲ以テ來訪ヲ促スモ、時間ヲ違ヒ來ラザルヨリ、朴泳孝、李圭完ハ逸植ノ内應者タル金泰元ニ詐僞ノ書面ヲ作爲セシメ、逸植ヲ招キ捕縛ノ上責問セント謀リ、圭完ハ之ヲ鄭蘭教、朴平吉、徐亮淳ニ通ジ、明治二十七年三月二十七日夜金泰元ヲシテ逸

植ニ宛テ、本日朴泳孝ハ千葉地方ニ旅行シ不在ナルヲ以テ、明二十八日午前十時頃來訪アリタシ云々ノ文旨ニテ招狀ヲ郵送セシメ、其翌二十八日午前九時頃逸植ガ麴町區一番町二十九番地親隣義塾ニ來リ二階ニ登ルヤ、豫謀ノ如ク圭完、蘭教、平吉、亮淳等逸植ノ手ヲ採リ麻繩ヲ以テ背手ニ縛シ、圭完ハ仕込杖ヲ傍ラニ置キ威勢ヲ示シ、又鐵火箸ヲ以テ面部ヲ毆打シ微傷ヲ負ハシメタリ。而シテ泳孝ハ捕縛毆打ノ際現場ニアラザルモ、豫メ謀リタルモノナレバ、逸植ヲ縛シタル儘對坐シ、殺害ノ事及ビ玉均上海行ノ顛末ヲ責問シ、又圭完等ハ其周圍ニテ早ク言ヘト威迫セリ。逸植ハ泳孝等ノ責問ニ對シ、玉均上海行云々ハ同人ノ奸策ニ出デ、大三輪長兵衛ヨリ金員ヲ騙取スルノ手段ニシテ、當時玉均及ビ延次郎ハ長崎碇泊ノ露國軍艦ニアリ、又泳孝等ヲ殺害スル云々ハ全ク虛僞ノ誣言ナリト辯疏セシニヨリ、同人ノ荷物ヲ雲來館ヨリ取り寄セテ調査スルニ、逸植辯疏ノ事實ト多少符合スル書類物件アリタル爲メ、同日午後二時頃逸植ノ縛ヲ解キタルモ、泳孝ハ猶ホ其信否ヲ確ムルマデ逸植ヲ留置スル意思ヲ圭完等ニ通ジ、荷物中ニアリタル僞造ノ詔諭、勅托書、印章並ニ書翰、金員等ヲ携帶シ柴四郎方ニ至リ、其取調ヲ依囑シ、圭完、蘭教、平吉、亮淳、承萬ノ五名ハ交替衛護シ、翌二十九日午後二時頃マデ逸植ヲ親隣義塾ノ二階一室ニ留置シ、其自由ヲ束縛セシモノナリ。

以上ノ事實ハ證據充分ニシテ、被告朴泳孝、李圭完、鄭蘭教、朴平吉、徐亮淳ノ所爲ハ擅ニ

人ヲ制縛シテ毆打、拷責、負傷セシメ、又擅ニ人ヲ私家ニ監禁セシモノ、被告柳承萬ノ所爲ハ擅ニ人ヲ私家ニ監禁セシモノナリ。之ヲ法律ニ照スニ刑法第三百二十二條、第三百二十三條、第三百二十四條、第三百一一條三項ニ該當スル輕罪犯ト思料スルヲ以テ本件ヲ東京地方裁判所ノ輕罪公判ニ付スルモノナリ。

明治二十七年四月二十六日

東京地方裁判所

豫審判事 飯田 高 顯

裁判所書記 松島 虎之助

李逸植事件ニ付仲小路檢事ノ意見

李	權	權	金	川	李	朴
逸	東	在	泰	久	圭	泳
植	壽	壽	元	保	完	孝
	吉			常	國	

朴 平 吉

被告李逸植ハ朝鮮國人閔泳韶ヨリ曾テ甲申ノ役ニ於テ故國朝鮮ヲ亡命シ、現今日本ニ流寓スル逆徒ヲ誅伐スルハ國王ノ内諭ナルヲ以テ、宜シク之レヲ遂行スベシトノ密旨ヲ帶ビ、明治二十五年四月名ヲ商販ニ託シ本邦ニ渡來シ、自來機ヲ見テ之ヲ舉行セント漸次之レガ計圖ヲ畫スルモ、其殺戮セントスルモノハ其數一二ニ止マラズ、加フルニ各所ニ散在スルヲ以テ到底獨力ノ能ク企及シ得ベキニアラザルヲ知り、愈ヨ之ヲ斷行セントスルノ日ハ與類ヲ糾合シテ旨ヲ含メ、協力以テ事ヲ舉ゲンコトヲ計リ、其黨與ヲ得ントスル際偶マ近時佛國ヨリ朝鮮ニ復歸セントスルノ際、本邦ニ立寄りタル洪鍾宇ハ、其事ヲ與ニス可キノ人ナルヲ知り、明治二十六年十二月ノ頃同國人金有植ナル者ガ止宿セシ東京市小石川區諏訪町十七番地千野龍藏方ニ於テ、洪鍾宇ニ對シ金玉均、朴泳孝等ノ徒ガ日本ニ流寓スルハ東洋ノ全局ニ於テ平和ヲ維持スルニ妨害アルノミナラズ、又國王ニ於テ深憂セラル、所、余ハ國王殿下ノ詔諭ヲ帶ビ、彼等逆徒ヲ誅伐センコトノ命ヲ承ケタルモノナリ、余ガ命令スル所ハ即チ國王ノ命令セラル、處、事成效ノ上ハ報酬恩祿モ不尠ト百万辭ヲ構ヘテ之ヲ勸誘シタルヨリ、洪鍾宇モ遂ニ之レニ同意ヲ表シ、其指揮ヲ承ケテ進退センコトヲ對ヘタリ。茲ニ於テ被告李逸植ハ時ヲ見テ洪鍾宇ヲ伴ヒ朴泳孝ノ方ニ至リ、或ハ陰ニ金玉均ニ會見セシメ、洪鍾宇ハ實ニ好良ノ人物ナレバ自來親シク交際セラ

レンコトヲ求ムベキ旨ヲ通ジ、成ルベク之ヲ親近セシメンコトヲ計レリ。然ルニ金玉均ハ常ニ被告ノ舉作ヲ疑ヒ、偶々人ニ對シテ李逸植ハ何等ノ目的ヲ以テ日本ニ渡來シタルモノナルカ、未ダ其眞意ヲ解スル能ハズトノ語氣ヲ漏シタルコトヲ聞知シ、金玉均ニ於テ苟クモ疑念ヲ懷クノ間ハ到底宿意ヲ果ス能ハズ、速ニ之ヲ融解セシムルニ若カズト、夫レヨリ機ヲ察シ時ヲ見、一旦閑談ノ際金玉均ニ對シ、余モ朝鮮政府現時ノ政體ハ一たび之レガ革命ヲ企テザルベカラズ、幸ヒニシテ機會ノ乘ズルアラバ早晚之ヲ斷行センコトノ素望ヲ抱クモノナリト如何ニモ素望ナルガ如ク熱心ヲ面ニ表シ説キ付ケタルヨリ、金玉均モ亦漸ク之ヲ信ズルニ至リ、時トシテハ事、機密ニ涉ルノ談話ヲモ爲スニ至リタルヨリ、李逸植モ漸ク機會ノ至レルヲ知り、遂ニ愈ヨ殺害ノ計畫ヲ爲スニ至レリ。

當初、被告李逸植ガ金玉均、朴泳孝等六名ヲ殺害センコトヲ計ルヤ、金玉均、朴泳孝ハ常ニ其居所ヲ異ニスルモノナルヲモツテ、同時ニ之レヲ殺害セントスルハ事最モ難キ所、又時ヲ異ニシテ之ヲ殺害セントスレバ一方ニ於ケル決行ハ其報直ニ他ニ達シ、慎重戒心ヲ加フルニ至リ事終ニ成ラザラン、故ニ遠ク之ヲ誘出シ而シテ同時ニ事ヲ舉グルニ若カズト窃カニ洪鍾宇ニ其意ヲ授ケ、清國上海ハ事ヲ舉グルニ便ナレバ、詐言ヲ構ヘテ金玉均ヲ誘出シ上海ニ到着スルヲ待ツテ之ヲ殺害セント、謀謀已ニ成リ、明治二十七年一月頃、東京市芝浦海水浴場ニ僑寓スル

金玉均ニ對シ、平素ノ如ク談話ノ際、金玉均ハ被告李逸植ニ向ヒ、故國ノ革命ヲ企テントスルニ於テ其策ノ最モ得タルモノハ果シテ如何ナル手段ニ依ルベキカノ話頭、被告ハ直ニ之ニ應ジ一事業ヲ起サントスルハ到底獨力ノ能ク及ブ所ニアラズ、必ラズヤ一強國ノ援助ヲ仰ガザルベカラズ、方今ノ大勢ニ於テ之ヲ歐洲ニ就イテ考フルニ、佛國ニ依ルカ將タ魯國ニ依ルカ、此ニ途ニ付テ孰レカ其一ヲ採ラザルベカラズ、幸ニシテ洪鍾宇ハ佛語ニ熟達スルモノナルヲ以テ、之ヲ具スルニ於テハ萬事ニ便宜ヲ得ルナラン。且ツ又余ハ曾テ清國ニハ十四年間流寓シ、略ボ同地ノ事情ニ通ズルノミナラズ、數多ノ知己ヲ有シ、殊ニ李鴻章ノ男李經芳ハ余ノ知己ナレバ一度清國ニ渡航シ、李經芳ニ依テ李鴻章ニ接シ、内意ヲ告ゲ苟クモ同人ノ一諾ヲ得レバ事忽チ成ルヲ得ベシト、語ヲ盡シテ之ヲ説キ、洪鍾宇モ亦共々傍ヲヨリ之レニ和シ、勸誘殆ンド餘ス所ナシ。茲ニ至テ金玉均色漸ク動キ、遂ニ一度ビ上海ニ渡航センコトヲ發言スルニ至レリ。

是ヨリ先キ明治二十六年十一月、二月ノ頃、被告李逸植ハ曾テ本國ニ於テ知り合ヒトナリタル被告川久保常吉ニ對シ、洪鍾宇ニ對シ爲シタルガ如ク國王ヨリ金、朴等ノ逆徒ヲ誅伐スベキ旨詔諭ヲ承ケタルモノナルコトヲ告ゲ、且ツ曰ク、苟クモ朝鮮ノ國賊ヲ殺害スルコトニ左袒シ、事成効ノ上ハ東洋ノ川久保常吉トシテ其名ヲ著ハスニ至ルベク、朝鮮假令如何ニ微ナリト雖モ王室ニ於ケル財貨ハ決シテ尠少ニアラズ、事成ラバ望ミニ從ヒ財貨ハ附與サルベク、又彼等逆

徒ノ爲ニ殺害セラレタルモノ、子孫ハ何レモ現時高貴ノ官人ナレバ、是等ノ者モ亦恩人トシテ待遇スルニ至ルベシト、或ハ功名ヲ以テ之ヲ煽動シ、或ハ利慾ヲ以テ之ヲ導キ、遂ニ之ニ加擔スベキ旨決心セシメ、被告常吉亦自今謀議ニ盡力スベキ旨ヲ述べ、茲ニ義兄弟タルノ約ヲ結ビ、夫レヨリ以後被告常吉ハ李逸植ニ對シ衣類金錢ノ供給ヲ仰ギ、李逸植ハ又其求メニ從ツテ之レヲ給與セリ。

斯ノ如ク被告李逸植ハ洪鍾宇ニ對シテハ金玉均ヲ上海ニ誘出シ之ヲ殺害スルコトヲ擔任セシメ、川久保常吉ニ對シテハ其謀議ヲ助勢スベキコトヲ命ジ、自己ハ大阪府曾根崎村ナル其妾野村トメ方ニ立歸リ、洪鍾宇ヲシテ金玉均ヲ大阪ニ誘引セシメ、被告常吉ヲシテ金玉均及ビ朴泳孝等ガ動靜ヲ探聞セシメ、之レガ報道ヲ爲サシムルコトト爲シタルニ、常吉ハ時ニ金、朴双方内外ノ事情ヲ報道シ、李逸植ノ指揮ニ從ツテ洪鍾宇ヲ助勢スルノ取計ヲヒラ爲シ、遂ニ本年三月十日金玉均ハ洪鍾宇、吳葆仁及ビ其從者和田延次郎等ト共ニ東京ヲ出發シ、翌十一日大阪ニ到着シ、同市大川町旅店磯部甚吉方ニ宿泊セリ。然ルニ洪鍾宇ハ直ニ被告李逸植ガ寓居タル野村トメ方ニ止宿シ、同月十三日以来被告李逸植ハ洪鍾宇ニ對シ實行ノ方法ヲ指定シ告ゲテ曰ク、上海ニ到着後ハ日本人ノ旅店タル東和洋行ニ宿泊スルコト、ナシ、汽船夜間ニ到着スルニ於テハ、旅店ニ達スルノ道途ニ於テ突然後ヨリ之レヲ銃殺スベシ。若シ又旅店到着後金玉均

ニ於テ同家三層樓ニ宿泊スルニ至テハ、短銃ヲ以テ射撃スベシ。二階以下ニ宿泊スルニ至テハ短銃ニテハ音響劇甚ナレバ、短銃ヲ以テ刺殺スベシ。殺害ノ上ハ直ニ首級ト手足トヲ切斷シテ之レヲ故國ニ携帯スベシ。然レドモ事急ナレバ直ニ逃走スベシト。然ルニ洪鍾宇ハ之レヲ途上ニ於テ殺害スルハ事甚ダ難シトテ之レニ應ゼザリシヨリ、然ラバ時機ノ如何ニヨリ臨機ニ之レヲ處置スベシトテ遂ニ之レニ一決シ、因テ李逸植ハ豫テ郷里ヨリ携帯シ來リタル短銃及ビ短銃ヲ交付シ、且ツ是等ノ器具ヲ携帯スルハ洋服ニテハ不便ナレバ、實行ノ際ハ長袖寬濶ノ朝鮮服ノ内部ニ是等ノ器具ヲ藏スベキ容囊ヲ附着シタルモノヲ作成シ、準備茲ニ全ク終リ、同月二十日李逸植ハ權在壽ト共ニ金玉均ノ一行ヲ神戸ニ見送り、金玉均等ノ疑念ヲ惹起セシメザランガ爲メ、故ラ往復ノ切符ヲ購求セシメ、同夜西京丸ニ乗込マシメ、翌二十四日同船ノ神戸港ヲ拔錨スルヲ見テ自宅ニ立歸レリ。

金玉均ノ一行ハ同月二十七日午後五時頃上海ニ到着スルヤ、洪鍾宇ハ直チニ出向ヒタル東和洋行ノ番頭ニ荷物ヲ交付シ、自己ハ旅店ノ座敷ヲ定メ來ルベシトテ立出デ、同七時頃座敷モ己ニ定マリタリトテ立歸リ、金玉均等一行ト共ニ東和洋行ニ至リ、金玉均並ニ和田延次郎ハ同家二階一號室ニ、洪鍾宇ハ同所ノ三號室ニ、吳葆仁ハ同ジク四號室ニ宿泊セリ。翌二十八日金玉均ハ一時他出シ、間モナク立歸リ、午後三時半頃氣分勝レズトテ洋服ノ上着ヲ脱シタル儘寢臺

ノ上ニ横ハリ、支那小説ヲ手ニシテ之ヲ默讀シ居リタリ。此際洪鍾宇ハ身ニ朝鮮服ヲ着シ、金玉均ガ居室ニ來リ、其室内ヲ逍遙シ居リタリ。此時恰カモ東和洋行ノ屋後ニハ爆竹ノ音響盛シナリシガ、和田延次郎ハ金玉均ノ所用ヲ達センガ爲メ其室ヲ立出デ、己ニ階下ニ降り去ラントシタルヨリ洪鍾宇ハ機會乘ズベシト豫テ密カニ携帯シ居リタル短銃ヲ取出シ、突然金玉均ガ頰部ヲ目懸ケテ撃發シ、續イテ其下腹部ヲ連撃シ、金玉均ハ驚愕ノ餘リ突然其室ヲ立出ントシタル背後ヨリ肩部ヲ懸ケテ又一撃シタルニ、金ハ其儘同所第八號室ナル本邦海軍大佐島崎某ノ居室前ニ至リ打チ倒レ、島崎ハ戸ヲ排シテ立出デントスルノ模様ナリシヨリ、洪鍾宇ハ直ニ階下ニ走セ降り遂ニ其場ヲ逃走セリ。

權東壽、權在壽ノ兩名ハ數年以前ヨリ本邦内地漫遊トシテ渡航シ來リ居リタルニ、昨二十六年々末ノ頃、本國政府ヨリ歸國ヲ命ゼラレ居リタルニ、李逸植ハ辭ヲ構ヘテ之レヲ引キ止メ置キ、本年三月十三日以來洪鍾宇ガ上海ニ渡航前、李逸植ガ居室ニ會合スルヤ、洪鍾宇ハ權兩名ニ對シ、其懷抱スル密謀ノ始末ヲ告ゲ、李逸植ハ又權兩名ニ對シ告ゲテ曰ク、今回本國政府ヨリ權等二人ニ對シ歸國ヲ命ジタルハ、本國政府ニ於テ逆賊トシテ疾視スル金玉均、朴泳孝等一連ノ者ト往來交際シタリトノ嫌疑ヲ有スルガ故ナリ。斯ノ如キ嫌疑ヲ蒙リタル身ヲ以テ其儘歸國スルニ至テハ、本國政府ハ其歸國ヲ待テ之ヲ屠殺スルハ必然ナルベシ。寧ロ此地ニ止マリ我

等ガ計劃スル謀議ニ加ハリ、共ニ之レニカヲ協ハシ、朴泳孝等ヲ殺害シ、而シテ其首級ヲ持シテ歸國スルニ至テハ、雷ニ一身ニ危害ナキノミナラズ、實ニ後來ノ得策タルベシト、權等兩名モ亦内心其歸國ヲ憂フルノ時ナルヲ以テ、遂ニ李逸植等ノ謀議ニ加ハリ、共ニ之レニカヲ盡スベキ旨ヲ對ヘタリ。李逸植ハ同月二十四日權在壽ト共ニ神戸ニ於テ金玉均等一行ノ上海ニ發途シタルヲ見届クルヤ否、直ニ大阪ナル其居宅ニ立歸リ、權兩名ニ對シ今ヨリ直ニ上京シ、朴泳孝等以下ノ殺害ニ著手セザルベカラズ。朝鮮ノ服裝ハ日本内地ニ於テハ事成ルノ後遁逃其他萬事ニ不便ナレバ、宜シク髪ヲ斷ジ服ヲ變ジ其狀貌ヲ變ゼザルベカラズト、三名何レモ髪ヲ斷ジ洋服ヲ着シ、直行ノ汽車ニ投ジ上京シ、其翌日二十五日着京、芝櫻田本郷町ナル被告川久保常吉ガ居所タル旅店雲來館ニ投宿シ、被告川久保常吉ニハ金五十圓、雲來館ニハ茶代トシテ金三十圓、雲來館主並ニ被告常吉等ノ兩親タルベキモノニ對シテハ各金二十圓ヲ附與シ置キ、直ニ殺害行爲ノ準備ニ着手セリ。

抑モ當初被告李逸植ガ金、朴以下ノ殺害方法ヲ計畫スルヤ、策三個ヲ畫ス、生擒ヲ以テ上トナシ、暗殺ヲ以テ中ト爲シ、事機切迫無己ノ時ニ際シテハ所ヲ撰バズ之ヲ斬戮スルヲ以テ其策ノ下ナルモノトス。彼等二名雲來館ニ着スルヤ、被告李逸植ハ被告常吉ヲ伴ヒ直ニ横濱ニ至リ、支那商館ニ就テ支那靴中其最大ナルモノ四個ヲ購求シ、之ヲ雲來館ニ持チ來ラシメ、其楮上ナ

ル自己ガ居宅ノ傍ニ備ヘ置キ、其翌二十六日芝日影町近傍ニ於テモ毛布六枚ヲ購求シ、且ツ權東壽ヲシテ楮、行、草其他數種ノ書畫ヲ揮毫セシメ、之ヲ居室ノ壁間ニ連掛貼布シ、其傍ラナル押入ノ棚上ニ裝藥シタル短銃二挺、短劍二口ヲ備ヘ、而シテ朴泳孝等以下ニ對シ別後久濶ノ面會朝鮮料理ヲ供スベシトテ之ヲ招致セン、彼等來ルヤ必ラズヤ壁上ニ貼布シタル書畫ノ品評ヲ爲スベシ、其虛ニ乗ジテ之レヲ生擒スベク、生擒能ハズンバ窃ニ刀劍ヲ以テ之レヲ刺殺スベク、數人一時ニ來ラバ到底之レヲ一室ニ於テ一時ニ舉行シ得ベキニアラズト、楮上數ヲ隔テタル權等ノ居室ニ於テ權東壽ヲシテ盛ンニ書畫ノ揮毫ヲ爲サシメ、朴等一連ヲシテ之レヲ二個所ニ分派シ、而シテ追次之レヲ遂行セント、準備已ニ成リ朴泳孝等ヲ雲來館ニ招喚センコトヲ計畫スル際、豫テ朴泳孝等ノ組織シタル親隣義塾ニ旨ヲ含メ、間諜トシテ入り込マシメ置キタル金泰元ノ口ヨリ、事端漏洩スルニ至リ朴等一連ニ於テ或ハ自分等ノ意中ニ疑念ヲ挾ミ居ラザルカノ模様ヲ探知シ、之ヲ懸念スル際、同日朴泳孝ヨリ至急面會シタキ旨ノ電報ヲ寄セタルヨリ、愈ヨ彼等ハ自己ノ行爲ニ疑念ヲ懷キ居ルコトヲ知り、尙ホ之ヲ試ミンガ爲メ直ニ飛ンデ行ク旨ノ返電ヲ發シ置キナガラ、故ラ之ヲ遅クラシ、同夜十一時過ギ麥酒、ブランデー、牛肉等數種ヲ携ヘ親隣義塾ニ至リタルニ已ニ朴泳孝ハ李ノ來ルヲ待チ兼ネ其居寓所タル築地一丁目ノ原セキ方ニ立歸リタル後ナルヲ聞キ、同夜ハ其儘雲來館ニ立歸ヘレリ。

其翌二十七日午前被告李逸植ハ被告常吉ト共ニ築地ノ寓居ニ朴泳孝ヲ訪ハントシテ赴ク途上朴泳孝ニ出會シタルヨリ、朴ニ對シ本日ハ久々朝鮮料理ヲ供セント已ニ準備ヲ調ヘタルヲ以テ雲來館迄來ラザルカト之レヲ勸誘シタルモ、朴ハ同日午前十時ニ他人ト會合ノ約アルヲ以テ其意ニ應ジ難キ旨ヲ告ゲ、且ツ一應面會ノ上話シタキコトアルヲ以テ、本日十二時ヲ期シ親隣マデ來リ吳レタキ旨ヲ申込ミ、被告李ハ之レヲ承諾シ置キナガラ、又モヤ故ラニ其時間ヲ違ヘ、同日午後權東壽ト共ニ親隣義塾ニ赴キタルモ、朴泳孝ハ已ニ他ニ立出テ面會スルヲ得ズ、其儘被告等ハ雲來館ニ立歸リタリ。同夜豫ネテ金玉均ニ隨伴シ居リタル劉赫魯、李誼吳ノ兩名雲來館ニ訪ヒ來ルヲ以テ、被告ハ直ニ兩名ニ對シ金玉均ノ依頼ナリト稱シ、自後自分ニ於テ兩名ノ一身ヲ扶助スベキ旨ヲ告ゲ、各金二十圓ヲ附與セリ。劉赫魯、李誼吳ノ兩名ハ被告李ニ對シ、朴泳孝等ハ李逸植ノ舉動ヲ疑ヒ、一時之ヲ親隣義塾ニ招喚シ事實ヲ糾訊セントスルノ模様アリ、殊ニ朴泳孝等一連ノ者ハ大ニ李逸植ノ所爲ニ憤激シ居ルヲ以テ、危害身ニ及ブヤモ計リ難シ、速カニ此地ヲ立去リ一身ノ安堵ヲ圖ルベキ旨ヲ告ゲタルモ、被告李ハ兩名ニ對シ余ハ毫モ此地ヲ逃避スルノ事由ナキ旨ヲ告ゲ、立歸ラシメタリ。尋イデ朴泳孝ヨリ金泰元ヲシテ、朴ハ明朝七時ヲ期シ地方ニ旅行スルノ存意ナリ、面會ヲ要スルコトアラバ其以前ニ來ルベキ旨ヲ告ゲ越シタルニ、李逸植ハ之レニ對シ余ハ久シク東京ニ滞在スルノ考ナルヲ以テ、他日面會ノ期アル

ベシ、旅行ノ意アラバ緩々旅行スベキ旨ヲ答ヘタリ。

然ルニ同夜ハ已ニ二十七日ノ夜ニシテ、金玉均等ノ上海ニ着スルハ實ニ今夕若クハ明朝ノ間ニアリ、彼等上海ニ到着スレバ洪鍾宇ハ直チニ機ヲ見テ事ヲ舉グルナラン、一朝金玉均殺害ノ電報當地ニ達スレバ朴泳孝等ノ戒心慎重ヲ加フルハ言フヲ俟タズ、報一タビ至ラバ萬事休ス、明二十八日ノ午前ヲ期スルノ外最早策ノ施スベキ餘地ナシ、上策固ヨリ行ハル、所ナシ、中策モ亦然リ、若カズ最後ノ策ニ依テ之ヲ斬戮スルノ外ナシ、思フニ朴泳孝ハ大イニ余ガ心中ヲ疑ヒ余ガ舉動ニ憤激セリ、明朝他ニ旅行セントセバ是レ畢竟余ヲ誘致センガ爲メノ詐言タルベシ。彼レハ斷ジテ旅行スルモノニアラズ、明朝ハ必ラズ其同志ヲ集メ一室ニ會合シテ事ヲ謀議スルナルベシ、余一タビ其席ニ至ラバ彼等ハ必ラズ余ヲ縛シ余ヲ糾訊セン、之ヲ機トシ余ガ黨與ヲシテ二三發砲セシムルニ至ラバ、朴等ニ因縁久シカラザルモノハ必ラズヤ驚愕其場ヲ遁逸スルナラン。餘ス所ノモノハ是レ實ニ朴ニ一身ヲ托シ、事ヲ終始スルモノ即チ余等ノ目的トシテ目指ス所ノモノナリ。此際内外相應ジ之ヲ斬戮スルニ至ラバ事一舉ニシテ成ルベシト、翌朝早起午前六時ノ頃ニ至リ權兩名、川久保常吉等ヲ一室ニ會合セシメ、昨夜來事情ノ顛末ト計畫シタル意見ヲ示シ、事急ナレバ最早已ムナシ、協同戮力一舉シテ成効ヲ期スベシト、權等ハ一時色ヲ失シ直ニ之レニ應ズルノ模様ナキヨリ、李ハ言ヲ勵マシ、事ニ臨ンデ舉作色ヲ失スルガ如キ

ハ到底成効ノ望ミアラザルベシ、苟クモ公義ノ爲ニハ之レガ系累タルベキモノハ余ハ余ノ愛兒ト雖モ之レヲ刺殺スルニ於テ躊躇セズ、須ラク此心ヲ以テ事ニ從フベシト、權等漸ク之レヲ諾シ、事ヲ共ニスベキ旨ヲ對ヘタリ。茲ニ於テ李逸植ハ豫ネテ裝藥シタル短銃二挺、刀劍二口ヲ被告常吉ヲシテ之レヲ權兩名ニ各一個宛ヲ交付セシメ、余ハ一步先キニ立出ヅルヲ以テ直ニ相次イデ來ル可シ、朴等ニ於テ余ヲ縛セバ余ハ之レニ應答ヲ爲シ居ル間ニ乗ジ發砲シツツ斫リ込ムベキ旨ヲ告ゲ、總テ之レガ手筈ヲ定メタル後、被告ハ急遽雲來館ヲ立出デ、二人挽キノ腕車ニ乗ジ、一時築地ナル朴泳孝ノ寓居ヲ訪ヒタルニ、不在ナリシヲ以テ、直チニ麴町區一番町親隣義塾ニ至リ、李圭完、鄭蘭敦等ト二三談話ヲ爲シ居ル中、彼等ハ突然之レヲ制縛セリ。其際朴泳孝等モ出デ來リ、共々之ヲ糾訊シ居リタルヲ以テ、李逸植ハ總テ豫想ノ手段ニ適合シ、權等兩名ノ來着ヲ待チ居リタルモ、權等ハ遂ニ其場ニ來ラズ、爲ニ目的ヲ達シ能ハザルナリ。

是ヨリ先キ李逸植ハ朴泳孝ニ對シテハ共ニ親隣義塾ノ組織並ニ其發達ニ盡力スベシト唱へ、余モ郷里ヨリ有爲ノ年少ヲ呼ビ寄セ入塾セシムルヲ以テ、宜敷之レガ指教ヲ乞フベキ旨ヲ告ゲ置キ、而シテ一面其同國人タル金泰元ニ對シ金圓ノ扶助ヲ爲シ置キ告ゲテ曰ク、現今東京ニ創立セラレタル親隣義塾ナルモノハ、日本ノ有志者ニ於テ朝鮮國ノ爲ニ設立シタルモノニシテ、當今ハ朴泳孝ニ於テ之レヲ專領シ居ルモノ、如クナルモ、親隣義塾ハ敢テ朴泳孝ノ有ニアラズ

後來必ラズ日本並ニ朝鮮兩國ノ利益トナルベキモノナレバ、該校舎ニ於テ充分勉勵シ、且ツ塾中ノ内狀ヲ余ニ密報スベシ。余ハ機會ヲ見テ朴泳孝ヲ斃シ、而シテ卿ヲ以テ該塾ノ首ト爲スベシ、且ツコノ計劃ニ就テハ已ニ數多ノ加擔モアリ、日本人川久保常吉ノ如キモ同謀者ナルヲ以テ、宜シク之ヲ遂行スベシ、事成効ノ上ハ夥多ノ金錢ヲモ得ラルベキ旨ヲ申含メ、本年二月ノ頃ヨリ該校舎ニ入塾シタル朴平吉、柳承萬ニ對シ、一日金錢上ノ談話ヨリ其計議ヲ彼等ニ告ゲ、余ハ斯ノ如キ計劃ヲナスモノナリ、此事成ルノ日ハ必ラズ夥多ノ金圓ヲ得ルノ望ミアリトコトヲ話シタルヨリ、朴平吉等ハ窃カニ之レヲ李圭完等ニ報ジ置キ、而シテ表面深ク金泰元ニ交ハリヲ結ビ、終リニ柳承萬ハ金泰元、川久保常吉等ト共ニ或ハ青樓ニ登リ、若クハ之レヲ西洋料理店ニ誘引シ、金泰元ヨリ其密謀ヲ聞キ之レヲ李圭完ニ報ゼリ。茲ニ於テ李圭完ハ朴泳孝ガ旅行先ナル甲府ニ之レヲ密報充分戒心ヲ加フベキコトヲ告ゲタリ。

朴泳孝ハ甲府旅行中李圭完等ノ報ニ接シ、三月二十六日東京ニ立歸リ、親隣義塾ニ於テ金泰元ヲ取糾サントシタルニ、李ハ常ニ言ヲ食ンデ來ラズ、同月二十七日ニ至リ李圭完等ハ大ニ憤激シ、一タビ李逸植ヲ呼ビ寄セ取糾シタル上、果シテ其實ヲ得レバ余ハ終身獄底ニ身ヲ置クモ覺悟ノ上ニテ彼ヲ殺戮スベシト、朴泳孝ハ之レヲ押サへ、李逸植ニ於テ斯ノ如キ害意ヲ懷クトスレバ實ニ眼ヲ具ヘザルモノナレバ、宜シク之レガ明ヲ失ハシムベシト、終ニ其夜金泰元ヲシ

テ李逸植ヲ呼ビ寄スルノ書面ヲ發セシメ、翌日李逸植ノ來ルヲ待テ之レヲ制縛シ、拷訊其實ヲ吐カシメンコトヲ謀リ、朴泳孝ハ築地ニ歸宅セリ。

翌二十八日午前八時頃李逸植ハ親隣義塾ニ來リ、李圭完、鄭蘭教等ニ對シ朴泳孝ガ居所ヲ尋ヌルヤ否、兩名ハ突然其兩手ヲ捕ラヘ朴平吉ハ麻繩ヲ持チ來リ遂ニ之レヲ制縛シ、李圭完ハ其傍ナル火箸ヲ以テ之レガ面部ヲ毆打シ、其鼻上ニ負傷セシメ、鄭蘭教ハ仕込杖ヲ手ニシ之ヲ責問セントスル際、朴泳孝モ來合セ、共々之ヲ糾訊セリ。然ルニ李逸植ハ此時ニ際シ尙ホ言ヲ設ケテ朴泳孝等ヲ欺瞞シ、金玉均等ノ上海ニ行キタルガ如キ模様ヲ爲サシメタルハ、是レ全ク大三輪長兵衛ヲ欺キ金圓ヲ騙取センコトヲ金玉均ト謀リタルモノニシテ、金玉均ハ事實決シテ上海ニ赴キタルモノニアラズ、長崎ヨリ轉ジテ魯國軍艦ニ其身ヲ陰シ、上海ニハ一名ノ日本人ヲ連レ行キ之ヲ殺害シテ以テ其面皮ヲ剥ギ、金玉均ヲ殺害シタリト稱道セシムルノ策ナリト詭言百端口ヲ極メテ之ヲ翻弄シタルヨリ、朴泳孝モ亦半信半疑ノ間ニ彷徨スルコトト爲リ、終ニ李逸植ガ荷物ヲ取寄セ之レヲ調査セント、鄭蘭教、朴平吉等ヲシテ李ガ荷物ヲ取寄セ之レヲ調査スルニ、一々李ガ陳述ト符合スルヨリ、茲ニ愈ヨリ疑惑ニ陥リ、先ヅ其縛繩ヲ解カシメ、尙ホ密カニ逃亡セシメザルコトヲ注意セシメ立出タリ、同夜李圭完、鄭蘭教、柳承萬、朴平吉等ハ徹夜之レガ見張リヲ爲シ、遂ニ其翌二十九日午後三時マデ之レヲ監禁スルニ至レリ。

李逸植外數名被告事件ハ豫審ニ於テ詳細調査ヲ遂ゲ、其ノ完結シタル事實ノ大要總テ別紙ニ記録シタルモノ、如シ。

本件被告人ノ供述スル所並ニ差押ヘタル證據書類等ニ付本件中疑點トナル可キ最大ノ關係ヲ有スル廉々一二ヲ列載センニ、

第一 本件李逸植ノ死罪即チ金、朴以下ヲ刺殺センコトヲ圖リタルハ朝鮮國王ノ詔諭ニ基クモノナルヤ否

被告李逸植ハ警察、檢事及ビ豫審廷最後ノ訊問ニ至ルマデ終始一貫二葉ノ詔諭ハ國王殿下ヨリ下賜セラレタルモノニ相違ナク、逆徒誅伐ノ命令ヲ被ムリタルニ相違ナシ、但シ直接ニ國王殿下ヨリ賜ハリタルニアラズ、當路大臣閔泳詔ノ手ヲ經テ下賜セラレタルモノナリト申立。又自分ノ所持スル二個ノ印判（即チ詔諭ニ押捺シアルト同一ノ印判）ハ詔諭ニ押捺シアリタルヲ模シ、而シテ之レヲ彫刻セシメタルモノナリト陳述セリ。

然レドモ朝鮮政府公文ノ回答書ニ依レバ、斯ノ如キ詔諭ヲ付與セラレタルコトナシト云ヒ、朴泳孝等モ亦該絹布ノ模様印璽並ニ其章句ノ状態ニヨルモ斷ジテ國王ノ詔諭ニアラズト云々。

又彼ノ印判ヲ彫刻シタル印判師ノ證言ニ依レバ、敢テ模形ニ依テ之レヲ彫刻シタルモノニアラズシテ、李逸植ガ單ニ草書ヲ以テ其文字ヲ記錄シ、注文シタルヲ相當ニ見計ヒ彫刻シタルモノナリト申立テ居レリ。

又右二個ノ印章ヲ殆ンド詔諭ト同一ナル繭紬ニ押捺シ、而シテ之レヲ該詔諭ナルモノト對照セシメ、鑑定者三名ニ鑑定セシメタルニ、何レモ同一物ニシテ毫モ差異ナキモノナリト申立タリ。

以上同國政府ノ回答書、證人ノ證言、鑑定人ノ申立等ニ徴スレバ、該詔諭ナルモノヲ以テ之レヲ真正ノモノナリト認ムル能ハズ。

然レドモ被告李逸植ガ朝鮮政府ノ當_中者タル閔泳韶等ヨリ其密旨ヲ承ケタリトノ點ハ之レヲ事實ナリト認メザルヲ得ズ、其證憑ハ

第一 李逸植ガ始終ノ陳述、第二李逸植ヨリ其實行前不日舉行スベキコトヲ通報シ併セテ其成效ノ上ニ於テ報知スベキ暗號電報ノ符合草稿。

第三 兪公使ノ李、洪兩名ニ宛テタル書面ノ模様、殊ニ其他一般ノ狀況ニ徴シテ明白ナリ。

公使兪箕煥ガ彼等ノ謀議ニ參與シ、之レガ計劃ヲ助成シ居リタルコトハ證據上明晰タリ。

第二 川久保常吉ガ金玉均ニ對スル洪鍾宇ガ殺害行爲ニ付キ之レヲ幫助シ

タルノ點

川久保常吉ガ李逸植ノ教唆ニ應ジ、金錢並ニ衣類等ノ贈與ヲ受ケ、其謀議ニ參與シ、金、朴兩人ノ舉動ヲ視察シ、時々之レヲ内報シ、詐言ヲ以テ金玉均ヲ誘出スルニ當リ、共ニ之レニ加効シ、洪鍾宇ヲシテ遂ニ金玉均ヲ誘引セシメタル點ヲ以テ、之レガ幫助ヲナシタルモノナリトシテ從犯トスルモ可ナルベシト思考ス。

第三 李逸植等ガ朴泳孝外數名ニ對スル謀殺未遂ノ點

此點ハ本件豫審進行上最モ困難ヲ極メタル點ニシテ、事極メテ曖昧疑似ノ間ニ涉リ、直象ヲ捕捉スルニ最モ難ンズル所也。

抑モ李逸植ガ警察並ニ檢事廷ノ陳述ニヨレバ、三月二十五日ニ雲來館ニ到着スルヤ、直ニ同館マデ朴泳孝等ヲ誘引シ、而シテ同館樓上ニ於テ事ヲ舉グルノ手筈ヲ以テ萬般ノ準備ヲ調へ、兀三朴泳孝ヲ招喚セント試ムルモ、朴泳孝ハ彼等ガ計畫ノ模様ヲ探知シ、之レガ招喚ニ應ゼズ、終リニ三月二十七日ノ夜ニ至リ、愈ヨ其夜若クハ翌二十八日ニハ上海ニテ洪鍾宇ノ事ヲ舉グル

ノ日ナルヨリ、時機切迫如何トモスルノ餘地ナキヨリ、遂ニ最後ノ策ヲ取ルニ決シ、權兩名ニ其意ヲ授ケ、裝藥シタル短銃、刀劍等ヲ交付シ、次イデ來ルベキ旨ヲ命ジ、親隣義塾ニ赴キタルニ豫想ノ如ク李圭完等ハ自分ヲ制縛シタルヲ以テ、萬事都合良シト心中窃カニ喜ビ居リタルガ自分ヲ縛スルヤ、或ハ毆打シ又鄭蘭教ノ如キハ仕込杖ヲ携帯シ來リタルヲ以テ、其勢ヒニ畏怖シ豫テ内意ヲ含メ入り込マシメ置キタル金泰元ハ其際逃ゲ出シタルヲ以テ、其近傍マデ來リ、已ニ發砲セントシタル權等兩名モ之レニ出會シ、金泰元ヨリ内部ノ模様ヲ聞キ、其儘逃走、公使館ニ逃ゲ込ミタルモノナル可キ旨申立テ、李ノ申立ニヨレバ其時間ノ模様ニヨルモ、權兩名ハ同日親隣義塾ノ近傍マデ來リタルモノナラザルベカラズ、果シテ然ラバ其公使館ニ逃ゲ込ミタルハ金泰元ノ報告ヲ聞キ、其危急ヲ感ジタルニ外ナラズ、事實斯ノ如シトスレバ其謀殺未遂タルハ毫モ疑ヒヲ容レザル所ナリ。

而シテ其外面ノ事實ハ、權兩名ハ勿論金泰元ノ三名ガ陳述ニ徴スルノ外アラザルナリ、之ヲ豫審判事ニ於テ金泰元ヲ共犯トシテ令狀ヲ發シタル所以ナリ。殊ニ裝藥シタル短銃、刀劍等ハ權兩名引致ノ後現ニ公使館ニ存在シタルヲ被告川久保常吉ガ之レヲ提出シタル等ニ徴スルモ、短銃、短劍等ハ二十八日ノ早朝李逸植ヨリ權兩名ニ交付シ、權兩名ハ之レヲ携帯シタル儘ニ公

使館ニ遁逃シタルコトハ明カナリ。

然ルニ權兩名ノ如キハ當初豫審判事ノ訊問ヲ受クルニ方テヤ、毫モ事實ヲ陳述セズ、李逸植ガ謀議ニハ何等ノ關係モ有セザル旨ヲ主張シ、甚シキハ其頭髮ヲ斷ジ服裝ヲ變ジタルノ點マデヲモ事ヲ曖昧模稜ノ間ニ付シ去ラントシ、二回、三回、漸次詰問ヲ受クルニ方リ、其答ニ窮シ遂ニ短銃ハ護身ノ爲ニ之レヲ携帯シ居リタリト唱へ、權東壽ノ如キハ護身ノ爲ニ公使館ヨリ附與セラレタルモノナリト杯、一モ事實ニ符合セザル點ノミヲ陳述セリ。殊ニ李逸植ガ危険ノ模様ハ他ノ事實ヲ陳述スル際思ハズ金泰元ヨリ聞キタリト陳述シ、直ニ豫審判事ヨリ其語ヲ捉へ之レヲ詰問スルニ方リ、倉皇其前言ヲ取消シ、否新聞紙ニテ一見シタルモノナリト變更スルガ如キ殊ニ權東壽ノ陳述中左ノ一節ノ如キハ彼ガ大ニ本邦刑法ノ主義ヲ吹キ込マレ、其犯罪ヲ構成セザル程度ニ於ケル事實ノ陳述ヲナスベシトノコトヲ指教セラレタルモノナルコトハ明白ナリ。

(前略) 殺シテ仕舞フトハ三人トモ各々心ニ思ツテ居タコトデスガ、三人デ兇器デモ持ツテ彼ガ宿元ニ忍ビ入ツテ其事ヲ果サバリシ時ハ、現行デスガ、未ダソコ迄ハ至ラズ、三人トモ暗ニ殺サウト云フ意見デ居タ譯デス。一體世上ノ人ハ人君ニモ成ツテ見タイト云フ考ヘハアリマス様デスガ、只ダ夫レハ心ニ思ツテ居ルダケノ事デス。

問 心ニ思ツタ許リデハナク、三人寄ツテ現ニ其ノ相談モ致シテ居タデハナイカ。

答 只ダ三人心ニ思ツテ居ルコトガ符合シタノデ云々。

此等ノ陳述ニ徴スルモ彼ハ只ダ單ニ内心ニ思考シ居リタル迄ナリト唱へ、其後ノコトハ陳述セザルナリ。然レドモ二十八日ハ現ニ上海ニ於テ洪鍾宇ガ事ヲ舉グルノ日ニシテ、權東壽ノ陳述スルガ如ク單ニ内心ニ思考シ居リタリト云フガ如キ時ニアラザルコトハ李逸植ノ陳述ニ因ルモ明白ナリ。

其他金泰元ノ如キモ亦然リ、常ニ三名ノ陳述ヲシテ符合セシメンガ爲メ、其時間ノ融通ニ窮シ、二十八日ノ午前親隣義塾ヲ逃ゲ出スヤ、午後九時ノ列車ニテ大阪ニ行キ、又引返シテ公使館ニ入りタリト陳述ス。而シテ同日午前親隣義塾ヲ逃ゲ出シテヨリ、午後九時マデハ何レニ居リタルカト問ヘバ、淺草公園ヲ散歩シ居リタリト答ヘ居レリ。危急身ニ迫リ義塾ヲ逃ゲ出シタル身ニシテ、公園ニ散歩シ居リタリト云フガ如キ其言ノ信ズ可カラザルコトハ明カナリ。

以上ハ只ダ其一班ニシテ、彼等三名ガ陳述ハ實ニ孟浪不明風ヲ捉フルト一般一モ信ズベキナシ。然レドモ要スル所權等兩名ハ二十八日ノ午後ニハ李逸植ニ續イテ外出シタルコトナレバ、彼等二名ノ口ヲ揃ヘテ主張スル所ナリ。

豫審判事ハ勿論本官モ彼等兩名ガ同日親隣義塾ノ近傍マデ立越シ、已ニ發砲セントスル際金泰元ニ出會ヒ、遂ニ其儘公使館ニ逃ゲ込ミタルノ事實ハ必ラズ之レヲ檢舉セント百方苦心、盡

シ得ベキノ搜查ヲ遂ゲテ、及ブ限リノ調査ヲ爲シ、其近傍ノ者ハ勿論雲來館ニ出入スル車夫マデヲモ取調べタルモ、午前ニ彼等ハ同家ヲ立出デタルノ證據ヲ得ズ。

且ツ又同日午後李逸植ノ荷物ヲ取り寄センガ爲メ、同館ニ立越シタル鄭蘭教、朴平吉等ノ陳述ニヨレバ、權兩名ハ同時ニ同館ニ居リタルガ如キ模様ナリシトノ陳述ニ依レバ、或ハ外出セザリシハ事實ナリシナランカ。

以上豫審ノ模様ニ依レバ、二十八日午前李逸植ガ權兩名ニ對シ愈ヨ本日ヲ以テ事ヲ舉グ可キノヨリ、同心協力自己ニ續イテ來リ發砲スベキコトヲ命ジタル際、權等兩名ハ一時面色ヲ失シタリト云ヒ、又他ノ證人ノ證言ニモ同日權兩名ハ深く畏怖ノ模様ニテ戰慄シ居リタリ等ノ陳述ニヨリ、彼此對照シテ事實ヲ察スレバ、李ガ熱心激勵セル言語ニ刺戟セラレ、一時ハ之レニ同意ヲ表シ、續イテ立出ヅルノ考ヘヲ以テ短銃、短劍等ヲ携帯シタルモ、又再者スレバ恐怖ニ堪ヘズ、遂ニ其約ニ違ヒタルモノナルヤモ計リ難シ。

然レドモ李逸植ガ同日午前意ヲ決シテ親隣義塾ニ赴キタルハ實ニ一再ノ計策總テ齟齬シ、朴泳孝等雲來館ニ來ルノ模様ナク、遂ニ最後ノ手段トシテ此策ニ依リ朴等ヲ斬戮スルノ決意ヲ以テ、其豫謀ノ手段ニ着手シタルモ、共謀者ノ違約ニ因テ其目的ヲ達スル能ハザリシモノナルコトハ別紙事實ノ前後ニ徴スルモ明瞭ナルヲ以テ、理論上ノ斷定トシテハ之ヲ謀殺ノ未遂ナリト

論斷セラレザルニハアラズ、故ニ檢事トシテハ寧ロ有罪ノ意見ヲ付スル方可ナルベキ歟。
併シナガラ事實共犯者ニ於テ現場マデ至ラズトスレバ、如何ニモ事實ノ上ニ於テ之ヲ着手ナ
リト認ムルハ酷ニ過グルガ如ク、多少牽強ノ嫌ヒナキニアラズ、寧ロ此點ニ對シテハ斷然之レ
ヲ見捨テ免訴ノ決定ヲナスヲ以テ穩當ナル可シト思考ス。

第四 本件事實ニ對スル法律適用ニ關スル意見

李逸植ハ洪鍾宇ヲ教唆シ金玉均ヲ殺害セシメタル點ヲ以テ、刑法第二百九十二條、同第五百
條ニヨリ重罪公判ニ移附ス。

(參照) 刑法第二百九十二條豫メ謀テ人ヲ殺シタルモノハ謀殺ノ罪トナシ死刑ニ處ス。
川久保常吉ハ刑法第二百九十二條及ビ第九條ヲ適用シ重罪公判ニ付ス。

(參照) 刑法第九條重罪輕罪ヲ犯スコトヲ知ツテ器具ヲ給與シ誘導指示シ、其他豫備ノ
所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタルモノハ從犯ト爲シ正犯ノ刑ニ一
等ヲ減ズ。

朴泳孝、李圭完、鄭蘭教、朴平吉等ハ刑法三百二十三條ヲ適用シ輕罪公判ニ付ス。

(參照) 刑法第三百二十三條擅ニ人ヲ監禁制縛シテ毆打拷責シ云々、其他苛酷ノ所爲ヲ施
シタルモノハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加

ス。

柳承萬ハ前夜不在、單ニ監禁ノ張番ヲナシタルニ止マレバ依テ刑法第二百二十二條ヲ適用シ
輕罪公判ニ付ス。

(參照) 刑法第二百二十二條擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ私家ニ監禁シタルモノハ十一日以上二月
以下ノ重禁錮ニ處シ二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス。

法律適用ニ付テモ必ラズヤ多少ノ議論ヲ惹起スベキナランカ、此ノ點ニ付テハ窃カニ允當不
可ナシト思考スル所アリ、其詳細ノ理由ニ至テハ更ニ論ズル所ナルベシ。

勅書ハ全然偽造

朝鮮人李逸植ガ携帶シ居リタル朝鮮國王陛下ノ勅書ニ付陸奧外務大臣ヨリ在京城大鳥公使ニ
宛調査方ヲ命ジ置キタルニ、四月四日陸奧外務大臣ノ接收セル電報ニ依レバ、督辦交渉通商事
務ヨリ公文ヲ以テ大鳥公使ニ回答アリ、朝鮮國王ヨリ授與シタリト稱スル二個ノ委任狀ハ全然

偽造ナル由報告アリタリ。

調製セル印章調査

李逸植ノ彫刻師ニ命ジテ調製シタル印影ニ付四月六日付ヲ以テ大阪府警部長ヨリ警保局長小野田元熙ノ報告左ノ如シ。

一、注文ノ年月日

本年一月十四日李自ラ彫刻師宅ニ來リ注文ス。

一、刻成ノ年月日

同年同月十八日而シテ李ニ手渡セシハ同月二十日正午、李自身ニ彫刻師宅ニ來リテ受取リシナリ。

一、彫刻師

大阪市北區常安町百十六番屋敷、石西清二郎

一、代價

方形ノ分壹圓七拾錢、圓形ノ分五拾錢、外ニ朱肉並ニ内容ニテ七拾錢合貳圓九拾錢。

一、注文人氏名

自筆ニテ（當地會根崎助成橋北詰三平社ノ向ヒ李進士）ト紙片ニ書シテ渡シタル由ナル

モ、彫刻師手元ニ於テ目下其紙片ヲ見當ラズ、唯ダ之ヲ記憶ニ存スルノミナリト云フ。

其他文字ノ原稿ハ李自ラ行書ニテ記シ、篆體ハ彫刻師ニ一任シタリ。

金玉均事件ニ付大阪府報告拔萃

一、金玉均ノ遺子

府下東成郡西高津村百七番邸永源寺住職舟丘惠博ハ明治七年臺灣征討ノ際不圖玉均ト相識トナリ、同十八年四月突然玉均來訪シテ政府ト意見合ハズ、國ヲ辭シテ來朝シタル旨ヲ語り、同僧ノ扶助ヲ請ヒシヲ以テ、同村字野中浪華寺ニ一時潜居セシメ、後間モナク同郡東平野町千四百六十五番邸山口新太郎ノ離座敷ヲ借り住居セシメタリ。其際新太郎母ナミト私通シ、懷胎ノ儘玉均ハ同年九月東上シ、翌年四月ニ至リナミハ男子ヲ分娩セリ。然ルニ種々親戚間ノ苦情アリ、遂ニ他ヘ養子トシテ遣シタリ。其戸籍面ノ異動左ノ如シ。

東成郡東平野町大字北平野千四百六十五番屋敷平民酒商

山口新太郎	明治三年十二月八日生
母ナミ	嘉永五年十月日生
弟徳次郎	明治八年二月二十日生

明治十九年六月九日南區谷町七丁目十三番屋敷

松本彌助養嗣子トシテ遣ス

私生弟 房 吉 明治十九年四月二十六日生

東成郡東高津村二百六十五番屋敷

松本彌助	安政元年一月日生
妻ノブ	安政六年八月日生
養子房吉	明治十九年四月二十六日生
三男彌三郎	明治二十二年一月日生
長女チエ	明治二十五年九月日生

松本彌助ハ以前染物業ヲ營ミ相應ニ生計ヲ立居タルニ、近來非常ニ貧困ニ陥リ、他ノ町村ニ於テ戸籍ヲ受クルモノサヘ之レナキマデニ立居リ、目下無戸在籍ノ姿トナレリ。而シテ實際ハ同村番外四十二番屋敷山本清兵衛ガ牛乳搾取小屋内ニ乞丐同様ノ住居ヲ

金玉均事件ニ付大阪府報告拔萃

ナシ、房吉ハ同家ニ於テ寸燐軸木揃ヘノ賤職ニ從ヒ居レリ。

李逸植滯阪中ノ舉動

滯在中宿料雜費三百圓弱モ積リ、旅宿ニ於テモ不安ノ念ヲ懷キ居タルニ、同年七八月頃國元ヨリ第一國立銀行ヘ宛テタル爲換券ニテ五百圓ヲ振り出シ來リシヲ以テ、此金ニテ支拂ヲ了シタリ。其後百圓二百圓等一二回ノ爲換來リシコトアリ、合算スレバ七八百圓ハ來リシモノ、如シ。

二十五年十月頃閱泳翊ヨリ長文（一見白紙ニシテ火ニ暖ムレバ文字顯出スルモノ）到來シタルコトアリ。漢文體ニテ迎モ尋常本邦人ニハ讀ミ得ベカラザルモ頗ル長キモノナリシト。

權 在 壽

二月二十四日内本町六十番屋敷刀劍商今井晴吉ヲ招キ、東京公使館ニテ貰ヒ受ケタル由ニテ日本刀一口長一尺六七寸「極メテ鈍刀ニシテ代價十錢以内ノモノ」、鎗刃一本長さ五寸「是亦鈍、代價同上」ヲ示シ、刀ハ總白鯨造リトナスベク、鎗ハ仕込杖トナス

ベキヲ命ジ、代價合計四圓五十錢（刀三圓、仕込杖一圓五十錢）ナル旨答ヘタルニ、五圓ヲ出スベケレバ充分上等ニ仕上ゲト命ジタリ。翌月即チ三月二日在壽該刀劍商ニ來リタルニ仕込杖ハ出來居リタルモ刀劍ハ未ダ出來上ラズ、故ニ店主ハ出來次第旅館ヘ持參スベシト答ヘタリ。而ルニ在壽ハ否、前日ノ宿所ヲ易ヘタレバ來ルモ無益ナリ、余ハ更ニ來ラントテ毫モ宿所ヲ語ラズ、杖ノミヲ携ヘ歸リ、其後五六日ヲ經テ更ニ刀劍ヲ受取り去レリト云フ。又三月中一度香山親彦ヲ訪ヒタルコトアリ、此時モ亦住所ヲ告ゲザリシトノコト、要スルニ彼等ハ二月二十四日紫雲樓出立後ハ神戸ニ潜伏シ、時々府下ニモ來リシモノ、如シ。

拜啓者仄聞

聲華曾未承

海殊涉悵恨辰維

旅體萬護凌祝々昨有辨理大臣

金 欽奉

上諭轉電木公館前來奉此事係緊急茲樣

金玉均事件ニ付大阪府報告拔萃

貴寓番地抄錄原電送

覽速卽理裝還國并希

示夏以便電夏于辦理大臣轉

奏爲妥專此不備禮、

癸巳十二月廿八日 署理欽差辦理大臣俞箕煥六

李進士 玆 旅座下

抄付金辨理大臣電報

駐日本公使館權東壽兄弟李玆

並卽曉諭出送事奉

教由堂

俄枉末邀悚々此須事係是秘密幸包從容措處如何生在此必兼後意奉

公各有所掌奉包務畫妥兼嗣後不必相互往來以絕殊常之嫌如何

不備此上

俞生箕煥 拜上

李進士 兩位
洪碩士

拜讀

大函藏所洪友言則殊甚悚恧昨與川久保爲言係是情曲中出者決非有他端何故是野俗耶一言蔽之詳

告于洪友許念奉乞恕諒焉伏祝

旅安 初十日

生俞 箕煥

敬夏者頃奉

郇函讀悉欣感且荷

速教敢不翼如但今夜已與他人訂約未克如

戒悚切々此夏順頌

旅安 初八日

金玉均事件ニ付大阪府報告拔萃

生命 箕煥 並爾
金恩 純

事

君行公之陵極盡其所當爲之職分而已耳
於我

大君主陛下命令至於日本國內而不得行號施令者則關其

日本獨立自主之國權故也亦因萬國公法之定例故也討滅逆賊等事李逸植之所當爲之職分也對

日本外務卿而照會等事公使之所當爲之職分也

警視廳查實一款既是畢勘則奉須因其公法之次第而以使李逸植護送于朝鮮公署之公例連續照會
於

日本外務卿爲特此上朝鮮公署

代理公使

俞 大 人 官印 箕煥 閣下

出城討逆御史

李 逸 植 通

被告等取調ノ情況

李逸植ガ謀殺教唆ノ點ハ被告李逸植ニ於テ始終ノ事實ヲ陳述スルモ、其陳述中往々他ノ關係人ト符合セザル點アルヲ以テ、其符合セザル廉々ハ果シテ何レガ眞實ナルカノ狀況ヲ得ルマデ之レヲ審究セザルベカラズ。

殊ニ其實行者タル可キ洪鍾宇ニ對スル取調ノ照會、

證據書類ヲ指示シ之レガ辯解ヲ爲サシムルコト。

以上ノ調査ヲ遂グルニ於テハ略ボ之レヲ完結スル見込。

李逸植及ビ權東壽、權在壽、川久保常吉等ノ謀殺未遂ノ點ハ、被告李逸植ニ於テハ權東壽、權在壽等ニ方策ヲ示シ、裝藥シタル短銃及ビ刀劍ヲ交付シ方法ヲ指定シ、一步後レテ親隣義塾マデ來ル可キ旨ヲ告ゲ立出デタルモ、彼等兩名ハ何人カノ報知ヲ聞キ途中ヨリ公使館ニ遁去シタル事實ヲ明言スルモ、權兩名ハ總テ事實ヲ陳述セズ、然ルニ往々被告相互ノ間ニ於テ現ニ同一事實ニ對シ其陳述ノ齟齬スル等、要スルニ未ダ事實ノ眞象ヲ明言セズ。

殊ニ川久保常吉ノ如キ、現ニ證據書類ニ於テ其共謀ノ端緒明白ナルニ拘ラズ、毫モ事實ヲ吐露セザルヲ以テ、常吉ニ對シテハ證據書類ヲ指示シ、而シテ之レヲ詰問シ、依ツテ權等兩名ノ關係ヲモ明白ナラシメザルベカラズ。故ニ權兩名常吉等ニ對シテハ今二三回ノ取調ヲ爲シ、其模様ニ依レバ或ハ密室ニ監禁スルノ必要アルヤモ計ラレズ。且ツ其當時ノ事情ヲ知得スル柴四郎ヲ證人トシテ召喚ノ見込、然ルニ必要ナル證據書類ハ總テ朝鮮ノ俗語ヲ以テ記載シタルモノナルヲ以テ現今專ラ之レガ翻譯ニ着手セリ。是レ亦大略今明兩日ヲ以テ一應ノ翻譯ヲ終了スル見込。

朴泳孝等ノ制縛拷訊ノ點ハ事實モ已ニ明了ナルヲ以テ、此上ハ差押ヘニ掛ル縛繩及ビ毆打シタル火箸等ヲ指示シ、且ツ當初之レヲ發見シタル主任警部田邊政之助ヲ證人トシテ召喚、巨細ノ事實ヲ調査シ監禁ニ依ル時間ヲ確定セシムルヲ以テ終了ノ見込。

全忠兩道民亂ニ付杉村濬意見書

明治二十七年五月廿二日機密第六十三號本四三報告(廿七年五月廿七日接受)

全忠兩道ノ民亂ニ付鄙見ノ上申

全羅忠清兩道内ニ亂民蜂起シ、官吏ヲ逐ヒ城邑ヲ屠リ、其勢猖獗ヲ極ムル事ハ追々ノ報告書ニ據テ知悉セラルル所ト信ズ。今日マデノ報告ニ據レバ、亂民ノ占據若クハ横行シタル市邑ハ全羅道ニ在リテハ古阜、泰仁、扶安、金井邑、高故、茂長、羅州、咸平、務安、靈光等ノ各邑。忠清道ニ在リテハ懷德、鎮岑、青山、報恩、沃川、文義等ノ各邑ナリ。サレバ全忠兩道ノ凡三分一ニ跨ルヲ以テ、朝鮮國ニ取リテハ實ニ容易ナラザル變亂ナルナリ。加之、近來其他ノ各道トモ所在地方官ノ虐政ニ苦ミ、政府ヲ怨ミ、動モスレバ民擾ヲ發セントスル折柄ナレバ、全忠兩道亂黨ノ勢力如何ニ因テハ、彼等モ起テ之ニ應ズルモ難計、然ル時ハ京城ハ全ク孤立ノ姿ニ

陥ルノ外ナカルベシ。抑モ京城ニハ新式（洋式）常備兵五千ト稱スレドモ、其實數ハ是ヨリ減少スベク、而シテ此等ノ兵卒ハ平生歩趨運動ノ訓練ニ止マリ、護國ノ精神ニ至テハ尋常市民ニ異ナラズ、加之、之ヲ指揮スル大小ノ隊長ハ大抵門地アル人々ナレバ、唯ダ其員ニ備ハルノミニテ、平生ノ訓練ト雖モ總テ下士ニ任ジ、彼等自身ニ兵隊ヲ指揮スル例ニハ非ザル由ナリ。斯カル有様ナレバ、嚮キニ派遣セラレタル壯衛營ノ兵丁ハ各營中精練ト稱セラル、ニモ拘ラズ、彼地ニ至ルヤ逃亡者日々不絶、之レガ爲ニ士氣沮喪シ、進ンデ亂民ノ銳鋒ニ當ルコト能ハズ。終ニ再ビ新兵ヲ派遣スル詮議ニ至リタルモノト推測セラル。故ニ官民勝敗ノ境ハ新送兵到着ノ後ニ定マル事ナレバ、今後三四週日内ニハ略ボ相決スベキカ、萬一不幸ニシテ官軍敗績シ、民軍勝ニ乗ジテ北上スル如キコトアラバ、朝鮮政府ニハ如何ニ處置スルカ、豫メ之ヲ今日ニ研究スルハ頗ル必要ト考ヘラル。鄙見ニ依レバ、

第一策 政府ハ民願ヲ容レ、民望ニ應ゼントノ目的ヲ以テ咄嗟ニ内政ノ改革ヲ行ヒ、國民

ガ最モ惡ム所ノ弊害ヲ除去シ、以テ亂黨ヲ懷柔シ徐ロニ鎮定ノ方法ヲ執ルコト。

第二策 兵ヲ支那ニ借り以テ亂黨ヲ勘定スルコト。

第一策ハ諸大臣中二三ノ人は是ノ議ヲ持スルモ、公言ヲ憚リ上奏中、陰ニ之レヲ言フモノ、如ク、第二策ハ閔泳駿主トシテ之レヲ唱フルモ異議多ク、未ダ行レザルヤニ漏聞ス。要スルニ第

一策ハ目下權勢共ニ盛ナル閔氏ニ不利益ナレバ、國王ノ英斷ト雖モ容易ニ行ハルベシト思ハレズ、之ヲ行ハントスルニハ、閔氏ヲ振離シテ之ヲ政府外ニ逐ヒ出サザル限リハ其目的ヲ達シ難カルベク、而シテ斯カル大事業ハ韓廷諸臣ノ微力ニテ成功シ能フベシトモ思ハレザレバ、今後亂民ノ勢力益々募リタル曉ニハ、是非ナク第二策ノ姑息手段ヲ執ルニ立至ル外ナキカト推察セラル。

儲テ支那兵ガ萬一入韓（公然通知ノ手續ヲ踐ミ）スルニ至ラバ、朝鮮將來ノ形勢ニ向テ或ハ變化ヲ來スモ計リ難ケレバ、我ニ於テモ差當リ我ガ官民保護ノ爲メ、又日清兩國ノ權衡ヲ保ツ爲メ民亂鎮定、清兵引揚マデ、公使館護衛ノ名義ニ依リ舊約ニ照シ出兵セラルルカ、又ハ清兵入韓スルトモ、我政府ハ別ニ派兵ノ詮議ニ及バレザルヤ、右ハ大早計ニ似タリト雖モ、豫メ決定シ置クハ緊要ナルベシ。

明治二十七年五月二十二日

東學黨彙報

釜山 室田 義文

四月初四日（我五月八日）東學黨徒通文ヲ法聖邑ノ吏卿ニ爲

聖明在上、生民塗炭、何者民弊之本、由於吏捕々々之根田貪於官々々之所紀由於執權之貪婪、噫亂極則治晦變則明理之常也、今吾儕、爲民爲國之地、豈有吏民之別乎、究其本則吏亦民也各公文簿之吏、逋民瘼條件、沒數報來也、當有區別之方、矣勿慮持來、無違時刻、惕念知悉事、（押圖書如守令印信）

又

吾儕今日之舉上保宗社、下安黎民、指死爲誓、勿爲恐動、第觀來頭之厘正也、轉運營之爲弊於吏民也、均由官之去弊生弊也、各市井之分錢收稅也、各浦口之船主勒索也、他國潛商之竣價買來也、鹽分之市稅也、各項物件都賣取利也、白地徵稅、松田起陳也、臥還

之拔本、條々弊瘼、不能盡記、而凡吾士農工賈、四業之民、同心協力、上輔國家、下安濱死民生、豈非幸也哉、

濟衆義所

四月十五日（我五月十九日）招討使電報

方出陣、軍糧不可不預儕、以益山鄭元成、運糧官差下、伏計、彼徒入靈光、云靈光倅（郡守）、知彼徒入邑之機、避浮海、二隊兵送陣絕後、待沁兵（江華營）前後相應伏計。

同日本未刻招討使電報

彼徒、半留靈光、半向咸平、務安等地、云昨則派二隊兵、今曉又送二隊兵、次々連進後援、伏計

四月十七日 忠清監司ノ電報（我五月二十一日）

忠清ノ東 黨ハ去ツ
テ全羅ノ 東黨ニ合
フ
即接鎮岑所報、則彼徒已散、兵丁留連甚悶、云又接出住軍官及探校（探偵軍官）回告、則青沃等地、青山 沃川姑無動靜、或有歸化、云此輩踪跡閃忽、情形區測、有難全信、然且今形便言之、多數軍兵、許久出住、殊涉可悶、故營門軍兵及商丁方飭還、而現連見完伯（全羅監司）電來、則南擾去益猖獗、云本道戒嚴、不可疎忽、清營兵丁二百名、前者分送恩

清川兵營

三三三

東學黨彙報

沃^{恩津}川兩邑要害處、使之移防將具啓聞下諒伏望、更於頰給之節、果是難繼甚悶

四月十八日招討使電報（我五月二十二日）

今日進軍于東徒、聚會靈光地、

同日全羅監司電報

見靈光公兄（郡吏）文狀、該倅（郡守）以稅米事、初九日往運所、彼類乘其空官、十二日欄入城中、本倅則尚未得還官、

同日又

靈光事、匪類尙屯城中、該倅不得還官、無他措處之、入聞下諒、

四月二十日左議政趙秉世ニ宛テタル招討使洪ノ電報（我五月廿四日）

十九日午、抵井邑縣、見靈光郡所報、則彼徒、聞京軍絡繹分進、十六日辰時、萬餘名退向咸平地去、故明將留陣興德、以截後路、指揮羅牧、（羅州牧使）嚴防要隘、待沁兵下陸、首尾攻擊、伏計、招討使洪

同日全羅監司電報

今見咸平所報、十六日申時、東徒六七千名、自靈光直入本縣、建旗放砲各執銃鎗騎馬者、數百餘名、或有被甲着戰笠、或裹色巾、刀舞衝突邑底、直向東軒、吏校奴令、守城軍百

餘名捍禦、即破碎官門之際、三班（吏奴令）被傷者過半、餘皆散、仍留陣於各廳、糧米分排於饒富人、公兄以不爲迎接供饋、決棍、連吏姓名、各文簿收來、云々

以上昨二十四日招討使並監司ヨリ達シタル電報ニ依レバ征討京軍靈光郡ニ向ツテ進軍シタルヲ以テ東學黨ハ退テ咸平縣ヲ保タント欲シテ之ヲ陷タルモノノ如シ。

頃日來探聞セル雜報左ノ如シ。

各大臣ノ合啓ニ據リ國王陛下ノ下教（去二十二日入手）

- 一、傳曰、古阜郡守趙秉用、俱格拿來南間囚
- 一、不可無綸音、三縣鈴持揮使之諭曉可也、（三縣鈴ハ國家大事ニ當リ至急ニ傳令セシムル爲ニ用フ）
- 一、外地方伯守令貪虐者、一々論罪以定民心可也
- 一、大臣以下至於末官、當此板蕩之時、何可垂手傍觀乎、特進安民輔國之策可也、
- 一、全羅監司特施越捧之典可也、（越捧ハ罰俸ノ謂也）
- 一、逃走之守令、論輕重處治可也、

全羅道出征軍へ慰勞ノ爲メ内帑錢 下賜ノ件

(我五月二十三日朝報)

傳曰湖南出駐兵丁、多月控露、能既疾憊、赤無難食之歎乎、拳々手中發遣宣傳官勞問、特下内帑錢一萬兩、其令招討使量宣頒給、

政府ハ亂民ヲ慰撫鎮定ノ爲メ左ノ如キ訓令ヲ發セリ。

東徒合勢於靈光、故招討使始領京軍、日前向靈光將欲大戰、而綸音忽下、交鋒前布示綸音、罷黜完伯、拿來具格(械ヲ入レルコト)前古阜倅趙秉用、以示慰撫之意、而若不飯化、則將以京軍討滅、云々。

轉運司ニ對シ攻撃ノ理由

沃溝之群山、靈光之法聖、東徒屯聚轉運船一并攻逐、轉運將絕矣、此擾根因、非但起於民人、諸邑吏胥疲於轉運、抵死罷轉運、而與民符同、外内相應也、

招討使ノ營中ヨリ官軍死亡者ノ數ヲ通信セルモノニ據レバ

探視壯衛營隊中來書、則前後士兵死者三百餘名、京軍死者十二名云、

招討使ニ關スル批評

聞近日電報裏面所傳、其大略則、初無京軍接戰、招討使按兵不動、只以士兵爲前驅分禦、故士兵與京軍互相不平怨招討使、恐有蕭牆之變也、或有人說、朝鮮用地闊人望、而洪啓薰本無地闊、且無人望、今日卒雖以將令聽之、內懷輕易之心而不服此大失計也云、

最初全羅道古阜ニ於テ民亂ノ起ルヤ政府ハ李容泰ヲ按覈使トシテ派遣セルニ同使病ト稱シテ發セズ遂ニ竄配ノ典ニ處セラル。

議政府草記、承命按覈、何等嚴急而始因稱病不即登程、竟乃值間、未免輕還、覈事玩揭、誰執其咎、揆以事體、不可無警、古阜郡按覈使李容泰、施以譴罷之典事、傳曰允陰。

四月十五日(我五月十九日)朝報

續報ニ據レバ、

古阜郡按覈使李容泰、因政府草記、罷黜後施以竄配之典、

靈光擾亂ノ景況

靈光郡守載法聖、倉穀與軍器於船、浮在海上、東徒燒破政堂與公廡而據之、倉穀軍器見

全羅道出征軍へ慰勞ノ爲メ内帑錢下賜ノ件

奪之說訛傳耳。

新官不得赴任、向全卅留完營（全羅監司署）云、

去ル十六日（我二十日）ノ朝報ニ據レバ前靈光郡司閔泳壽ハ同副承旨ニ轉任セリ、然ルニ前來ノ報告ニ據レバ各地逃亡ノ地方官ハ嚴罰スベキノ命アリシニモ拘ラズ同郡司逃亡ノ一人ニアリナガラ却テ近親ノ官職ヲ與ヘラレタルハ恠ムベシ。蓋シ夫レ閔ヲ以テ姓ト爲ス者ニシテ始メテ此恩澤ニ浴スルモノナル乎

東學黨ノ情形。

青山（忠清道）之徒移文於茂長曰、今見黃平回書、五晦（五月晦日歟）接應云、而飛書於東南諸部矣、惱德第三隊頭領朴所使伏路軍、被提於青營捕校、所持文憑沒數見奪、憤歎奈何、自今以後、益加申飭於各部、更勿疎漏、而且期日前、雖有難處之事、忍憤息怒、切勿忘動、來指揮恐好云々。

東徒假裝行客、來於仁川濟物浦、而誘引轉運司委員一人、遂載船遠颺而去、蓋東徒曾有宿嫌於轉運司故也、然至於遠來仁川行凶計、是慮無不到也。

東徒分三股、一駐靈光、一駐務安、一駐咸平、互相犄角聲援、忠清道東徒、亦成群而多有下去、合勢于湖南（全羅道）

東學黨ニ關スル彙報

陰四月二十一日（我五月廿五日）全羅道監司電報

即見靈光十七日所報、即東徒數千名不知何處來向、直入郡中、冲火於軍器庫、戶藉亦爲燒火、破碎官門、而當日還去、不知何處、又接務安所報、則本縣三内面東徒七八千名、半騎半步、身被甲冑、各執長槍大刀、十八日留駐一夜後、往向羅州云。

同二十二日（我二十六日）午時招討使電報（是ハ全州發電ノ日附ニシテ興德發ノ日附ニアラズ）留陣於興德、以待賊兵推擊、而銃丸流矢、鉛丸即々優送事。

同日戌時招討使電報

行到咸平逢徒數千、將欲交戰、則彼登山大呼曰、此兵我主上奉命下來者、異於貪官之兵、決不抗敵、而若爭戰、我等未免逆徒之罪云々、京兵向東彼則西走、京兵向西彼則東走、勢難接戰、伏悶々々、

同日全羅道監司電報

東徒投書於南門外、開見則京兵不抗、鄉兵必破、貪官逐送、姦吏剿滅、此乃生等輔國安民之本意也。

雖至百年決不退散云。

數日前當京城開業醫ノ元へ出征京兵ノ負傷者一名施術ヲ請ハントテ來リタルモノアリ、負傷者ハ太腿ヲ打抜カレタルモノニシテ、最早一週日計リ經過セル爲メ殆ンド腐爛シ居レリト云、右負傷者ヲ連レ來ルニ二十名計ノ兵之ニ附來リ居レリトノ説ヲ傳聞セリ。

東學黨擾亂ニ關シ王勅

(我五月二十三日)

傳曰、天之生民、欲其生而已、雨露霜雪、皆所以欲生也、王政之有刑辟、其亦不得已焉、去其凶害、而黎庶乃得以安矣、假使一夫悖戾、一里爲之患、則尙可以懲而戢之、其或不忍乎一、則亦爲忍乎十百矣、此以有今番招討使之差遣也、邇來民生之嗷々然、不得安堵者、豈由近民之吏、不克體予如傷若保之至意、殘虐之政、無所不至、令民不得聊生、是所以有作鬧之弊、而犯分子紀者、種々有之、其習雖極可駭、其情亦所當念、示以法網、矯其痼瘼斥黜其貪汚、而董勵自有朝家之處置、惟彼亂類中、敢以詭詐不經之說、嗾騙雖々無知、嘯聚黨與、跳踉猖獗、藉托呼訴、棠懷反側、憑恃衆多、專事攘奪、至於勒劫官長、殘害鄉里、形跡之驚傲、不可止以閭民而論、矣夫好生而惡死、人之常情也、其雖捨其安樂之業、就其死亡之地、甘觸囚赦之科、而其困於割剝不能寧處、逼於誘脅、隨以胥動者、予豈不知之、此予霄旰憂勤、靡遑暇逸、只是爲民

一事、而治不諉志、澤未下究、使爾元々未免棲遑此離、乃至於此、予棠歎嘆、而民庶之眩惑壽幼、自欲投身於教化之外者、豈其常性也哉、要不出乎愚蠢沒黨而然矣、赤子之入井不汲々急援而救之哉、其令道臣守宰、詳洞曉諭以恩義之不可偏廢、使各悔懊、丞歸士着復安其業、非直曰以脅從闕治也、所以測恒推仁先之心教也、蕩析無依者、撫諷慰恤、使復奠居、無復迄論於已改之轍、務從安頓、咸與維新、如是布告之後、其即解去者、祛其舊染、復其本心者也、其爲蠹爲害及可以利益於民者、聽之民論、參以邑報、隨即商確、便宜矯揉後、據實登聞、而若其猶復抗拒群聚不退者、此豈可以恒民待之、亦有常法不可容貸矣、一委招討使、以法從事、大抵民之休戚、其不在於在民之官乎、苟能悉心盡職、無擾於民使自安其食樂其生則、雖家說戶諭、勸之使闢豈肯爲之哉、列邑之治否、按廉之黜陟、藩臬之責而、初不能彈壓、馴而致此、又不能拊循而調劑、亦未即覈實馳啓、尋常度日、安在其委寄方面之義哉、全羅監司金文鉉、姑先施以刊削之典、南民起鬧、始由於古阜、轉至於此寧不痛嘆、宜有一番鉤覈前郡守趙秉甲、令平府發遣都事、具格拿來、按覈法意、何等緊急、而迄無查啓、反滋致騷、事體既隳、債誤亦多、古阜按覈使李容泰、施以竄配之典、仍令道臣起鬧邑倅這々查覈論啓、朝家亦當按其輕重、承施當律、用慰民心、此意亦令宣示民人等事、令庶堂措辭開飭、

全羅道古阜民擾日記

東學黨騷擾ハ元來古阜郡ノ民亂ヨリ引續キ起リタルモノニシテ、今日ヨリ見ルトキハ恰モ古阜ノ民亂ハ東學黨ヨリ引受ケタル姿トナリ居レリ。此日記ハ正月十日ノ府廳襲擊ヨリ始マリ、爾來黃土山ノ激戰マデ四ヶ月間ノ出來事ヲ、其騷擾ノ中心點古阜郡ヲ去ル二里計ノ地ニアリテ見聞セシマ、ヲ記セシモノナリ。民軍ノ首領全明叔ハ眞乎東學黨鏘鐸ノ丈夫ニシテ、黃土山ノ戰略ハ多ク明叔ノ指圖ニ出ヅト云フ。目下京軍ノ逆賊トシテ嫉視スルモノハ唯ダ全明叔一人ニシテ、自餘ハ彼ガ煽動ニ據リテ烏合セルモノト思量セリ。宜シク古阜ノ民擾ヲシテ東學黨騷擾ト別物視スルナクンバ幸甚。

陰曆四月十二日於湖南榮湖

巴 溪 生

甲午正月初十日拂曉一群ノ亂民古阜區へ亂入シ、突進シテ郡守ガ寢處ヲ侵カス、郡守倉皇城ヲ踰ヘテ逃ガル、左右從フモノナシ、亂民隊ヲ分チ搜索スレドモ遂ニ得ズ、此際官私ノ別ナク一人ノ之ヲ支フルモノナク、吏部以下ノ官屬皆彼等ノ爲ニ捕拿セラレ。

古阜ハ沿海ノ地ニアラザルガ故ニ、仁川、釜山在留我が商業者ニハ關係薄キ土地ノ如クニシテ、其邑名サヘ知了セル人稀ナリト雖モ、其實金提及ビ萬頃等聯續セル大平野ニシテ、二十八村落ヨリ成リ、土地肥沃ニシテ農産ニ富ミ、菑浦、鹽所、東津、沙浦ノ四港ヨリ遠近各地ニ輸出スル高少ナカラズ（上納高一萬八千餘石、稅庫ハ扶安、菑浦ニアリ）貿易上樞要ナル個所ノ一ナリ。

郡守ハ彼ノ咸鏡道防穀令ニ因テ有名ナル趙氏ノ姪ニシテ、姓ハ趙、名ハ丙甲ナリ。此國內政紊亂ノ極、所謂憑公營私ノ事決シテ奇トナスニ足ラザルガ如シト雖モ、其苛斂弊政ノ在ル處實ニ我國人ノ想像ニ堪ユベキコトニアラズ。以下趙丙甲失敗ノ跡ニ就テ一二ノ所聞ヲ記セン。

昨秋此地方ハ豐作ナリシニ拘ラズ、丙甲ハ防穀令ヲ布キ、親近ノ人ヲシテ盛ンニ米穀ヲ買收セシメ、而シテ米價暴騰ノ際ニ於テ之ヲ放賣シ、忽チニシテ巨額ノ利ヲ得タリ。

又稅米取立ニ際シテモ非道ノ舉アリシヲ以テ、昨年十月頃少シク民心ノ穩ナラザリシコトアリシ。又同年九、十月ノ頃、僧侶ヲシテ張札ヲ配付セシメ、報酬ヲ已ニ收メタリトノ噂アリシ、

又或ハ一河ヲ堰キ止メ、名ヲ灌溉ニ假リ、每田多少ノ報酬ヲ強徵セシコトアリ。是レ民怨ヲ買ヒシ最重ノ原因ナルガ如シ。

十日、鷄鳴ヲ待テ東津江頭ニ勢揃ヒヲナシタル民軍ハ、何レモ白木綿ヲ以テ頭部ヲ纏ヒ、長さ五尺有餘ノ竹槍ヲ携ヘタリ。最初集マリタルモノハ凡ソ五百人計リナリシ、而シテ首領以下皆徒步セリ。城府ノ關門難ナク通過シ、朝堂ト稱スル郡守ノ事務ヲ執ル所ノ前面ニ出タリ。寢所ヲ冒シ進ンデ内部ノ諸衙ヲ突キ、搜索周密、而シテ夜來未ダ明ケズ、豎子已ニ逸シ追フニ方角ナシ。先ヅ京路ヲ追蹤ス。及バズ、午時反對ノ方角井邑ノ邊ニ遁レタルヲ知レリ。首領（七名中重ナルモノハ全某地ハ未ダ詳ナラズ）先ヅ朝堂ニ入り、使ヲ吏部其他重ナル惡政ノ助力者ヲ喚ブ、來ラザルモノハ捉捕ス。陣營整肅、號令明晰、他ノ席旗軍ニ似ズト云フ。先ヅ惡政ノ始末ヲ嚴重ニ取調ブル爲メ毎日拘留ノ面々ヲ鞫問ス。陣營ハ府ノ内外ニアリ、皆幔幕ヲ連ネ、夜ハ篝火ヲ焚キ、糧ハ敵ニ依ル。彼ノ堰堤報酬トシテ取溜メ居タル穀千四百有餘石ハ劈頭ニ彼等ノ用ニ供セラレタリ。

十一日、十二日、十三日、十四日、加盟スル村落十有五個、全軍一萬餘人、先ヅ壯丁ヲ拔キ老少ハ歸ヘシ、之ヲ統ブルモノ毎村五名、隣郡到處同情ヲ表シ、概シテ惡評ヲ加フルモノナシ。

然レドモ亦進ンデ之ニ合シ自己ガ頭上ノ惡政ヲ拂ハント欲スルモノナシ。

十五日趙丙甲全州監營ニ投ズ。是ヨリ先キ彼ハ單身逸走シ、郡下ノ名望者前府使鄭某ノ家ニ潜ミ哀ヲ乞ヒ、鄭ノ爲ニ變裝シ、井邑ノ方面ヘ逃レ、辛ウジテ監營ニ投ゼシナリ（古阜ヲ距ルコト我ガ十三里）之ニ因テ鄭ハ禍ヲ買ヒ、目下囹圄ニアリ。

丙甲監營ニ到リ先ヅ監司ニ謂フテ曰ク、奸徒席旗ヲ掲ゲ竹槍ヲ執リテ府門ヲ襲ヒ、部下ノ屬吏皆ナ其窘ム所トナリ、今ヤ禍ヒ予ガ身ニ及バントス。纔カニ免レテ爰ニ投ズ、願クハ兵一千ヲ借セ、直ニ馳セ下リテ之レヲ鎮メント、監司聞カズ、書ヲ臺閣ニ飛バシ以テ指揮ヲ待ツト、丙甲竄レテ營門ニ在リ、而シテ席旗軍此後如何。

十七日民軍馬首驛ニ集スル、首領以下大ニ議スル所アリ、軍機秘密得テ聞クベカラズ、此日更ニ十三ノ精銳ヲ抜ク。

二十日朝彼徒余ノ滞在スル苗浦ヲ過グルモノ三四十人、各竹槍ヲ携フ、聞ク彼等ハ隔江ノ地ニ在ル古阜農民ニシテ、之レヨリ本營ニ集マルモノナリト云フ。

此日完營（即チ全羅道監營）ヨリ判官閔某監司ノ命ヲ承ケテ下リ、茂長縣監亦同命ニ因テ來ルトノ風聞アリ、民軍ノ成敗ハ惟フニ此一兩日ノ運動如何ニ由ツテ決スベシ。若シ此際ニ於テ判官縣監等ノ處置意ニ滿タザルモノアルトキハ、益々彼等ヲシテ其氣焰ヲ熾ンナラシムルニ至ルベシ。

二十二日昨朝通過セシ民軍ノ一部歸去スルヲ見ル、此日民軍ニ不利益ナル風評起レリ。

嗟今少シク健全ナル首領アラバ最早進ンデ爲ス所アルベキニ、荏苒踟躕、民心漸ク弛懈スルニアラザルカ、然レドモ若シ一郡ノ總代トシテ京ニ出ルカ、或ハ全營ニ出テ正面ヨリ爲ス所アラントスルトキハ、人命ヲ芥ノ如ク思視スル此國ノ習トシテ、其理非ノ如何ヲ察スルニ違アラズシテ刎首スルコト勿カルベキカ、之レ第一ノ恐レナリ。如カズ全軍ヲ帥ヒテ先ヅ監營ニ至リ、監司若シ爲ニ力ヲ費ヤサルトキハ、進ンデ東ニ出テ、須ラク大關ノ下ニ伏シ、大ニ稟議シ、兵力ヲ以テ我ニ加フルトキハ潔ク快戰シテ死スベキノミ。若シ此ニ至ルノ氣概ナクシテ事ヲ起スモ無益ナリ。

右等ノ事情ニ因リ彼徒ハ到底完全ニ目的ヲ達スルコト能ハザルヲ憂ヒ、是ヨリハ只ダ解散ノ運ニ接スルナランヲ期シ、其後ハ此事實ニ記スルヲ懶トシ、別ニ着目スルコトモナカリシガ、

筆ヲ擱クコト既ニ三十餘日、冷灰復タ將サニ燃ントスルモノアルヲ見ルニ至レリ。

爾後ノ狀況ニヨレバ、民軍ハ互ニ交代シテ人員ニ減少ヲ見ザルノミナラズ、竹槍ヲ執テ三々五々相往來スルモノ絶ユルコトナシ。此等ノモノニ就テ聞クニ、一度ビ陣營ニ入レバ殆ンド人生別境ノ如ク、家ニ歸リテ耒鋤ヲ手ニスルヲ物憂ク思ハレテ省家ノ念殆ンド絶ユルモノアリト云ヘリ。又事ノ起リシヨリ已ニ二ヶ月、人員モ亦タ多數ノコトナレバ、彼レ設營ノ近傍ハ自然物賣リ商估ノ集合スル處トナリ、飲食店ヨリ雜貨店ノ類俄カニ市ヲ作シ、甚ダ盛ナル景況ナリト云フ。大凡ソノ如クナレバ日々牛馬ヲ侶トシ、隴畝ニ歲月ヲ送り、嘗テ樂事ニ慣レサル土民ノ常トシテ日月ヲ忘レテ野營ニ嬉遊スルモ亦怪シムニ足ラザルナリ。

就中未ダ久シカラズシテ瓦解ノ運ニ至ラント思ヒシ局外者ヲシテ案外ナラシメタルハ、首領ノ巧慧ナル手段ヲ運ラシタルニアリ。即チ首領トハ全明叔、鄭益瑞、金某ノ三人ナリ。明叔上位ニ居リ、二人之ヲ佐クルモノ、如シ。三人ガ平生ヲ聞クニ、屑々トシテ産ヲ治メズ、明叔ハ現ニ東學黨ノ一人ニシテ、同黨中ニテモ稍ヤ聲望アルモノナリ。又他ノ二人ハ土地ノ士分ニシテ、鄭ハ文事アリ、二人共ニ壯少ヨリノ親友ニシテ、事ヲ起スノ始メヨリ大小ノ事皆此三個ノ手中ニ屬ス。然レドモ彼等ハ責任ヲ自身ノミニ限ラシメズ、各村ノ洞長、執綱等ヲシテ悉ク同様ノ責任ヲ負ハシメタリ。故ニ一朝事破ルニ方テハ十八區面ノ洞長、執綱ハ即チ同様ノ責ヲ負

フヲ以テ、百姓等モ汗濶ニ退散シ或ハ嫌厭ヲ生ズル譯ニ至ラズシテ團結モ一層堅固ナル趣ナリ。

監營ヨリ兵丁五十人ヲ變裝シテ陣營ノ中ニ込ミ入ラシメ、陣ヲ窺フテ三人ヲ捉捕セントシタリシガ、却テ彼等ノ爲ニ看破セラレテ五十人共ニ擒ニセラレタリ。此ノ争ヒノ中一人ノ兵ハ即死、之ヲ率ユルモノ又殺戮セラレタリトノ噂アリ。此時ヨリ四方ノ出入ヲ嚴ニシ、東津江ノ渡シヲ止メ、郡内ノ要所ハ凡テ彼等ノ手ニ扼セラレ、旅人ト雖モ見當リ次第ニ陣營ニ引入レ兵丁ニ使役スト云フ。

監營ハ一度ノ失敗ニ因テ今度ハ兵三百ヲ井邑ニ埋伏シ、近在九郡ノ兵ヲ嘯集シ、今日午時迄ニ井邑ニ集合ストノ噂アリ。之ニ將タルハ三名ノ盜捕使ニシテ、郡兵ハ郡ノ營將引率スト云フ。昨日來苗浦ヘ向テ逃走シ來リタル者數人アリ。

民軍ノ首領ハ嚮者密ニ五十八州ノ東學黨ニ向テ檄ヲ飛シタリ、其目的ハ營ニ一郡ノ利害ニ就テノミナラズ、先ヅ轉運營ヲ破壊シ、進ンデ弊政ヲ釐革スルニアリト云フ。兵糧ハ先ヅ群倉ノ稅庫ヲ奪ヒ之レニ充ツトノ事ナリ。人心恟々米商等モ隨テ減少ス。予ハ過日使ヲ忠清道マデ發シタリシガ、已ニ歸期ヲ過シト雖モ歸リ來ラズ、若シヤ中途阻絶ニ因テ遷迫スルニアラザルカヲ慮レリ。

一月二十五日從來民軍ハ馬首驛ニ設營シタリシガ、攻守勢ニ利ナラザルモノアリ、白山ト稱スル處ニ移轉セリト云フ。白山ハ朝鮮秘訣ニ上リタル程ノ地ニテ、三方江流ヲ繞ラシ一面僅カニ人馬ヲ通ズ、近傍ハ有名ナル平野ニシテ、白山獨リ高シ、訣ニ曰ク古阜白山ハ可活萬民トナリ。民軍扶安府ヲ襲フトノ風聞アリ、警衛嚴重、縣令晝夜寢食ヲ安ゼズ。

今回ノ變亂ニ因リ不意ノ僥倖ヲ得タルハ扶安ノ里民ナリ、事ノ起リシヨリ以來偏ニ民心ヲ和セントテ諸稅納ノ催促ヲ止メ、訟廷ヲ止メ、唯ダ是レ民人ニ媚ビタルモノ、如シ。

前日來盜捕使下向、營將九都ノ兵ヲ率キテ民軍ヲ討ストノ說アリシハ全ク虛報ナリシ。其後未ダ幾クナラズ古阜新官下任シ、民軍ノ屯營ニ書ヲ遣シ、新ニ命ヲ受ケテ此地ニ莅ム、意ハ休養ニ專ラナリ。自今以後卿等一黨ト此土ノ施政ヲ議セントスト、因テ民軍ノ中ヨリ吏部以下ノ重ナルモノヲ選拔センコトヲ托セリト云フ。

元營監司ハ此際訟獄等ノ政事ヲ止メ、一軍ハ井邑ヨリ古阜ニ入り、一軍ハ沙浦ヲ過ギ、芝浦ニ來レリ。二十三日余ハ朝來三四ノ韓人ト東郊ニ散策シ、正午頃歸途ニ就キ、市外ノ一酒舖ノ前ニ來レル頃、數百ノ韓人集合セルヲ見ル。何ノ所以ヲ知ラズ、一人ニ向テ問ヘバ東學黨數萬將ニ此地ヲ過ギントシ、先導已ニ達セリト、申途予ノ客主ノ使喚予ガ早歸ヲ促ガシ來レリ、門外ニ至レバ老客主倉皇袖ヲ控ヘテ早ク何處ニカ避ケンコトヲ勸ム。然レドモ余ハ彼レガ愕ケル

程ニマデ余ノ身上ニ危難ノ來ラントハ思量セザルコトニアレバ、却テ老主ヲ慰サメ暫時舍廊ニ憩ヒ居タリシニ、間モナク砲聲ヲ聞ク、人々門外ニ出ヅ、余モ亦出テ佇望スルニ十四五町余ヲ距タル東郊ヲ通ズル大路ヨリ旌旗翻々威氣方リヲ拂フテ推寄セ來レリ。左右ノ人々頻リニ余ヲ危ム、余モ其意ニ從ヒ暫ク余ガ伴ヒ來レル一船ニ避ケ、蓬窓ヨリ之ヲ望メバ斥候旗アリ、青紅白黃ノ區別アリテ上下ニ振り左右ニ翳ザシ、或ハ急、或緩、一軍ノ進退復タ之ニ應ズ。彼等ガ携フル兵器ハ竹槍アリ、弓箭アリ、鎗アリ、而シテ銃ハ舊製ノ火繩筒アリ。

此際余ガ生命ノ余ガ所爲ニ由リテハ甚ダ危カリシコトアリ、何者ノ言ニ據リシカ、端シナク日本人精銃ノ劍アリ、又一個ノ六穴砲アリトノコト都將ノ聞ク處トナリ、日本人ヲ呼ビ來レトテ余ガ居處ニ數十名亂入シ、頻リニ余ヲ求ム。余幸ニ不在ナリシヲ以テ、客主及ビ余ガ友ノ一人辛亥溪等頻リニ其浮說ナルヲ辯解シ、斯ノ如キ使令三回ニ及ンデ止メタリト云フ。

先日松都ノ民亂一ノ我國人橫死ノ消息ヲ得テ、頃來孤客ノ較ヤ寒心シツ、アル底ニ一回ノ民亂ニ由リテ其目的ヲ達セズ、更ニ今回ノ舉アルヲ知り、且ツ彼等ノ風俗ニ於テ外侮心ノ熾ナルコト殆ンド我元治慶應間ノ浮浪ト均シキモノアルヲ知ルモノニ於テ、如何ゾ内心平カナルヲ得ン。況ンヤ余ガ從兄ノ甲申ノ京變ニ橫死シ、悲慘危惧ノ念猶ホ余ガ衷心ヲ去ラザルモノアルニ於テオヤ、彼等ハ晝餐ノ後整々古阜ニ向ヘリ、發スルニ臨ミ一ノ檄文様ノモノヲ四方ノ出

口ニ貼付セリ。曰ク弊政ノ釐革、要ハ我大祖革新ノ治ニ復セバ止ムト、文頗ル長シ、都將ハ未ダ丁年ニモ至ラザル一小丈夫ナリト云フ。

此日ヨリ風評次第ニ繁ク、或ハ曰ク後軍期日ナラズシテ至ルト、此時通過セシ人員三千餘人、二十五日東學黨軍古阜ノ軍庫ヲ掠略シ、過テ火藥ニ火發シ、數十ノ負傷者ト即死者ヲ出セリ。此日濟州ノ同黨沙浦ニ上陸ス。

民心恟々此際監督ヨリ募軍ノ令下リ、壯年者ノ之ニ應ズル者無數。

二十七日東學軍ノ後陣西上ストノ風評專ラナリ、予ハ兩三日前來着シタル松村ヲ伴ヒ、邊山ノ本營ヨリ退テ其廳ニ居ルト云フ。監使昨冬ノ上書ニ治下ノ諸官中古阜郡守ノ治蹟最モ見ルベキモノアリトテ大ニ趙丙甲ヲ稱賛セシ趣ナリシガ(之ニハ別ニ故アリ)、今度ノ失敗ニ由テ全ク政府ヲ欺キタル状態ナルニヨリ、可成内密ニ鎮壓セントノ意ヨリ、先頃ノ兵士モ政府ノ許可ヲ得ルニアラズシテ派遣シタル由ナルガ、却テ民軍ノ爲ニ擒ニセラレ、上ニ向テハ漫リニ威武ヲ瀆力シタル姿トナリ、大窘窮ノ様子ナリ。是ニ於テ民軍ハ苟クモ遷延丙甲ノ罪蹟ヲ理セズンバ直ニ京城ニ至リ、稟請スル處アラントテ監司ヲ脅迫ストノコトナリ。

三月初一日民軍數百萬浦ノ稅庫ヲ破壊ス。

彼等ガ如何ニシテ糧食ニ窮セルカラ聞クニ、全ク趙丙甲ノ所得米穀ヲ奪ヒ之ニ充テ居ルトノ

コトナリ。未ダ二ヶ月ハ充分ニ保ツベシト云フ。

燈火將ニ滅セントシテ光輝ノ一度ビ熾ンナルヲ見ル。彼等ガ形狀實ニ之レニ類スルニアラザルカトハ三月十一、二日頃余ガ所懷ナリシ、一熾一滅ノ風評裏ニ、彼等ハ同月十三日全ク解散セリ。都將妻子ヲ携ヘテ逃亡シ、餘類或ハ捕ヘラレ、卒伍ハ農ニ歸シ、何人モ戡定セシヲ祝セリ。然ルニ飛報天外ヨリ來レリ、時ハ同月二十日、此日德興里ノ市軍歸リ來リテ曰ク、東學軍數萬茂長ノ屆時ヲ踰ヘ興德ヲ過ギタリト、翌日ハ高敞ニ集マリ次第ニ西上シ景勝ヲ探ル、蓋シ意ハ彼ニ在リ。

四月二日 歸寓、果シテ二十九日ニハ同黨ノ過ギルアリテ非常ニ紛擾セリト云フ。

京軍長浦江口ノ郡倉ヨリ上陸シ、全營ト相通ゼリトノ說アリ、東學軍古阜ヨリ出發シ、全營ト相距ル里許ノ處ニ對陣セル由ノ說ヲ聞ク。

四月四日 一軍大ニ東津江ヲ渡リテ扶安ニ入レリ、同日京軍古阜ニ入レリ。

四月五日 昨夕不意ニ全營ヨリ派遣セル一軍此地ニ入ル、砲聲兩三發、蓋シ賊ノ有無ヲ偵察

スルナラン。土民ノ遁走スル狀筆紙ノ外ニアリ、予モ松村ヲ伴ヒ船ヘ赴ク、此夜船人ノ服裝ヲナシ上陸ス、市街間トシテ眞ニ軍營ノ裡ニアルノ思ヒヲナサシム。三々五々影暗キ處ニ語ルモノハ土人ノ軍狀ヲ問答スルニアラズンバ、人家ヲ携ヘテ避クベキノ地ヲ談ズルナラン。篝火ノ程遠カラザル山丘ヲ蹠リテ明滅スルハ哨兵ノ正ニ勇ヲ鼓シテ風聲鶴唳ト戰ヒツツアルノ處ナラン。弦月朧々トシテ草木將ニ眠ラントスルノ頃獨歩船ニ歸レバ松村猶未眠。

四月六日 東學軍ノ落武者數人捕ヘラル、此夜此地駐在ノ全軍其數三百餘北方ヘ向テ出發ス。

四月七日 朝潰走セル兵ノ頻リニ哀ヲ乞フテ舟ヲ求ムルアリ、繫泊ノ舟吾先キト碇ヲ抜イテ發港スルヲ見ル、間モナク予ガ乗ル處ノ舟ニモ來レリ、最初ハ何軍ナルヲ知ラズ、而シテ如何ニシテ此ノ如キカヲ知ラズ、或ハ郊丘ヲ逃走スルモノ、或ハ小徑ヨリ走セ來ルモノ、其數二百餘ニ上レリ。幾時ナラズシテ予ガ友ノ一人ハ予ヲ來訪シ、事ノ次第ヲ告ゲテ曰ク、昨夜此地ヲ距ル三里許ノ古阜黃土山ニ於テ激戰アリ、京軍大敗シ死傷者算ナク新來ノ亡卒僅カニ身ヲ以テ遁カル、モノナリト、其戰狀ヲ聞クニ、

四月四日 東津江ヲ涉リテ扶安城ヲ陷レ、據リテ以テ敵ヲ待チツ、アリシ東學軍ハ、扶安ノ

地形不利ナルヲ以テ、全軍ヲ古阜ニ移シ、羽翼ヲ張リ以テ此地菑浦ニ駐在スルノ京軍ト全營トノ通路ヲ切斷セリ。

五日 京軍ハ李光陽（監司ノ妻弟）李在奕、宋鳳岩等營兵二百五十人ヲ中堅トシテ雇兵無慮七八千人ヲ引率シ之ト相對陣シ、令ヲ傳ヘテ菑浦ノ京軍ト共ニ之ヲ合擊センコトヲ謀ル。

六日 夜菑浦ノ軍ハ戰線ニ到達セリ、一發ノ號砲ト共ニ戰端ハ開ケリ、夜將ニ深ク陰沈甚ダ辨ジ易カラズ、怪ムベキハ敵陣ノ應砲遲緩ニシテ十發中僅カニ一發ヲ應ズ、京軍突進一舉假城（此時東學軍藁ヲ以テ假城ヲ作ル）ニ入ルヤ、敵ハ既ニ前後ニアリ、彈丸雨ノ如ク李光陽以下ノ將士多クハ斃レ、死傷算ナク敗兵四散空シク黃土阜丘ニ鮮血ノ漂フヲ見ル。而シテ此地ニ遁レ來リタル敗兵等ハ其朝偶然ニモ稅積載ノ爲メ來着シタル朝鮮汽船ニ助ケラレ其日仁川ニ向ケ發セリ。

四月八日 東學軍興德ヲ過グ、府内ヨリ焚出サレタル人數一萬八千人ト號ス、高敞ヲ經テ羅州ニ入ル。

四月十日 京軍高敞ニ進軍セリトノ說アリ、民心恟々家ヲ携ヘテ流離スルモノ多シ。

四月十一日 防穀令出ヅ。
今後ノ景況ハ更ニ他日ニ譲ル。

清國出援ニ付韓廷不服黨運動並ニ 袁世凱密話

朝鮮政府ガ清兵借來ニ至リタル顛末ニ付其後探聞スル所ニ據レバ、諸大臣(閔氏ニアラザル)ヲ始メ政府部内ニハ不意ノ出來事ニ驚キ異議ヲ唱フルモノ有リ、就中若シ清兵入韓セバ日本必ラズ出兵スベク、然ルトキハ我兵モ亦入韓スベキニ付、將來朝鮮ハ各國ノ戰場ト爲ル可シトノ說ハ最モ勢力ヲ占メ、之レガ爲メ閔氏モ内ニ顧ミル所アリテ、清兵來韓シテモ姑ク其上陸ヲ差止ムベシトノ姑息案ヲ提議シタルモ、清國ハ素ヨリ之ヲ諾スベキ模様ナク、去ル六日七日ノ兩夜トモ王宮ニ於テ諸大臣ノ大會議ヲ開キタル由ナリ。又清兵出來ニ付テハ、外國人ニモ之ヲ非難スルモノ有リ、殊ニ我政府ノ舉動ハ袁世凱氏ノ豫期外ニ出デタル様子ニテ、同氏モ近頃内々心配ヲ懷キ居ルヤニ察セラル。國分書記生ガ朝鮮人ヲ歴訪シテ聞取リタル談話並ニ袁氏ガ鄭書記生ニ對シテ爲シタル密話ハ其内情ヲ窺フニ足ルベキモノアリト信ズ。

清國出援ニ付韓廷不服黨運動並ニ袁世凱密話

明治二十七年六月八日

在京城

杉村

濬

金嘉鎮、安駟壽其他ノ直話

六月六日午後三時ヨリ閔應植(江華留守兼海軍總制使)、閔泳達(判書)、沈胡薰(判書)三氏ヲ先ヅ訪問シタルニ、孰レモ王命アリ入闕シタル由ニ付、轉ジテ揚州牧使黃耆淵氏ヲ訪ヒ、何故今日閔沈等諸氏ハ入闕シタルヤト問ヒタルニ、同氏ハ今日清國ヨリ借兵其他全州地方民擾ノ事ニ關シテ會議アルトカニテ、閔氏始メ其他權門家ハ國王ノ召命ニ據リ入闕シタルモノナリト云ヘリ。次デ典圖局幫辦安駟壽氏ヲ訪ヒタルニ、折柄主事金鶴羽其他二三ノ人、額ヲ集メテ何カ切リニ相談中ノ模様ニ見受ケラレタリ金主事ハ先ヅ予ニ向ツテ語ヲ發シ「予等此頃借兵ノ舉アリト聞キ大不同意ニシテ、切リニ權門ニ向ツテ建議ヲナスト雖モ、毫モ採用セララルベキ途ナク、故ニ斯ク意氣相投ズル者相集リテ一條ノ不平談ヲ爲シツ、アルナリ。又聞ク處ニ據レバ出兵清師ハ李鴻章ヨリ嚴重ナル訓令ヲ發シ、若シ牙山到着ノ上形勢ヲ察シテ強テ兵士ノ上陸ヲ要セザルニ於テハ、可成示威ノ方針ヲ執リ、務メテ穩便ナル進退ヲ爲シ、敢テ輕舉アルベカラズト誠メ

タルヤニ云ヘドモ、其實支那兵ニ將タル士官等ハ只ダ自國ノ廣大ナルヲ以テ自ラ誇ルノ外、世上ノ形勢ニ通ゼザルニ因リ、今我國ニ兵ヲ上陸セシメ、後日如何ナル差支アルヤナド毫モ相辨ヘザレバ、彼等牙山到着ノ上ハ前後ヲ争フテ勝手次第ニ上陸シテ蹂躪ニ均シキ所爲ヲ爲スナラシ、實ニ氣毒ナルハ此ニ使役セララル我國人ト、並ニ附近ノ農夫ナリ。其上第一恐ルベキハ支那兵一旦上陸ノ端緒ヲ開クニ於テハ、魯國ハ之ヲ好機トシテ元山永興若クハ北境便宜ノ地ニ其兵ヲ上陸スルノ虞レナキカ、予ハ深ク我諸大臣等ノ意向此ニ及バザリシヲ歎ジテ止マザルナリ今聞ク借兵ノ一事ニ付不可ヲ唱フルモノ漸ク増加シタルニ依リ、閔氏ハ頗ル疾シキ處アルニ似テ、更ニ其借兵ノ說ヲ一變シ、清國ニ向ツテ清兵ノ上陸ヲ見合セラレタシト斷ルベシトノ提議ヲ試ミ、即今右ニ付會議中ノ由、聊カ予輩先見ノ偶然ナラザリシヲ諒リシナラン。然レドモ事已ニ去レリ、今更徒ラニ上陸中ノ事ヲ以テ清國政府ニ請フモ恐ラク無効ナラン。又袁氏ノ如キ、其初メ自身スラ兵ヲ帥ヒテ出剿スベシト高言シタル程ナレバ、今閔氏ガ云フ如キ朝令暮改兒戲ニ類スル所爲ニ同意スベキ筈ナシ(自身統率ノ事ハ李中堂ノ命ニ據リ中止セラル云々)、去レバ借兵上陸ノ一事ハ終ニ決行セラレ、前途幾多ノ弊害ハ是レヨリ萌芽スルナラン云々。又天安氏ハ予ガ退出セントスルニ際ツテ「予ハ此度彈藥買入ノ爲メ貴國ニ派遣ヲ命ゼラレタレバ、最近便ヨリ出發ノ筈ナリ。孰レ其中公使ニ御打合スベケレドモ先ヅ以テ御含迄申置クナリ」云々、

同氏ハ此時召命アリトテ入闕ノ支度ヲ爲シ居リタリ。金嘉鎮氏ヲ訪ヒタルニ、爰ニハ兪吉濬居合セ何カ相談中(兪吉濬ハ曾テ朴、金諸氏ト卒先シテ革命ヲ唱ヘタル人物ニシテ、十七年ニハ折柄米國滯在中ニテ、革命ニ參與スルヲ得ズ、歸國後暫ク嫌疑ニ坐シ屏門ヲ命ゼラレ、其後纔カニ許サレタルモ閔氏ニ容ラレズ)ト見受ケラル。予ハ先ヅ一ト通りノ挨拶ヲ了ヘタル後、清兵借來ノ事ニ關スル問ヲ發セリ、右兩氏ハ徹頭徹尾清兵ノ招來ヲ以テ不可トシ、且ツ仄ニ清兵借來ノ說アルヲ聞キ、同志六名ハ借兵ノ不可ナル國家ノ長計ニアラザル主要ヲ擧ゲ、各權門ヲ歴訪シ停止說ヲ主張セシモ、同族ハ恰モ聾ノ如ク其利害ヲ曉ラザルモノ、如ク、又タ實際中ニハ借兵ノ大害ナルコトヲ知リタルモ、殊更ニ曉ラヌ振リスルノミ。何トナレバ全羅地方民暴發ノ此ニ至リシハ本ト地方官ノ貪虐ニ出デタルモノニシテ、其地方官撰擇長シカラザリシ責ハ閔氏一門ニ歸シ、即チ所謂賣官賣職ハ之レガ原因トナリタルモノナレバ、該民亂益々猖獗ヲ逞ウスルノ結果ハ、終リニ閔氏一門ノ地位ニ危険ヲ與フルニ至ルモノナレバ、閔氏ハ己ノ位地ヲ維持スル爲ニハ國家ノ利害ヲ顧ミルニ違アラズシテ、進ンデ袁世凱ト結托シ、袁氏モ亦自家ノ手腕ヲ顯ハサントスル矢先キ、一モ二モナク閔氏ノ請ヲ容レ、結局借兵ヲ決定シタルモノニシテ閔氏ヲ除クノ外我國民トシテ借兵ノ所爲ヲ是認スルモノハ蓋シ一人モアラザルナリ。然レドモ最早借兵ノ事ハ其筋ヨリ閔氏ニ照會セラレ、袁氏ハ李中堂ニ取次ギ終リニ表沙汰ト成リ、將ニ

其兵勇一千五百ハ牙山ニ向テ來ラントス。事已ニ此ニ到レリ、恐ラク朝鮮ノ亡兆此ニ緣由スルニアラザルナキカ予輩ハ今ヤ殆ンド絶望ノ地ニ立タントス、只ダ能フナラバ日清國兩間ニ熟議ノ末、我が朝鮮ニ對シテ中立若クハ保護國ノ資格ヲ與ヘ(英國トノ間ニ密約ヲ結ブコト、之レハ目下ノ行掛上清國政府ノ斡旋ニ一任スベシ)餘命ヲ存スル方法モアラバ至幸ナリ。然ラザレバ我朝鮮ハ必竟東洋ニ於ケル各國ノ紛爭點ト化スルヲ保スベカラズ云々、並ニ閔氏ハ世論借兵ノ不可ヲ嘖々スルヲ慮リ、今日俄ニ清兵上陸見合セ方ノ會議ヲ宮中ニ開キタル由ノ話アリタルモ、大略安氏ノ宅ニテ聞キ得タル所ト同ジケレバ、此ニ略ス(又タ右二氏ハ我が日本ガ之ニ處スル運動如何ト切リニ問ヲ發セシモ予ハ未ダ最近ノ新聞ニ接セザレバ詳カナラザル旨ヲ以テ答辭トセリ)。

歸路左捕盜廳兼扈衛大將申正熙氏ヲ訪フ、同氏ハ以上ノ役目ヲ兼帶スル外、此頃臨時軍務司トハ清官ト交渉シテ軍事ニ關シ萬事周旋役ニテ同氏ト成岐運氏此度擔任セラレタリ。同氏ノ話ニ據レバ「袁氏ノ要求ニ據リ昨日(六月五日)軍馬三十四匹ヲ出シ、今日モ亦百五十匹ヲ出セリ。孰レモ牙山ニ向テ出發セシメタリ。尤モ昨日三十ノ馬匹ハ清巡查四五名、人夫若干ヲ乗セ、本日百五十匹ノ分ハ扈衛廳附ノ騎兵ヲシテ同行セシメタリ。又タ招討使洪啓勳氏ハ目下全州ヲ圍ンデ相對岐シ、匪徒ノ縛ニ就クモノ數多アリトノ電報ニ接シ、巡邊使李元會氏ハ發京後日行三里

ノ處急グベシトノ命令ニ依リ、日行ヲ四里ニ早メ、明日公州(八日)ニ入ルベシトノ報アリ云云」。尙ホ同氏ハ清兵借來ノ事ヲ以テ大不可ト爲セリ、予其理由ヲ問ヘバ默シテ答ヘズ。

袁世凱氏ノ談話

余一己ノ私談トシテ今ヨリ腹藏ナク談話致スニヨリ、貴方ヨリモ何事モ隔意ナク話サレタシ。昨日俄國代理公使ノ話ニ據レバ、我國此度ノ出兵ニ付日本政府ヨリモ當國ニ兵ヲ繰出シ貴國ノ兵ニ拮抗スルト云ヘバ一方ニハ賊兵ヲ討シ、一方ニハ日兵ヲ防ガザルベカラズ、御注意アリタシトノコトニ付、我大ニ笑テ曰ク、目下日清ノ間ニ何ノ理由アリテ兵ヲ交フルノ必要アリヤ。若シ有リトスルモ必ラズシモ此國ニ於テ干戈相見ルノ必要ナカルベシト答ヘタリ。今朝又或ル外人我ニ向テ曰ク、日本ハ支那ノ出兵ニ對シ又必ラズ軍艦ヲ此國ニ送リテ將ニ貴國ニ不利アラントス云々、我曰ク、聞ク日本政府ハ大島公使ヲ派シ、巡查二十名ヲ率キ、軍艦ニ搭シ將ニ來ラントスト。夫レ我國今回ノ出兵ハ當國政府ノ依頼ニ依リ、已ムヲ得ズ之ヲ承諾シタルマデニシテ、我ヨリ之ヲ求メタルニアラズ。素ヨリ日本ガ軍艦ヲ出シ我國援兵ノ景況等ヲ視察スルハ當然ノコトナレバ、此ヲ以テ直チニ我ニ不利ナルモノアラントハ云ヒ難カルベシ。且ツ大島公

使トハ以前ヨリ極メテ親密ノ交際ヲ爲シ、深ク大局ニ達シタル人ナルヲ信ジ居レバ、同氏ニシテ來ラル、ヲ以テ見ルモ、日本政府ノ他意ナキヲ知ルニ足ルベシト答ヘ置キタリ。此外北京ニ於テモ各國公使中我總理衙門ニ向テ種々離間ケ間敷コトヲ告グルモノアリトテ過般同衙門ヨリ注意アリシモ、我ニ於テハ斷乎トシテ此ノ如キコトアルヲ信ゼザルナリ。又日本軍艦ハ戒嚴シテ砲門ヲ開クノ準備整ヒ居レリトカ、又ハ京城ノ日本官吏ヨリ各居留民へ彈藥各三百發ヲ給與セリトカ、種々説ヲ聞キタルコト多シ。然レドモ余以テ謂ラク、我國ノ形勢ハ陸ハ歐洲各國ト接壤シ居ルノミナラズ、濱海ノ地ノミニシテ實ニ七八千里ニ涉リ、自然ヲ防禦スルニ汲々トシテ餘日ナシ、而シテ此國ガ小國ナルニモ拘ラズ、沿海亦七八千里ニ涉ル、故ニ此國ヲ有スルモ之ヲ守リ得ル乎得ザル乎ハ實ニ衆人ノ知ル所ナリ。何ヲ苦ンデ自ラ能ハザルコトヲ爲スモノアラシ、此ヲ以テ見ルモ我國ヲ如何ニ處スルヤハ瞭然タルベシ。然レドモ萬々一日清外ノ國ヲシテ此土地ヲ占領セシムルコトアラバ、東方全局ノ一大變タリ、故ニ一ハ以テ此國ニ於ケル我々ノ貿易ヲ維持シ、一ハ以テ他人ノ手出シヲ防グニ在リ。想フニ日本トテモ我國ト同感ニシテ、先年伊藤伯ト我李中堂トノ間ニ於テ、此國ニ對シ利害相關スルノ點ヲ研究セラレ、日清ノ平和ヲ保ツベシトノ懇談モアリシコトナレバ、此國ニ關スルコトヨリ貴我兩國ハ平和ヲ破ランコトヲ望ムモ決シテ破ブルベカラザルノ關係ナリトス。今ヤ幸ニ大島公使ト不日ニシテ相見ルコトヲ

得ベシ。我ハ今日マデノ事情ヲ漏サズ説明シテ我ガ二心ナキヲ明ラカニスベシ。他人ノ離間説ヲ信ジ、双方隔意ヲ生ズルガ如キコトアラバ、瑣末ノ小事ヨリ遂ニ此國ニ於テ貴我ノ平和ヲ失スルニ至ルベシ。此レ即チ他人ノ策ニ乗ゼラル、モノニシテ、双方ノ不利恐ラクハ此ヨリ甚シキモノナシ。若シ杉村君ニシテ他ノ間言ヲ聽カレ我ニ疑フ所アラバ、何事ニテモ無遠慮ニ尋ネラレタシ、我答ニシテ他日相逢ノコトアラバ實ニ相對スルノ面目ナカラン。請フ君歸リテ之ヲ杉村君ニ語レ。云々。

杉村ノ書簡ト袁ノ應答

慰廷仁兄大人如面、啓者、日來屢承

關照、知會一切、感湧莫名、至此次奉派貴國兵、未悉業由山海關登程來韓否、並聞貴國兵除到牙山船外、另有到群山下船之隊云々、此果屬確毫否、又聞於前日貴國理事前赴南地時、率領七八十名貴國人、內有帶軍器者云、果如是則莫非貴國兵若干、業有先到此地而然者耶、此原屬據風聞而測度而已、即希將前開各節、詳細見示以解迷惑、萬幸々々、大鳥公使大紛可於明後日或後日抵仁、方此公惱之際、瑣瀆清神之處、容再晤謝也、肅此專佈、併廋晚安、不既、

我六月初七日

杉村 濬 頓首

袁大人 祕啓

杉村ノ書簡ト袁ノ應答

袁氏曰ク、只今杉村大人ノ書函ニ接シタルモ、書東ノ回答ニテハ盡シ兼ヌル所モアレバ、足下ノ來館ヲ乞ヘリ。因テ先ヅ右書翰ニ對スル回答ヲ爲スベシ。

我國ノ兵ハ本日ヲ以テ聶氏兵五百名ヲ率キ塘沽ヲ發シタレバ、明日ハ到着スベク、又葉氏ハ兵一千百名ヲ率キ明日山海關ヲ發スル筈ニ付、明後日ハ到着ノ筈ナリ。而シテ右ハ孰レモ牙山ヨリ上陸ノ手筈ナリ。尤モ最初ハ群山へ上陸方好都合ナリシモ、全州已ニ陥リタル後ナレバ、最早全州ニ向フノ必要モナク、又當方ヨリ牙山ニ出迎ノ人員萬端ノ仕度整ヒ居リテ、群山ニハ何ノ用意モ無之故、無論同處へ向フベキ筈ナシ。

次ニ我領事ヲ公州ニ出張セシムルニ付テハ、通信ノ爲メ電信技手一名此ニ屬スル人夫若干其他賄方及ビ從者ヲ召連レタル外、當館ヨリ巡查四名及ビ街上取締ノ巡查十二名ヲ引率シタレバ、合計二十餘名ノ人員ヲ連レ行キタルノミ。決シテ七八十名ノ多數ノ人員ヲ引連レ行キタルニアラズ。又軍器携帯云々ハ只ダ公州着ノ上、唐理事ハ前途探偵ノ爲メ前述引連レタル巡查ト共ニ出張スルコトアルベケレバ、萬一ノ準備ノ爲メ銃器ヲ携帯セルマデニシテ、兵丁云々トハ更ニ關係ナキ次第ナリ。

右等ノ銃器ハ各々護身ノ爲メ所有スルコト猶ホ貴國商人ニ在テモ此位ノモノハ所有シ居ルコ

トナルベシ。

貴國政府へ出兵通知ノ義ハ、昨日李中堂ヨリ電報ヲ發セラレタル由、貴公使へモ貴國政府ニ於テ右知照ニ接セラレタル等已ニ電報アリシコトト想像ス、如何ニヤ。

公使館護衛兵派遣ノ儀通知顛末

六月七日午後三時半頃我政府ヨリ派遣入韓ノ儀既ニ清國政府へ通知済ナレバ、明治十五年濟物浦條約ニ從テ再ビ公使館護衛兵ヲ置ク可ニ付、其旨外務督辦ニ面會シテ之ヲ告グ可シトノ訓令ニ接シタレバ、直ニ外務督辦へ面會ヲ申入レ、彼ノ返答ヲ待テ參署シタルニ主事李鶴圭面接シテ、督辦ニハ急御用ニテ只今參内シタレバ、明日午後面會スベシトノ由故、拙者ハ一應彼ガ忽諾忽變ノ不都合ヲ詰責セシモ其効ナク（此時督辦ノ轎子ハ衙門ノ玄關前ニ有リ、而シテ督辦何レへ參リタルヤヲ尋ネタルニ、人々ノ對フル所一ナラズ、察スルニ衙門内ニ潜匿シタルモノナラン。蓋シ彼一應面接ヲ承諾シタル後、何方ヨリカ我派兵ノコトヲ聞キ込ミ、匆卒ノ際返答ノ定案ナク一時ノ窮策ヨリ面會ヲ避ケタルモノカ）、依テ急ニ人ヲ王宮ニ派セシメ歸署ヲ促シタル處、暫時ニシテ督辦ノ答書ヲ持參シ（此間ノ時間短クシテ王宮へ往復セシモノト思ハレザリシ）餘義ナキ公用アリテ本日ハ面會出來ズ、去リ乍ラ明日屹度面會ス可シトノ趣意ナリキ。依

テ拙者ハ來署ノ大意ヲ李主事ニ漏シタル後「斯ノ如キ要急事件ナレバ、平生トハ違ヒ是非トモ督辦へ面會ヲ遂ゲタル上、我外務大臣ノ訓令ヲ傳ヘザレバ協ハヌ次第ナリ。就テハ明日午前十時ニハ必ラズ面會出來ル様取計ハレタシ」ト申入レ置キ其日ハ歸館シタリ。

翌八日早朝李主事督辦ノ使トシテ來館其述ブル所ニ依レバ「昨午后貴命ノ趣キ直ニ督辦へ申送タルニ、拙者ニハ參内セヨト申來リタレバ、昨夜參内ヲ爲シ、宮中ニ於テ督辦ヨリ親シク使命ヲ受ケ、即夜之ヲ奉ジテ參館スベキノ處、深更ニ付今朝早ク參館セリ、扱テ督辦ノ使命ニハ、此度貴政府ヨリ派兵ノ御通知ハ實ニ意外ニテ、我ガ政府ハ一同驚愕セシ所ナリ。目下漢城ハ甚ダ靜謐ニシテ毫モ氣遣フ可キコトナシ、且ツ南道ノ民亂トテモ最早鎮定ニ垂ントセリ、右ハ此招討使電報ニテ委細御諒悉ナルベシ（此時陰五月三日招討使勝利ノ電報ヲ示セリ）然ルニ貴國政府ハ如何ナル御趣意ニテ派兵セラルルヤ、若シ貴國ヨリ派兵セラルルトキハ、俄、英等ノ各國モ之レニ倣ツテ派兵スベク、左候時ハ我國ノ爲メ却テ危險ヲ感ズルノミナラズ、實ニ不面目ノ次第ナリ。依テ此際貴政府へ通告セラレ兵員ノ上陸ヲ差止メ速ニ引返サル様取計ハレタシ」トノ事ナリシカバ、拙者ハ「我政府派兵ノ一事ハ未ダ公然貴督辦ニ通知セラレタルニアラザレバ本日面謁シテ公然御通知スル次第ナリ、何分ノ意見ハ後日承ルベシ」ト答ヘ、夫ヨリ餘談ニ移リタルニ、李主事ハ我ガ政府ニテハ既ニ清兵ノ援助ヲ要セズト認メタレバ、「六月七日夜清國

政府へ電報シテ兵員ノ上陸ヲ差控ヘラレンコトヲ請求シタル由漏シタリ。」

同日午前十一時統理衙門ニ赴キ外務督辦ニ面接シテ政府ヨリノ訓電ヲ傳ヘタルニ、督辦ハ前述ノ李主事ノ述ベタル如ク、條約上ノ誤解説ト苦情トヲ打混シ永々ト陳述シタレバ、一應ハ明哲ニ辯明セシモ、彼ハ充分條約上拒ム可カラザルヲ承知シナガラ、其意實ニ辭ヲ設ケテ我兵ノ上陸ヲ差止メントスルモノナレバ、素ヨリ當方ノ辯明ニ服スベキ筈無ク、依テ拙者ハ「我が政府ハ條約上派兵衛館ノ權利アレバ、今般其必要ヲ認メ派兵スル事ナリ、而シテ今日我が外務大臣ノ訓令ヲ奉ジ其事ヲ貴督辦へ通告スル迄ノ事ナリ、且ツ派兵要否ノ認定モ我が政府ニ在ルコトナレバ、貴督辦ハ其不必要ナルコトニ付千言萬語ヲ重ネラレタリトテ、我が政府ニテ必要ト認メタル已上ハ貴説ヲ聽クニ及バザルコトナリ」ト斷言セリ。此時督辦申出ノ要領ハ左ノ如キ三點ニ有リタリ。

- 一、近日來南道ニ民亂興リタルモ、漢城ハ極メテ靜謐ナリ、南道ノ民亂モ官軍大捷後賊勢窮縮久シカラズシテ鎮定セントセリ、故ニ今日ハ壬午年（明治十五年）ノ形勢ト素ヨリ同日ノ論ニアラズ、又若シ氣遣フベキコトアレバ本衙門ヨリ衛兵ヲ各館ニ送ルベシ、故ニ毫モ貴國ヨリ兵員ヲ派駐スル必要ヲ見ズ。
- 二、此靜謐ノ日ニ貴政府若シ兵員ヲ派シテ使館ヲ衛ルトキハ、各國之ニ倣ヒ兵ヲ派シテ使館

ヲ衛ルベシ。是レ朝鮮ノ爲ニ危險ナルノミナラズ、實ニ不面目ナリ。且ツ朝鮮ノ危險ハ東洋ノ局面ニ害アル論ヲ俟タズ、貴國ハ我邦ト交際久シク隣誼ヲ重ジ、大局ニ注目セラレ、コトナレバ、斯カル不祥ナル備ヲ作ルコトヲ敢テセラレザルベシ。

- 三、貴國兵丁若シ京城ニ入ラバ、城内人心ノ洶々ハ勿論ニテ却テ意外ノ弊端ヲ開カンコトヲ恐ル。

右談判ハ凡ソ二時間ニ涉リシガ、其中小吏來リテ袁世凱ノ手函（直筆ト認メタリ）ヲ呈シタレバ、督辦ハ速カニ之ヲ懷中ニ收メ、小用ト稱シテ直ニ別間ニ退キタリシガ、再ビ復席シテ前述ノ言ヲ再三繰返シタル末、拙者ハ飽迄貴下ノ申出ニ不同意ヲ唱へ、且ツ貴兵ノ入京ヲ拒ム可シト申出タレバ、拙者ハ我が政府ハ條約ニ從テ兵員ヲ入京セシムルモノヲ、如何ナル方法ニテ之ヲ拒マル、ヤト問詰メタルニ、督辦ハ「之ヲ拒ムトハ兵力ヲ以テ之ヲ拒ムノ謂ニ非ラズ、辭ヲ以テ之ヲ拒ムト云フコトナリ。」ト申出タリ。（右袁氏ノ手函ハ或ハ我ヲ恐嚇スル手段トシテ爲シタルモノニアラザルヤト推測セラル）。當日ノ談判ハ前記ノ通りニテ、彼ハ我兵入京ノ通知ヲ受ケナガラ、種々故障ヲ並べ立テ、終リニ「承知セリ」トノ一言ヲ申出デザル譯ナリ。而シテ我兵上陸差止ノ事ニ就テハ、彼ハ一面駐東京公使ニ電訓シテ外務大臣ニ請願シ、一面ハ官員ヲ仁川ニ派シテ大島公使ニ談判スル方法ヲ執ルコトナラント推測セラル。拙者統理衙門ニ往キ不

在中、別紙ノ如キ督辦手函到達シ、夕刻ニ及ンデ別紙ノ通り照會有リタレバ、九日別紙ノ通り回答シ置キタリ。然ルニ八日夕刻俄國臨時代理公使來訪、目下漢城ノ形勢靜穩ナルニ、貴國政府ガ兵員ヲ派駐セラレンコトハ如何ナル都合ニヤト尋ネタレバ、拙者ハ我國ハ條約ニ據リ警備ノ爲メ公館ニ兵員ヲ置クノ權利ヲ有セリ、右ハ近年暫ク之ヲ廢撤シタルガ、先般來當國內民亂相興リ甚ダ危險ト氣遣ハル、ニ付、我が政府ハ派兵ノ詮議ニ及バレタルコト、推考セラレタリ。拙者ハ永ク當國ニ在勤シテ少シク經驗アルガ、當國ノ變亂ハ不意ニ興ルコト多シ、故ニ決シテ目前ノ靜穩ヲ視テ安心スル譯ニ至リ兼ヌルナリト答ヘ置キタリ。

明治二十七年六月九日

京城ニ於テ 杉 村 濬

風説ニ依レバ清兵ノ先隊ハ既ニ牙山ニ到着シタルモ、上陸ヲ許サレザル爲メ切リニ袁世凱ニ迫リ、袁氏ハ之ヲ閱泳駿ニ轉迫スルモ、國王ヲ始メ政府ノ議ハ之ヲ不可トシテ承知セザルガ爲メ、袁、閔ノ兩氏ハ當惑シ居ルトノ事ナリ。

大鳥公使帶兵入京ノ顛末

大鳥公使ニハ六月九日午後三時頃八重山艦ニテ仁港へ到着、其日常備艦隊旗松島及ビ千代田ノ兩號モ八重山艦ニ先チ入港シアリタレバ、公使ハ艦隊司令官伊東中將ト協議ノ上、公使館護衛ノ爲メ各艦ヨリ砲隊（砲四門）銃隊併セテ四百二十名ヲ上陸入京セシムルコトニ決議シ、即夜傳令シテ兵員ヲ上陸セシメ、銃隊三百餘名ハ翌十日午前四時陸路先發シ、砲隊ハ水路小蒸汽船ニ乗組ミ、漢江ヲ溯リ龍山ヨリ上陸ノ手筈ニテ出發、公使ハ本野參事官外一同ト同午前五時頃陸路出發セリ。然ルニ遇々引續キ前夜來ノ大雨ニテ道路泥濘ヲ極メ、殊ニ平生遠足ニ慣ハザル海軍兵ノ事ナレバ、日没南大門閉鎖前ノ入京ハ如何アラント氣遣レタルニ、案外ノ好結果ニテ、午後七時頃一同無事入京セリ。尤モ水路出發シタル砲隊ハ其前既ニ入京（五時前）ス。朝鮮政府ハ公使ノ帶兵進京ヲ聞キ大ニ恐懼心ヲ興シ、一意之レヲ防止センコトニ力ヲ極メ、京城ニ於テ杉村臨時代理公使ニ向ケ頻リニ派兵進京差止メ方照會ニ及ビタル外ニ、王命ヲ帶ビテ公

使へ面接ノ爲メ外務參議閣商鎬ヲ仁川へ下シタルモ、公使既ニ出發シタル後ニテ面會ヲ得ズ、尤モ政府顧問李仙得氏モ何カ内命ヲ帶ビ其前既ニ下仁シタルナレドモ、是レ亦面會セズ。蓋シ同氏ハ仁川ニ於ケル我派兵入京ノ氣勢盛ナルヲ觀テ躊躇スル間ニ、公使既ニ出發シタルバ、終リニ面會ノ機會ヲ失ヒタルモノト察セラル。然ルニ公使一行ノ麻浦ヲ距ル凡二十町程ノ小村落龍登浦ニ至リタル時、外務協辦李容植氏之ニ出迎ヒ、公使ヲ遮ギリテ頻リニ帶兵入京ノ不可ヲ陳述シ、之ヲ防止セント試ミタレバ、公使ハ一々反駁ヲ加ヘ、且ツ具サニ我派兵進京ノ理由ヲ示シタレバ、彼レモ終リニ其說ニ服シ、公使ニ尾シテ歸京セリ。

明治二十七年六月十一日

公使館護衛兵ノ件ニ付統署督辨ト 往復要略

我代理公使ヨリ公使館護衛兵派遣ノ儀ニ付、六月九日朝鮮政府へ通知シタルニ、同夜外務督辨ヨリ兵員入京差止メ方ニ付請求アリタレバ、之ニ對シ十日杉村代理公使ヨリ來意ニ應ジ兼ヌル旨回答セリ。然ルニ其日又同伴ニ付改メテ督辨ヨリ照會有リ、杉村臨時代理公使ヨリ再ビ請求ニ應ジ難キ旨照覆ス。彼我交渉ノ書簡要略次ノ如シ。

明治二十七年六月十三日

敬啓者刻准仁川來電稱本日上午我大鳥公使抵埠擬於明日午前四點鐘隨帶護衛水師兵三百名由陸路進京因將水師兵登陸緣由特先知照
貴政府等因准此相應具由函達
貴督辨查照可也端此泐佈順頌

公使館護衛兵ノ件ニ付統署督辨ト往復要略

臺社

六月初九日

杉村 濬頓

敬復者刻准

貴來函內開我大鳥公使抵仁埠擬於明日午前四點鐘隨帶護衛水師兵三百名由陸路進京云々等因准此查漢城現甚安靜貴兵丁切不可無故調來各情形昨已面達並行照會旋准

貴政府查核等語在案詎料不移時而兵奇隨至致使我都下人心大生驚慮寔出本督辦厚望之外也我政府自聞

貴公使臨港早派本署參議閱前往勞迎俾叙各情諒邀

貴公使涵亮尙望

貴代理公使速將各項詳細情形電達

貴公使除公使一行隨員外所有護衛水師並勿用卸岸即施撤還以敦切隣友睦免生一城騷訛至切盼禱專此函並頌

日社

甲午五月初八日

趙秉 稷頓

敬啓者適展

臺械悉因

大鳥公使今晨隨帶護衛水師兵由仁進京以致都下人心驚慮云々等因查此次我國派兵進京緣由本署使已於昨日第四十二號公文逐細聲明在案所有承

示各節本署使未便擅行有拂

來意之處即希

貴督辨諒照爲幸崑此泐佈順頌

臺社

我六月初十日

杉村 濬頓

趙大人 臺啓

公使館護衛兵ノ件ニ付統署督辦ト往復要略

大朝鮮督辦交涉通商事務趙 爲

照會事照得本月初六日戌刻推准

貴函內稱大鳥公使現已抵仁擬於明日上午四點鐘隨帶護衛水師三百名由陸進京等語前來當經駁復不准遽動在案本督辦因查壬午兩國全權大臣在濟物浦互訂條約係指爲亂時所用未了用于無事之時都下極甚安靜只可遵行乙酉所訂本衙門章程各款乃貴公使罔念約旨不計時宜遽欲以多兵入我都內大疑人心以本督辦所見實寘我京于險地殊未知其意何居也因此照請貴署理公使將各項詳細情形一面電達貴政府一面派員中途向詳
大鳥公使將所帶護衛水師立施撤以敦友睦而免驚騷寔合公允相應備文照會
貴署使公請煩查照施行可也須至照會者

右 照 會

大日本臨時代理公使杉村

甲午五月初七日 六月十日接、

以書東致啓上候。陳者貴曆日午正月初七日貴公文第十號ヲ以本月初六日戌刻接准貴函內稱大鳥公使現抵仁擬於明日上午四點鐘隨帶護衛水師三百名由陸進京等語前來當經駁復不准遽動在案云

云御申越之趣致拜悉候。查スルニ我ガ政府ハ隨時派兵以テ駐漢我公使館ヲ護衛スルコトハ兩國條約ニ遵照スルモノナレバ、派兵ノ際唯ダ之ヲ貴政府ニ御通告ニ及ブニ止リ、其准允ヲ待ツニ及バザルコトハ再昨日面晤ノ際貴督辦ノ爲ニ之ヲ明辨致置候ニ付、熟々御諒悉之儀ト存候。將又御來文中壬午兩國全權大臣在濟物浦ハ全ク鄙見ト符同不致候。本代理公使ノ見ル所ニ據レバ、置兵備警ノ要否ヲ分別スルコトハ、總テ我ニ在リテ貴方ニ屬セザレバ、貴政府ヨリ擅ニ之ヲ沮スルヲ得ザル儀ト存候。要之這般貴督辦ノ御請求モ前回ト同様ニテ本代理公使ニ於テ遺憾ナガラ御同意致兼候、此段照覆得貴意候 敬具

明治二十七年六月十日

臨時代理公使 杉 村 濬

督辦交涉通商事務 趙 秉 稷 閣 下

公使館護衛兵ノ件ニ付統署督辦ト往復要略

外務大臣ト清國公使トノ談話概要

明治二十七年六月十六日午前十時半ヨリ陸奥外務大臣ハ、在東京清國公使ノ來省ヲ求メ、午后一時半ニ至ル間長時間ノ會見ヲ爲シ、時局ニ付懇談セリ。談話ノ概要次ノ如シ。

外務大臣 前日閣下ハ李中堂ノ訓令ヲ以テ伊藤伯ニ面談セラレタル一條ハ、本大臣同伯ヨリ委

細聞キ及ビタリ、彼ノ朝鮮善後ノ處分ニ付其後未ダ李中堂ヨリハ何モ申シ越サレザルヤ。清國公使 未ダ何タル通知ヲ得ズ。

外務大臣 然ラバ閣下ニ於テ何カ御考案アラバ承リタシ。

清國公使 別ニ今閣下ニ公然申述ブベキ程ノ意見ハ無之、縱令之レアリトスルモ全ク一己ノ意見ニ過ギザル故、閣下ノ高聞ニ達スベキ價値モナカルベシ。然ルニ過日伊藤伯ハ同伴ニ付何カ御意見ヲ抱有セラル、ヤニ承リタリ、右貴政府ノ御意見ハ今日未ダ承ハル場合ニ

至ラザルヤ。

外務大臣 左レバナリ、本日ハ朝鮮國ノ事ニ關シ李中堂ヨリ何事カ申越シタルヤ承ハリ度、亦タ我が政府ノ意見ヲモ御話シ試ミ度、閣下ノ來臨ヲ乞ヒタル次第ナリ。御承知ノ通り朝鮮ハ元來貴國ト我國ト協同シテ扶植セザレバ殆ンド其國安ヲ維持シ能ハザル程ノ國柄ナルニ、方今ハ特ニ東學黨ノ内亂ニ會シ、若シ永ク平定ノ功ヲ奏スルニ至ラザルトキハ、彼邦ノ國歩愈ヨ艱難ヲ極ムベク、本大臣ハ大鳥公使着任後、電報ノ外別ニ書信ニ接セザルガ故ニ、目下内亂ノ有様果シテ如何ナルベキカ委敷キコトハ知ラザレドモ、兎ニ角内亂ハ尙ホ未ダ平定ニ至ラザルナラント信ズ。尤モ朝鮮公使ハ前日モ本大臣ニ對シ内亂已ニ平定シタル様ニ申サレタレドモ、前述ノ如ク大鳥公使ヨリハ未ダ何等ノ確報ニ接セザル所ヲ見レバ、果シテ平定シタルヤ否ヤ甚ダ疑ハシ。之ヲ要スルニ現今ノ如ク日本軍隊ハ京城ニ滯營シ、貴國ノ軍隊ハ牙山ニ駐留シテ未ダ内地ニ進入シタル様子ナケレバ、亂民ハ從令ヒ一敗一勝アルモ、尙ホ諸所ニ屯在シ、何時暴發スルヤ計リ難キ有様ナレバ、若シ荏苒此儘ニ時ヲ移ストキハ意外ノ變亂何方ヨリ起リ來ルヤモ料ラレズ、幸ヒ貴國ト我國トノ軍隊戮力シテ速カニ内亂ヲ鎮壓シ、一日モ早く彼邦ノ禍亂ヲ平定セバ、指懸リタル日清兩國ノ煩累ヲ解クベシト思ハル、此議貴國政府ニ於テ御同意ナルベキヤ、閣下